水張月ありといひ、又い氣更來ありあどいへど、いかゝよや。

○三月（ヤヨヒ）

草木多生の義あり、ヤヨハ多きといふこと、ヨオハヨと約れべ、ヤヨヒといふあり。

○四月（ウツキ）

種月ありといへど、いかゝよや。

○五月（サツキ）

農事ゑいそしむ月あれべ、勤勞月あるべし、又田植うる農業をサといへべ、田植うる月の義あどいへる說もわり。

○六月（ミナツキ）

田植終りて、いとまある月あれべ、五月のいそかしきゑ對して、空月の義あるべし、ゑナとミナとい同音あり或人い雷鳴月ありといひ、又い水月ゑて、田い苗代水をひくあり、あどいへるいいかゝよ

●淮陰侯傳後ゑ書す

司馬遷

大史公曰く、吾淮陰ゑ如く、淮陰の人、余の爲ゑ言ふ、韓信布衣の時ありと雖、其志衆と異あれり、其母死す、貧ゑして以て葬るあし、然るゑ乃行て高敞の地ゑ營す、其勞ゑ萬家を置くべからしむ、余其母の冢を視るゑ、良ゑ然り、假し韓信をして、道を學ひ、謙讓して已の功ゑ伐らず、其能ゑ矜らざらしめべ、則庶幾する哉、漢家の勳ゑ於て、以て周召太公の徒ゑ比して、後世血食すへし、此に出づるを務めず、而して天下已ゑ集て、乃畔逆を謀る、宗族を夷滅せらるゝも亦宜あらずや、

布衣（ふいのこと）　高敞（たかくひろのこと）　謙讓（けんじょうしてへりくだり）　功（こういくまの）　能（のうまいのう）

周召太公（しゅうせうたいこう）へ周公旦、召公奭、太公望此三人　血食（けつしょくそんつゝきて）　集て（じゃうじゆへいていして）

夷滅（いめつ）

●長三洲書帖の跋

野口之布

明治の初め、三洲長君奥越より歸る、時ゑ則其の作る所の書、字字山嶽峰巒の勢わり、既ゑして入りて鳳臺ゑ侍し、氣骨深穩、筆墨の間更ゑ瑞雲祥煙纏繞を見る、蓋し異筆隨變あり、此の書、長君最も意を用ゆる者、其の之れを書するの時異あれり、其爲ゑ書する所の人も亦た異あれり、其の書體又皆異あれり、故ゑ凡そ其書の變皆見る可し、其嘗て經歷する所の時と事と亦た因て以て見る可し、嗟乎余の始め君と相識りしより、已ゑ十餘年、時事變遷を觀ること亦た多し、今此の帖ゑ對し、今昔の感ゑ堪へざるあり

鳳臺（ほうだい）ゑ侍し（じきちらにつかへてへいかに）　奥越（おうえつ）

●楠正成像贊跋

室鳩巢

本朝、名將を論する者、必す楠判官を以て最と爲す、其の奇

や。

○七月（フミツキ）
此月ハ、稲穂やうやう出きる月なれば、穂見月といへるあるべし、又穂含月の約まれるあり、との説もあり。

○八月（ハツキ）
或ハ穂發月、穂垂月あといふ説あり、未詳からず。

○九月（ナガツキ）
稲熟月とも、稲刈月ともいへり、舊説夜長月といふハ誤あり。

○十月（カミナヅキ）
神嘗月ありといふ。

○十一月（シモツキ）
凋月にて、木草のみな凋み枯るゝ月なれバいふあり。

○十二月（シハス）
年の終よて事多き月なれば、多忙月といへることあるべし。

○折字の詩
折字の詩といふハ、一字を折りて二字以上と

策偉勳の迹、圖す可き者多し、是れより先き、本藩今の參議公、狩野某ヨ命し櫻井ヨ子を誡しむるの像を畫き、且つ歸化人舜水先生朱之瑜ヨ請ふて、之か贊を爲る、厥後、常山侯故黄門公、碑を湊川ヨ立て、以て判官の墓ヨ表す、亦た其贊を取り、之を碑脊ヨ刻す、蓋し其の文以て後世ヨ昭示するヨ足れり、今翻かヨ、吾侯、尊尚の盛意ヨ倣ひ、畫工をして判官の像を寫さしめ、因つて舜水先生の贊を書し、以て之ヨ冠す、亦た將ヨ之れを家庭ヨ貽し、以て監と爲さんとするあり、先生ハ明帝の疏屬あり、宗國の傾覆を憤り、諸夏の夷を用ゆるを傷み、中國の粟を食ふを恥ぢて、遂ひヨ海ヨ浮ぶの舉を爲す、其判官の國を憂ひ、賊を疾むの心ヨ視るヨ、殆んと異域ヨして同情ある者あり、後世の子雲と謂ふ可からざる者耶。

本藩　尊尚　疏屬　宗國　異域

長月といふハ誤あり。

○十月（カミナヅキ）
神嘗月ありといふ。

○十一月（シモツキ）
凋月にて、木草のみな凋み枯るゝ月なれバいふあり。

○十二月（シハス）
年の終よて事多き月なれば、多忙月といへることあるべし。

○折字の詩
折字の詩といふハ、一字を折りて二字以上と

先生　●新田、楠、菊地、足利、今川書卷後ヨ書す　頼山陽

一井氏ハ、新田の支屬たり、從て義を擧げ百戰す、敗るゝヨ及で、湖濱ヨ潛伏す、其家零落、獨り一婦人を存す、其舊物を挈げ、京師ヨ來往し、歌を善くす者、加茂季鷹ヨ依る。季鷹余を延て、其家の煞蘆を觀る、刀劍鎧冑ヨ論おく、新田兄弟、及楠氏父子、以下往復の文簡、紛披堆積、條理あるおし。余因て、門生を携へ、其家ヨ就て、之を整齊し、略緒に就くを得たり、又爲めヨ日錄を作り、散佚する無からしむ、其家之を德とし、謝するヨ物を以てせんと欲す、余新田、楠二公の書を請ハんと欲するヨ及んで、新田公の書ハ、皆所謂感狀、一井氏ヨ在て、一紙を少く可からざる者、故ヨ義を擧ぐる時、里見の族ヨ檄するの一書を請ひ得、元弘三年、五月朔日、新田

おすの意よて、秩といふ字を禾は失せてといひ、鴻といふ字を江の鳥といふがごとし。

禾失曾知レ秩。
中心豈忘レ忠。
里魚穿レ浪鯉。
江鳥渡レ秋鴻。
火盡仍爲レ燼。
山高自作レ嵩。
色絲辭不レ絕。
凡虫泣二寒風一。

禾失は秩、中心は忠、里魚は鯉、江鳥は鴻、火盡は燼、山高は嵩、色絲は絕、凡虫は風、とあるあり。

周禾致レ瑞稠。
人壽與レ仙儔。
加馬馳高駕。
求衣擁レ善裘。
夏香蓮綻馥。
秋木葉落楸。
官舍飽レ門館。
三刀幾二九州一。

稠禾は稠、人壽は儔、加馬は駕、求衣は裘、夏香は馥、秋木は楸、官舍は館、三刀は州とあるあり。

小太郎と署す、英氣勃勃、千載生けるが如し、楠公の書い、較工墨を用ゆる豐肥自ら鈔せる一行の歷法を以て、一井氏よ借示するの書たり、當時、鞍馬倥偬乃ち思を此等に覃らく、英雄眞よ測る可からざるあり。又菊地武敏自ら功狀を擧て、船田義昌の薦を請ふの書、皆忠義の蹟裝潢して家に藏し、以て敬仰よ資すと云ふ、近ごろ、西海、田原氏の家よ傳ふる文書を獲て、來り示す者あり、中よ足利高氏が指揮せる半紙書あり、直義よ和して、直冬を討する事を報す、書頗る軟媚人よ可あり、蓋し姦雄の書あり、又今川了俊の感狀あり、亦半紙たり、語辭太だ倨る、當時足利の功臣、諸族を凌轢する者、想ふ可し、余此二者を請ひ得て、卷尾よ綴り、展視する毎よ、唾罵一番、亦快とするよ足るあり。

支屬とはきしんる　潛伏ひそかくるい　零落おちぶれる　紛紜せしのこと　紛披堆積ちぎれて

○作文要法類篇　●跋類　雲洞山水圖よ書す　百二十五

絕、凡虫は風、とあるあり。

周禾致レ瑞稠。
人壽與レ仙儔。
加馬馳高駕。
求衣擁レ善裘。
夏香蓮綻馥。
秋木葉落楸。
官舍飽レ門館。
三刀幾二九州一。

稠禾は稠、人壽は儔、加馬は駕、求衣は裘、夏香は馥、秋木は楸、官舍は館、三刀は州とあるあり。

●雲洞山水圖よ書す

安井息軒

一峯突兀として地を抜て立ち、亂山起伏して、麓を環りて蹠まる。其間煙嵐出歿、老樹蔽虧、綻ぶる者い邃然として澗激し、虛ある者い浩然として、江澄一閣、山嘴よ倚り、茅亭林肩よ跨る、閣よ人あり嗒焉として、榻よ倚つて立つ、方よ止むるを知るの碩人鶴書轍迹を却け、考槃して以て斯よ老ゆ、水心の一艇よ客耦して坐す、豈よ歸來の高士、超然として肥遯し、以て迹を煙波よ混ずる者に非ずや、其の境遊ぶ可く、居る可し、其の人欽むべく、慕ふ可し。是れ越人雲洞其心を畫くものあり、夫れ唯よ其の心を畫く、是を以て逸氣飛動し、

突兀とつこつ　蹠まるとどまる　嗒焉とうえん　考槃こうはん　欽むべくしたむべく　慕ふしたふ

○廻文

廻文といふは先づ頭上より讀み、又更ゑ下より讀むも、章句をあすものゑして、詩、文、和歌ともこれあり、まことゑ文人の一戯ゑして、又自ら其体を爲せるものあり。

○詩の例

螺紅醉頰嬌生暈。
粉蝶廻腰細蹴花。
歌罷欲愁春語燕。
夢餘猶恨曉啼鴉。

この詩を下より讀むも亦一詩を爲す

鴉啼曉恨猶餘夢、
燕語春愁欲罷歌、
花蹴細腰廻蝶粉、
暈生嬌頰醉紅螺、

○同

寒露曉霑葉、晚風涼動枝、殘聲蟬嘒嘒、列影雁離離、蘭色紅添砌、菊花薰滿籬、圓圓月鑑嶺、皎皎水澄池、

これを下より讀めば

池澄水皎皎、嶺鑑月圓圓、籬滿薰花

天眞爛熳點畫畛畦の外ゑ出で、直ゑ古人と徒を爲す、展べて之ゑ對すれば、人をして形身をして、恍然として、山靄水光の間ゑ在らしむ、絶技と謂ふ可し。之を世の巧を形似點染の末に求め、俗眼ゑ媚びて、以て伎を售る者ゑ比するゑ、何ぞ啻ゑ天淵のみあらんや。于嗟乎季家の衣鉢其れ斯の人ゑ在るか。

●鳥居勝高節ゑ死する圖後ゑ書す　安井息軒

吾黨の慷慨にして、奇節を喜ぶ者、尤も瀬川剛司を推す、剛司い中津の人あり、腰帶十圍音吐鐘の如し。酒酣ゑ氣暢ぶる毎ゑ、眉を揚げ、腕を扼し、古今、人の駭く可く、喜ぶ可き事を談し、口角沫を生じ、津々乎として絶へず、一日袖中ゑり、小幅を出し、予ゑ語げて曰く、是れ我藩、鳥居勝高節ゑ死するの圖あり、勝高の事、史策ゑ炳耀せり、然れども猶ほ逸事の傳ふ可き者あり、惜むらくい、世識るもの無きを。請ふ子の爲めゑ之を誦せん、勝高既ゑ援兵の期を報ず、城中歡聲雷の如し、守兵彎貽措を失ひ、走り歸て以て武田勝頼ゑ告ぐ、勝頼大ゑ怒り、命じて城南の青海原ゑ礫し、兩腋を洞さて去る、甲人落合左平治ある者あり、其の忠勇を高しとし、往て之を觀る、其の未だ死せずして十字架を仰くを見て、之ゑ號んで曰く、子の志烈今死すと雖も、千載猶ほ生くるがごとし、請ふ子か圖を寫し、以て予か號と爲さん、勝高既ゑ言ふ能いず、頷するのみ、左平治既ゑ寫し、其の苦楚を憫み、又號んで曰く、謹んで子か惠を領す、請ふ一彈以て報と爲さんと、其の喉を銃して絶つ。左平治の舉、固より奇あり、然るゑ勝高の忠勇以て敵人の心を服するあるゑ非ずんば、孰れか肯て極刑不祥の狀を圖し、以て背旗と爲さんや、然らば則ち、勝

菊、砌添紅色鬱、離離雁影列、嘒々蟬聲殘、枝動涼風晩、葉濕曉露寒、

春遊　張賓

天連遠水養花時、勝景芳情自寫詩、煙鎖鳩桃紅片々、霧籠堤柳綠絲々、泉飛亂石寒捲練、酒賣春風暖颺旗、年少樂遊佳日永、芊綿草長路旁池、

これを下より讀めば

池旁路長草綿芊、永日佳遊樂少年、旗颺暖風春賣酒、練捲寒石亂飛泉、絲々綠柳堤籠霧、片々江桃鳩鎖烟、詩寫自情芳景勝、時花養水遠連天、

○文の例

文の例も亦詩と同じく、下より讀みても一文章を爲すもあり

銚子銘　都良香

多煮茶若、飲來如何、和調体肉、散悶除

高の一死い、天下の耳目を聳動する、當ふ今日傳ふ所の如きのみあらず、豈ふ盛あらずや。左平治、後、紀伊ふ仕へ、五千石を食む、世ふ是の圖を傳へて、以て至寶と爲す、予か友袖子美い慷慨の士あり、謂ふ勝高の子孫改めて忍侯ふ仕ふ、而して是の圖い則ち紀人ふ藏す、宜しく其の一を置て、以て遺烈を表せざるべからず、遂ふ落合氏ふ請て、副本を謄す即ち此の幅あり、予盍ぞ其の由る所を書し以て其の傳を廣めざるを、嗚呼勝高の忠い盛あり、然るふ人但死節の高きを知て、而して未だ其の功の尤も大あるを知らざるあり。天文、永祿の際ふ當つて、武田氏の兵嘗て强し、勝頼其の餘威ふ藉りて、兵を參、遠ふ出す、其の志豈ふ小あらんや、而して信玄の死生未だ晰かあらず、人危懼を懷く、是の時ふ當て、長篠若し陷あらば、凶焰益々熾んふして、織田氏の師い、必ず旋らん、

烈祖神武と雖も、我が兵猶ほ寡し、勝敗の數、未だ知る可からず、故ふ長篠固守して、武田氏の兵敗る、武田氏敗れて、海内削平の形成る、然らば則ち、今日昇平の盛ある、勝高與つて力ありと曰ふも可あり、或い疑ふ、勝高既ふ請を得、師の遲速預しめ、之が緩急を報せず、且つ既ふ已ふ烽報せば、則ち城兵も亦援師の出るを知らん、而るふ强て死地を蹈て、以て、其の軀を計未だ盡さゝるふ表すと、是れ亦然らず、兵士の圍城の中ふ在る、魚の釜中ふ游ぐが如し、勝高烽報すと雖も、未だ師期の在る所を知らず、而して糧食已ふ竭き、人疑懼の意無きこと能いず、夫れ戰い氣あり、疑へば則ち氣衰ろふ、氣衰ふれば則ち守り、固きこと能いず、而して或い不虞の患を生ず、是れ勝高の甘じて死地を蹈む所以あり、且つ勝高の城を出づるや、自ら必死を分とす、其の幸ふして達

痾、

これを下より讀めば

痾除悶散、肉体調和、何如來飲、茗茶煎多、

劍銘

陽文陰精、乃新發レ研、光倒二桂月一、氣通二華星一、霜雪奪レ冷、鬼神畏レ靈、裝レ金鈀レ玉、藏レ匱勒レ銘

これを下より讀めば

銘勒匱藏、玉鈀金裝、靈畏二神鬼一、冷奪二雪霜一、星華通レ氣、月桂倒レ光、研發新乃、精陰文陽、

○歌の例

廻文歌も猶詩文の如くして、上下より通讀し得べきものあり、

あがきよの、とをのねふりの、みあめさめ、あみのりふねの、をとのよきかあ、

むらしはて、みつつゝみぐさ、あいそらし、はあさくみつゝ、つみてはしらむ、

する者い天あり、既よ請ふ所を得れば、則ち城中饑困の士をして、速かよ其の詳を聞き、其の心を安じ、其の守を固ふし、以て援兵の至るを待たしめんと欲す。其の入城の心い、則ち其の出城の心あり。豈よ一死を怖れて以て、初心よ負かんや、死い固より泰山より重しと、其れ勝高の謂か、左平治も亦矯々氣節ある者、宜あり大藩よ收錄せられ、以て其の祀を延ぶるや、我れ聞く、子美の先も、亦長篠圍城中よ在り、其是圖よ感する、宜しく他人を深かるべし、然れども當時守城の子孫、凡そ幾十百人、他人未だ聞さずして、子美先づ之を爲す、則ち其の見る所、常人よ異ある者あり、是れ皆傳ふべきあり。力今海氣惡を爲し、隱然として不測の禍を伏す、予れ孱弱と雖も、其名載せて武辨よ在り、一旦事あらば、恒よ其の死を得すして、笑を勝高よ取らんことを恐る、況んや慷慨激烈剛子と子美とある者よ於てをや、然らば則ち、是の圖の今日に於ける、之を百世の師と謂ふも其れ亦可あり。

奇節よにめづらし　腰帶十圍云々としのかいへがすはりもあり、ものいふことが、はなはだたかしのみのたいなることをいふ

史策しさくもつ　炳耀かよう　愕眙がくちをどろ　磔たくつけ　甲人かいのくにのひと　千載せんねん

にて、いつまでもといふ　頷づく　苦懇くろしみ　極刑むざんなるしおき　背旗せかたてる、　遺

烈しきのこり　副本そへ　騰かきうつすこと　危懼あやぶみおそれる　凶焰あしきほのお　烈祖神

武つよきことせんせのいたつて　不虞はかられることろ　饑困うえてこんする　收錄にてこきやくめに、かきのせること

隱然かくれぬ

●漫遊記程よ書す　粟本鋤雲

眼有りて、其の書を讀むこと能いざるい暫あり、耳有りて其の音を辨ずること能いざるい聾あり、口舌有りと雖も、其の意を達すること能いざるい喑と何ぞ擇べんや。吾曾て歐洲よ遊ぶこと殆んと周年あり、竊かよ書を著して以て、其の見る

歌の例みて下より讀むも同じ言辭とあるものあり

○詩歌俳互譯

白雲似レ帶圍二山腰一、青苔如レ衣負二岩背一、
苔衣きたるいはほの
まろびけん衣きぬ山
の、帶するゐあど

○又

東風吹二百物一、卉木盡知レ春、獨在二銷魂樹一、還同薄命人、
さくあかゐ枯枝
ばかり、春ぞあき、

所を記す。而して其の言たるや大率揣摩臆測ゐ出で、肯綮ゐ中ること能ゐず、他無し、所謂三病吾身ゐ纏るあり、櫻洲中井君、歐洲ゐ遊ぶや其の舌、辯あり、其耳、聰あり、而して其の眼、烱然として明らかあり、故ゐ苑海、米山過ぐる所の處、皆諷咏紀述あり、鑿々乎として能く其の實際を悉す、若し夫れ隱恠潛妖他人の知るゐ及べざる所のものも、亦た猶銳照して、犀燭たるがごとし、何ぞ其の明ゐして、且つ詳かあるや、嗚呼吾老たり、君ゐ隨ふて復た海外ゐ遊ぶことを爲すこと能ゐず、其の書を觀るゐ及んで憮然たる者之ゐ久し。

本間游清

○かくれ里歌

狸が翁をたべかりて、家刀自のあつ物を、くいせつるも、後つひゐ兎の土舟ゐ乘て、波の底ゐしづみ、」猿まろが、かしこびゐ柿をおげて、蟹の甲をうちいりしも、はてい臼のしたゐお

早入二烟霞一去、山中長問レ春、遇レ花終不レ折、恐似二無情人一、
さくらがり、つひゐ
たをらで、もどりけ
り
滿地春風動、山花尙未開、非レ關二氣候晚一、應レ待二主人回一、
まつ人の、ゐりや
箱根のおそさくら

○又

ほとゝきす鳴きつる
方をおかむれべたゝ
有明の月ぞ殘れる

しへされ、」すおはゐるをぢが、枯木ゐ花を咲せつるをうらやみまねて、隣りゐある。かたくゐ翁が、うちさいゐまれつる、」たくひの物語り、いと〳〵はかゐき跡ゐしことゐれども、をみゐとちい、、是を見て、惡をこらさむの心ををこし。をさゐきわちい、、是を聞て、善ゐすゝまむの心ろゐるい。みゐ作者の心しらひゐして、是もひとつの教への道ゐるべし。』舌きられつる雀が、かくれ里の物語も、またそのたくひゐるを。こたび糧亭のゐるじの。そのひゐびたる詞を、清くすてゝ。うまく中の世の、みやびたるすがたゐつゝり直し、書をさへ加へて、板ゐゑらせられしも。もはらをさゐきもの、、をしへの爲ゐれべ、たゝそのまめゐる心ざしと、文の言葉の、たくみゐ、おもしろきとをめでゝ。はかゐきたいむれいざを見ゐおとしぞ。いひゐもときぞ』

○譯して
一盞い月がおいたか　ほとゝきす
○又
あつくさやつはものどもかゆめのあと
○譯して
ものゝふの草むすかばねとしふりて秋風　さむし桔梗かはら
○讀書十六觀　明陳繼儒

昔人古を嗜む者い、上は層崖よ梯し、下い窮淵よ縋し、凡碑版銘釜まろ麻呂と書き、人の名の下に用ゆる詞おれど　かたくあ固拗の義にて、いぢわるきこと　もも、てゝよゝ、借りて賦に用ひたり　さいおまれかしやくせとる　心しらひこゝろがまへといふ意　もとさだれおしごとおどゝひおんするおかれといふ意

●枕草子の跋　清少納言

もの暗うおりて、立字もかゝれずおりたり、筆もつかひはてゝ、これを書きはてばや。此さうしい、目よ見へぬ心よおもふ事を、人ややは見んとすると思ひて、閑々おる里居のほどよ、かきあつめたるを、不意、人のためよ便おき言過しおどしつべき所々もあれば、能匿しおきたりとおもひしを、おみだせきあへずこうおりよけれ。宮のおまへよ、内大臣伊周公の、奉りたまへりけるを、これよ何をかゝまし。上のおまへよい、史記といふゝみをおんかゝせたまへる。おどのたまはせしを、枕よこそいし侍らめと、申えしかば、然得よ、とての文、皆搜りて之を傳ふることをおし、寵するよ芸藪を以てし、襲ぬるよ縹緗を以てす、其典籍の癖、此の如し、余の鄙少、好むところをとり、頗異冊を藏す、毎よ欣然として子弟よ謂て曰く吾未見ざる書を讀めば良友を得るが如く、既よ讀みし書を見れば故人よ逢ふが如し、吾性賓客を樂んで、悔尤を憚る、庶幾くい此よ仗りて、其れ老てたまはせたりしを、わやしきを、故事や何や、とつきせずおほかる紙のかずを、かきつくさんとせしよ、いと物おほへぬことぞおほかるおり。大かた、これは世の中よ興しき事、人の愛たしおど思ふべきおど、おは擇いで、、歌おどをも、木、草、鳥、虫をも、いひ出たらばこそ、思ふほどよりわろし、心見へおり、ともそしられめ、只心ひとつよ、おのづからおもふことを、たはふれよかきつけたれば、物よたちまじり、ひとおみ〳〵おるべき耳をもきくべきものかはと、おもひしよ、はづかしきおども、見る人い、のたまふおれば、いとわやしくぞおる也。ぜよそれも理り、人のよくむをもよしといひ、ほむるよもあしといふい、心のほどこそおしはからるれ。たゞ人よ宮奉りたるおたてまつる　上いちでうてんわうを　枕よ云々せいしやうなんのこうたう　僧き也。

戸を閉づへきか、と乃竹窓の暇より於て舊聞を抽臆し、讀書十六觀を纂む、蓋浮屠氏の淨土を修むる、十六觀經あり、而して觀止まれり、

○呂叡可嘗て云ふ、書を讀むに多かるべからず、一字を讀み得ぺ、一字を行ひ取れ、と伊川も亦嘗て言ふ、一尺を讀み得るは、一寸を行ひ得るに如かず、と書を讀む者に、當に此觀を作すべし、

●書項羽本紀之後

司馬遷

太史公曰吾聞之周生曰舜目蓋重瞳子又聞項羽亦重瞳子羽豈其苗裔邪何興之暴也夫秦失其政陳涉首難豪傑蠭起相與並爭不可勝數然羽非有尺寸乘勢起隴畝之中三年遂將五諸侯滅秦分裂天下而封王侯政由羽出號爲霸王位雖不終近古以來未嘗有也及羽背關懷楚放逐義帝而自立怨王侯叛已難矣自矜功伐奮其私智而不師古謂霸王之業欲以力征經營天下五年卒亡其國身死東城尚不覺寤而不自責過矣乃引天亡我非用兵之罪也豈不謬哉

重瞳子　めにひとみがふたつあるひとのこと　苗裔　びょうえいしょうのこと　蠭起　ほうきしょうりいくさおこしてでいくること　霸王　はわうだいめいらのこと

○倪文節公云く松の聲、澗の聲、山禽の聲、夜虫の聲、鶴の聲、琴の聲、棋子の落つる聲、雨の階に滴たるの聲、雲の窓に洒ぐ聲、茶を煮る聲は、皆聲の至りて清きものなり、而して讀書の聲を最とす他人の讀書の聲を聞かぺ、已に喜びを極む、更に子弟讀書の聲を聞かぺ、則喜び言ふに勝ふべからざるものあり、又云く天下の事に、

●書狐化美人圖

藤森　弘莊

粉白而黛綠、被錦衣曳紅裙、簪花而立、一笑百媚、視者魄視、逢者魂迷、然諦視其後、則其尾之毳毳者来全化也、嗚呼是幸未逢群犬耳、若使群犬逢之、則將狂狺奔突、噬而碎其腦、當此之時、雖鼻伏以求免、不可得也、然天下以幸免者、何獨狐而已哉、此圖未詳何人所作、其或冷眼觀世者、悲而欲有警之邪。

粉白つけること　黛綠　びたいのみどりいろ　紅裙　こうくん　諦視　よくよくみること　毳毳　けのふさふさとしたこと　鼻伏　はなをふせること　冷眼　れいがん　冷眼視　れいがんしみること

●書渡邊華山蟲魚畫後

藤森　弘莊

華山老人、好奇終遭奇禍、人常悲之、顧不知其憂國憤世之心、爲好奇之所由也、此帖藏在足

利害常ゝ相半ばす、全利ありて少害なきものは唯々書、貴賤貧富老少を問はず、書を觀ること一卷なれば、則一卷の益あり、書を觀ること一日なれば、則一日の益あり、故ゝ全利ありて少害なきものあり、と書を讀む者ゝ當ゝ此觀を作すべし、

○范質仕ゝ從ひてより、未嘗て卷を釋てず、曰く嘗て異人あり、言ふ吾當ゝ大ゝ用ゐらるべしと、苟も此言の如くならば、學術なく何を以てか之ゝ處せん、と書を讀む者ゝ當ゝ此觀を作すべし、

○洗攸之晩ゝ典冊を好む、常ゝ曰く、早く躬達命ありることを知らば、恨むらくゝ、十年書を讀まざりしことを、葉石林云く、後人但書種を斷たざらしめば、鄉黨の善人となりて足れり、若し夫れ成否ゝ則天ありと、書を

利、須永竹溪、家ニ所レ書蟲魚、十二頁、皆入ニ妙品一係ニ以ニ小詩一、亦十二頁、審ニ其辭旨一、蓋有ニ憂憤之意一、假ニ游戲一而發ニ洩之一耳、嗚呼先ニ天下之憂一而憂、彼所レ謂、豪傑之士也、豈唯其書畫可レ傳而已哉、觀了慨然久レ之乃書。

●趙松雪書跋

聚レ書藏レ書、良非ニ易事一、蓋觀レ書者、澄レ神端レ慮、淨レ几狹レ香、勿ニ捲レ腦一、勿レ折レ角、勿ニ以レ爪侵ニ字一、勿ニ以レ唾揭レ幅、勿ニ以作レ枕、勿ニ以夾レ紙、隨損隨修、隨開隨掩、則無ニ傷殘一、

●書ニ地獄圖一後　安井息軒

死者有レ知乎、我不ニ得而知一之也。死者無レ知乎、我不ニ得而知一之也。塊然之形化爲ニ穢土一而魂氣則無レ所レ不レ之乎、我不ニ得而知一之也、倏忽乎來、倏忽乎去、禍福糾纏孰知ニ其極一、所レ可レ知者獨生人之道而已。今觀ニ此圖一、凡今生所レ爲、皆有ニ報復一、錙銖計間ニ矣、然則不ニ唯死者有レ知、又別有ニ一世界一、以爲ニ銖量如ニ刻吏一、鍛レ獄而刑戮拷掠之慘、更甚ニ於此此間賞罰之地一也、吁、可レ懼哉。然浮屠氏以ニ輪廻一立レ說來世之於ニ現在一、猶ニ今我之於前身一、我既不レ知ニ前身之爲ニ何者一、則來世豈能知ニ前身之爲ニ我哉、然則、今之與レ後、各一物耳、其禍、其福、我何與焉、而世人背ニ君父一、蔑ニ人倫一、以求ニ不レ知何物一者之福、何其妄也、故聖人說レ生而不レ說レ死、語レ道而不レ語レ怪至矣。

●書ニ宮本武藏畫一後　芳野金陵

讀む者當よ此觀を作すべし

○孫蔚、家世々書を積む、遠近來り讀む者、恒よ百餘人あり、蔚爲めに衣食を辨ず、書を讀む者い當よ此觀を作すべし、

○東坡、王郎よ與ふる書よ云く、少年學を爲す者、一書毎よ皆數次之を讀むことを作せ、當よ海よ入るが如くあるべし、百貨皆有り、人の精力兼ね收め盡く

梵相奇古、雄偉筆勢、活動精采、逼レ人、是爲二勇士宮本武藏所レ畫也。遠而觀レ之成然縣解出定之妙相、徐而察レ之、宛然八面應敵之風神、未レ知祖師假二勇士之手一而示二己相一耶、將勇士假二祖師之相一以畫二己神一耶。畫心畫果信矣。如竹翁珍襲比二之拱璧一公退之暇、靜坐對レ之、蓋有下如二清風颯然來、灑二者一。亦閑中一適哉。其離レ坐吾將二往而參一焉。不レ知翁其許レ之否。

◎策類

策い籌あり、謀あり、支那の試驗よ對策と云ふとは、やゝ異あり、陸機と云ふ所の警策あとより來りしもの歟。この体い、大凡馬の策よ因て、疾く行くが如く、文、片言を資りて、理明かよ、一言衆辭の中よ入れべ、之を策して馬を

取ることを能いす、但其求めんと欲する所のものを得んのみ、故よ願くい、學者毎次一意を作して、之を求めんことを、如し古今の興亡、治乱、聖賢の作用を求めんと欲せべ、且只此意を作して之を求めて、餘念を生ずること勿れ、又別よ一次を作し、事迹文物の類を求むるも、亦かくの如きあり、若し學成りて八面敵を受くるい、渉

警むるが如きを要す。

●養才策

治亂の用、唯人才を急と爲す、故よ國風兎罝を歌ひ、小雅菁我を美みす、子游武城よ宰とあり、先づ人を得たるを問ふ、仲弓、季氏よ宰とあり、首として賢才を擧ぐ、夫の張耳厮役の俊、謝玄履屐の才よ至る、並びよ前史よ稱す、乃知る才俊の士、邦よ益あり、家よ用あり、大小を論ずる無きあり、是を以て、古今の人主、孰か、才を得て、之を養ふを欲せざらん、其の小ある者も、猶ほ且つ獲ること能いす、況んや其大ある者をや、是よ於てか才無きの歎あり、以て古今の人、相及べずと爲す、豈よ厚く天下の士を誣ひざらんや、夫れ今の天下い、乃古の天下あり、日月星辰の運、草木鳥獸の殖、今未だ古よ異あらず、人材に至りて何ぞ獨り然らざらん、求めて之

獵する者と日を同じうして語るべからずと、書を讀む者い當ゑ此觀を作すべし、

○董遇、經書を挾み、間ゑ投して習誦す、人の從學する者、肯て之を教へず、云く先づ百篇を讀みて、義自ら見ゆと、幾城云く、書を看るい藥を服するが如し、藥力多けれゞ自ら行くると、書を讀む者い當ゑ此觀を作すべし、

○江祿書を讀んで未竟を養いゞ、人材固よりあり、唯其れ之を求むるの術を盡さず、之を養ふの策至らず、賢ありと雖も、自ら顯いすを得ず、才ありと雖も、自ら効すを得ず、是を以て泯々あるのみ、然れゞ則之を求むる何の術ある、之を養ふ何の策ある、曰く是れ妙術あし、奇策あし、唯之を好し、之を愛すれゞ則ち求めずして賢至り、養いずして才出づ、況んや之を求め之を養ふゑ於てをや、古の人主、賢を好し、才を愛すい、大舜ゑ若くいあし、既ゑ已ゑ八元八愷を舉げ、又五臣ゑ任じて、天下を治む、之ゑ繼て成湯の伊尹、武丁の傅說、以て周初の十亂、漢初の三傑、雲臺の二十八將、登瀛の十八學士ゑ至る、或い之を夢卜ゑ得、或い之を羈旅ゑ舉げ、或い之を卒伍奴隸の間ゑ擢ず、一時茅茹して進む、物其好む所、愛する所ゑ聚まる、固より其理あり、蓋し人主の才を養ふ、猶ほ父母の子を養ふがごとらず、急速ありと雖も、必卷束齊整するを待て、然して後ゑ得て起つ、故ゑ損敗あし、人其求め假るを厭はず、齊王攸人ゑ就きて書を借れゞ、手づから其誤りを刊りて然して後ゑ之を返す、書を讀む者い當ゑ此觀を作すべし、

○劉顯時ゑ學府と稱す、每ゑ孔奐と共に讀論し、深く相難ず、乃奐の手を執りて曰く、

し、父母の子を養ふゝ誠ゑ之を愛す、故ゑ呱々の啼、其の苦しむ所を知り、蠢々の動、其欲する所を知り、之を鞠し、之を闊し、閔々として其長育を望ひ、既ゑ育し、既ゑ長ずれゞ、乃ち師傅を擇びて之を教ゆ、家ゑ笞杖あり、學ゑ榎楚あり、務めて之を善ゑ納れて後ゑ子、成立することを得る、蓋しその之を愛すること深き故ゑ、之を慮ることゝ周きあり、父母の子ゑ於ける、孰れか然らざらん、唯慈母祇憤の愛ゑ溺れ、往々敗子あり、君子い取らず、是故ゑオい養いずんゞあるべからざるも、亦徒ゑ養ふ可からず、愛せずんゞあるべからざるも、亦徒ゑ愛す可からず、且つ父母の子に於る、愛せざる所あきも、尤も其賢ある者を愛す、人主の臣ゑ於る養いざる所あきも尤も其の才ある者を養ふ、然るゑ之を高位ゑ登せて、之ゑ大任を授くるゑ至りてい、必ず先づ之を諸難ゑ歷試すること、堯の

伯階墳索悉く仲宣に與ふ、吾當に彼の禁君を希ふべし、足下王氏に愧づることあるんべ、保つ所の書籍載て以て相付せんと、書を讀む者い當に此觀を作すべし、

○蘇子美、外貌杜祁公の家に客たり、毎夕書を讀むに、一斗を以て率とおす、密に之を覘ふ、子美漢書張良の傳を讀みて、良客と秦皇帝を狙擊するに至り

舜に於る、舜の国に於るが如き是れあり、然るに此れ皆聖を以て聖を遇す、固より當に然るべきあり、若し夫れ黄石公の倨傲、鮮腆い子房の才を爲す所以あり、漢の高祖の踞洗謾罵、い英布黥生を鼓鑄する所以あり、齊の神武、慕容紹宗を用ゐんと欲す、皆先つ之を黜退と欲す、唐の文皇、李世勣を用ゐんと欲す、皆先つ之を黜退す、明の太祖、解縉の才を高しとし、肯て遽かに用ゐず、曰く進學十年、大用未た晩からざるありと、方孝孺の端莊を喜ぶも亦肯て遽かに用ゐず、曰く當に其才を老す可しと、これ皆英雄駕御の方、聖賢誠を以て物に接するの道と、相背馳す、然るに其能く人才を養成して、之を用ゐるや觀る可し、昏闇の主い則ち然らず、遽かに人言を聽て、之を進め、遽かに讒說を信じて之を退く、之を進めて、諸を膝に加へんと欲し、之を退けて諸を壑に擠せんとするが如し、是を以て才俊の士、

て、掌を撫つて曰く惜ひかな之を擊て中らずと、遂に一大白を滿引す、又讀みて、良の曰く始め臣、下邳に起り、上と留に會す、此天以て陛下に授くといふに至りて、又案を撫つて曰く、君臣相遇ふ、其難きこと此の如しと、復一大白を舉く、公笑て曰く、此下物あらば、一斗だも多しとするに足らざるあり、と書を讀む者は當に此觀を作す

肯て之が用を爲さず、甚しきものい北のかた胡に走らざれば則南のかた越に走る、漢の中行說、宋の張元、及我が大江賢元の如き者い、史に書するを絶たず、嗚呼色の美ある者い衆女の嫉む所と爲る、才の美ある者い衆士の嫉む所と爲る、俊傑の士、廉幹の吏、往々世に容れられず、人主にして之を愛せずんべ誰か又之を愛せんや、馬の駿ある者、或い泛駕の患あり、士の俊ある者或い違俗の累あり、人主或い一たひ之を用ゐて其の跅弛を憚かり、擧げて之を棄つ、未た嘗て矯揉して之を規矩に入れず、烏ぞ其才を成して其用に適することを得んや、但人主の色を好み、馬を愛するい則多し、其の美ある者に遇へべ讒妬を排して、之を採納し、其の駿ある者に遇へべ、銜勒を嚴にして之を駕馭す、是を以て、姬姜下陳に闕けず、駃騠上廐に乏しからず、賢才に至りてい獨り然らず、故

べし、

○黄涪翁曰く、書を壁て韻を覆ひ、史を裂きて窗に粘す、誰か之を惜まざらん、士、窮逐ふ厄せられて、寃罪ふ陷落すれば、聞く者憐まず、遇ふ者顧みず、其死生を聽かば、是れ紙上の字ふ賢ふして、腹中の文ふ費す、哀れあるかあと、書を讀む者は當ふ此觀を作すべし、

○紫君謨、嘗て少與鑒ふ書して云く、李及、抗ふ臣以て才を養ふい奇策あく、妙術あく、必ずや、德を好むと色を好むが如くし、才を愛すること馬を愛する如くせい、則士の賢ある者、才ある者、彬々然として出ると爲す。

◎議類

議い宜あり、周く爰ふ諮ひ謀りて、以て事宜を審ふする謂あり、もと、群臣相集りて、廷議することより起れり、大要、經ふ據て理を析ち、時を審ふし、勢を度るふあり、故ふ文い辨潔を以て能とし、繁縟を以て功とせず、事い明覈を以て美とし、深隱を以て奇とあさいるを、乃ち深く議体ふ達する者とするあり、又義い理あり、其理ふ本づきて之を疏す。

●晉の文公原を守るを問の議

柳宗元

晉の文公既ふ原を王ふ受く、其の守を難して、寺人勃鞮ふ問ふて趙衰を卑しむ、余れ謂ふ、原を守るい政の大ある者あり、以て天子ふ承け、覇功を樹てい、命を諸侯ふ致す所あり、宜しく謀つて嫌近ふ及んで以て王命を忝しむべからず、而して晉君、大任を擇んで、朝ふ公議せず、宮ふ私議す、博く卿相ふ謀らずして、獨り寺人ふ謀る、或衰の賢い以て國の政を守り、敗を爲ざるふ足れりと雖も賢を賢ひ政を失ふの端、是ふ由て滋し、況んや其の時ふ當て、謀議の臣ふ乏しからず、狐偃謀臣たり、先軫中軍ふ將たり、晉君疏して、咨いす、外ふして求めず、乃ち卒ふ、内豎を定む、其れ以て法と爲す可けんや、且つ晉君、將ふ齊桓の業を襲ふて、以て天子を翼けんとす、乃ち大志あり、然り而して齊桓い管仲ふ任じて以て興り、豎刁を進めて以て敗る、則ち原を獲り彊を啓き、適其の始政以て諸侯を觀視する所あり、而して乃ち其の興る所以ふ背き、

州ふ知たりし日、白集一部を市ひ、乃終身の恨とあす、郎基請愼營む所あし、嘗て曰く、官ふ任ずるの所、木枕だも亦作るとを須ゐず、況んや此より重きものをや、唯頗人をして書を寫さしめんのみと、潘子義之ふ書を遺りて曰く、官ふありて書を寫すも、亦是れ風流罪過、基、答へて曰く、過を觀て仁を知る、斯れ亦可ありと、書を讀む

者い當よ此觀を作すべし、

○米紫陽曰く、漢の吳恢竹青の油を拔きて、漢書を寫さんと欲す、晁以道嘗て公穀傳を得んと欲す、遍く求むれどもこれあし、後一本を得て、方よ傳寫す、今人の連寫するを得るや、自ら厭憎す、書を讀むこと苟簡ある所以ありと、書を讀む者は當に此觀を作すべし、

○趙季仁、羅景綸よ謂て曰く、某生平三の願あり、一い世間の好人を識り盡くさんことを願ひ、二は世間の好書を讀み盡くさんことを願ひ、三は世間の好山水を看盡くさんことを願ふと、羅の曰く、盡くさんことは安そ能くせられん、但身到る處、放過するあからんのみと、書を讀む者は當よ此觀を作すべし、

○顏之推曰く、吾聖賢の書を讀む毎よ、未嘗て其の敗る所以を跡す、然り而して能く諸侯よ霸たるものい、土を以てすれゞ則ち大あり、力を以てすれゞ則ち彊し、義を以てすれゞ則ち天子の冊あり、誠よ之を畏るれゞあり、烏んぞ能く其の心服を得んや、其の後、景盈、以て衛鞅よ相たることを得、弘石以て望之を殺すことを得る、之を誤まる者い、晉の文公あり、嗚呼賢臣を得て、以て大邑を守るい、則ち問、問を失ふよ非す、舉、舉を失ふよ非ざるあり、然れども猶當時よ羞ぢ、後代よ陷ること此の如し、況んや問と舉と又之を兩失する者、其れ何を以てか、之を救いんや、余故よ晉君の罪を著して、以て春秋許世子止晉趙盾の義よ附す。

寺人官名宦官のこと自宮して後宮に出入す　霸功よりありたるてがら　齊桓の業霸業あり

㊤語學校設立の議

増田于信

鐵火を以て、敵を征するい、軍國の重事あり、教育を以て、民を化するは、綏撫の要義あり、今や皇師、清國を征して、海外よ新版圖を開けり、實に千古の盛事よこそ、さてその地よ政法をしくと共よ、起さゞるべからざるは、教育あり、然るよ新附の民よは、宿弊の存するあり、たとひ政法を以て、形体を變更すとも、その舊習を除くことを得じ、さればよろしくその根本よ立ち入りて、教化を盛よして、我國語を普及せしめ、以て俗をかへ、風を移すを、新政の大要義とせざるべからず、かの英國の如きは、多く領地を海外よ求め、つとめて英語の普及をはかりしかば、今や英語の行はるゝもの、全地球よ半せり、英國の雄を宇内よ振ふは、全くこれがためのみ、國語國文の風化よ益ある、實よかくの如し、これ吾人が第一着の事業としてかの地よ帝國語學校を設けんと欲する所以あり。（以下略）

て衣を肅へてこれに對せずんばあらず、其故紙五經の詞義及び賢達の姓名あらば敢て穢し用ゐざるあり、温公其子に謂て曰く、賈豎貨財貝を藏す、儒家惟々これのみ、然らば當に實惜するを知るべし、今釋子老氏猶其書を尊敬するを知る、豈吾儒を以て反りて如かざらんや、趙子昂の書跋に云く書を聚めて書を藏するは、良に易事にあらず、善く書を觀る者は、神を澄まし慮を端し、几を淨ふして香を爇く、腦を捲ふこと勿れ、爪角を折ること勿れ、爪を以て字を侵すこと勿れ、唾を以て幅を揭くること勿れ、以て枕とあすこと勿れ、以て夾刺すること勿れ、隨ひて損すれば隨ひて修め、隨ひて開けば隨ひて掩ひ、後の吾書を得る者、並に此法を奉贈すと、書を讀む者は當

宿弊

●衆議院の建議

衆議院は、憲法の規定に準據し、茲に內閣に向て左の建議を爲す、謹で按ずるに、征清の詔勅は宏遠にして正大なり、森嚴にして公明なり、曠世の雄圖、百年の長計、寔に此に外あらず、苟も帝國の臣民たるもの、孰か聖旨を奉感し、鞠躬盡瘁以て報國の誠を效さゝるあらんや。

衆議院か、帝國臣民の代表者として、敢て補弼の重責ある、內閣大臣に望む所は、征清の聖旨に遵ひ、全局の大捷を奏し、東洋の和平を回復し、以て國光を宣揚するに在り。乃ち清國を膺懲し、之をして改悛悔悟自ら禍心を杜絕せしめ、而して我國は他の干涉の爲めに、終局の大目的を沮壞すること莫く、以て我帝國の威信と利益を完ふし、以て國家千載の鴻圖を定め、以て東洋の平和を永遠に扶持するの擔保を掌握するに在り。

是れ實に、敬聖文武なる、天皇陛下の帝國議會に賜はりたる聖勅の洪旨に、帝國臣民の大希望あり、故に衆議院は、敢て之を言明し、敢て內閣大臣に向て、其奉行實踐を促し、此の大希望を達せんか爲め、上下一致和協、以て事に斯に從はんと欲す。故に凡そ軍備を充實する事項は、緩急宜しきに從ひ、其施設を爲さんことを期す。

恭しく惟るに、天皇陛下は、列聖の遺烈を紹ぎ、中興の偉業を擴め、清國の暴慢を赫怒し、爰に六師を發し、大纛を進め、戎事を宸裁し給ふ。是に於て、學國の臣民、皆心を一にし、力を戮せ、同仇敵愾、聖旨に奬順し、遍かに大捷を遂げ、目的を達せんと欲せさるはなし、是れ衆議院の丹誠を表し、赤心

を披き、從來趨向の異同ありしを問はず、敢て內閣大臣に向て此建議をなす所以なり。

今や帝國旭旗の向ふ所、攻めて取らざるなく、戰ふて勝たざるなく、水陸風靡し、敵國震慴す。然れども前途を思量すれば、局面愈々大に、事端愈々滋からんとす、若し或は意外の障礙に觸著し、中道にして、交戰の目的を沮滯するが如きあらば、實に國家の大事を誤るものなり。故に衆議院は、補弼の重責ある內閣大臣に向て、能く外政の機務を操縱し、漸を防ぎ、微を杜ぎ、誓て上は征清の　聖旨を對揚し、下は國民の輿論を貫徹せしめんことを望む、茲に之を建議す。

◎引類

引とい、詩引と贊引とあり、單に引と稱するい、大略序の如くにして、稀簡單なり、蓋し序の舊濫なり。

○作文要法類編

●作文秘法

◎文は彩色あるを要す。文はあやなり彩なり、故に詞の彩色あるものを文章といふ、されば二色以上の彩色あらざれば文とは云はぬなり、たゞ一色なれば何編綴りても文章とは云はぬなり、文を作る者宜しく燦然たる彩色あらしむべし、

◎文は達意を主とす。聲音を借りずして、己の思想を人に通ずるい

●鐵洲遺稿の引　小山春山

冬夜寥闃、寢ぬること能はず、燈火に危坐して、鐵洲の遺稿を閱し蟲鳴の如く、鬼哭の如し、卒に讀むこと能はず、卷を掩て、歎じて曰く、鐵洲平素、喜んで都門繁華の光景を詠す、春葩秋艷、人の心目を悅ましむ、余每に之を誦し、未だ嘗て欣然として絲竹を聽くが如くならずんばあらざるなり、前にい則我を娛ましめ、今い則我を哀しましむ、同一鐵洲の詩なり、而して聽く者哀樂相懸る此の如きい何ぞや、呼鐵洲亡し、其の詩を讀みて其人を思ふ、情の感ずる所、爾らざるを得ず、余之を師に聞く、曰く喜びて讀めば則樂し、憂ひて讀めば則哀し、とこれ是を眞詩と謂ふ、斯稿の若きい則庶幾からんか、時に風雨驟に至る、敗蕉淅瀝として余が悲を助くる者の如し、戊寅十一月念六日守少陋廬に題す。

文章あり是れ文い意を達するを本とする所以よして、意を達せさるい文よあらず、意を達せされ〻文の用をあさず、己の思想を他人よ通ずる能いざるあり、注意すべきことよこそ、

◎文い氣概あるを尊ぶ。文いもと詞を寫したるものあれ〻、誠心よりいづる文い、自ら氣概ありて、人を感動せしむるよ足る然らざれ〻意を達すること能いざるあり、

◎章、句、段、節の事

文を作るよ章、句、段、節のけじめを知らず、文字を並べたるばかりよては、文とはあらぬあり、それ章は節と云ふ如く數句の切れ目あり、句は數語の切れ目あり、言を重ねて語とあり、語を重ねて章とあり、句を重て章とあるあり、而して單よ一句あるを短文と云ひ幾を以て、之を啓發することを旨意とあす。某の辯或い辯レ某いづれも同じ義あり。

●經史字引小引

加藤　櫻老

寥閲るしること　敗蕉漸瀝ばせをのやぶれたはにあめのたりておとがすること

子弟不レ讀レ書則、畢生樸魯、不レ免レ爲二野蠻一矣、苟欲レ讀レ書、不レ可レ不レ知レ字也、近來文運浮興、字書之出也、不二啻五車一、而初學欲レ知レ字、其要在二簡便一、此書直以三字書二字レ之、九經三史、資二諸左右一、尤爲二簡便一、其惠二子弟一也大矣、古人云、一字抵二千金一、夫一字而、有二千金之益一則、此一書亦、有二億萬金之益一也、

九經七經及周禮儀禮を云ふ　七經とハ周易、毛詩、尚書、春秋禮記の五經と公羊傳穀梁傳なり　三史史記、漢書、後漢書

◎辯類

辯い判別あり、其字、言よ從ひ理よ從ふ、蓋し其言行の是非眞僞を執り、大義を以て之を斷ずるあり、其原い實よ孟子、莊子より出づ、至當不易の理よ本き、反復曲折の詞

●楠公辯

賴山陽

我大儒某氏、嘗て楠公を議して曰く、俗人正成を以て武侯よ比するい非あり、武侯道德を懷抱し、三顧して起つ、正成い則權謀奇誦、危を行ひ成を求む、正成功臣の徒たるを免かれず、安んぞ武侯に比するを得ん、予始め之を人よ聞く、即ち曰く、是れ某氏の論よ非ざるあり、已よ其書を讀て信ず、則ち之を讀む毎よ、未た嘗て切齒せずんべからず、夫れ公をして亮の地よ在らしめば、則ち亦亮の如くせん、亮の時天下瓜分す、而して公の世い、天下則皆一王の赤子あり、狗鼠の賊、我か父母を辱しむ、何ぞ狂奔氣を盡し、梃を持して之を逐いざるを得ん、召さずと雖とも、出でゝ可あり、君の土よ食み、

章もあるを大文と云ふ、短文は段落節のみよして大文ハ小段落大段落節おどあり、

◎短文　大文

短文ハ概ね五十言位より少からず二百言位より多からざるものよして、結尾よ二三句を添へて餘情を殘したるあり、之を添句といふ、又歌を添へて結べるもあり、大文ハ概ね三百字位より少からず三千字位より多からざるもの

よして、長文ハ幾大段をも重ねたるものあり、

さて大文ハ官衛の如く小文ハ我等の居宅の如し、我等の居宅ハ只一棟あれバ一段落の家あれど居間客間臺所の三節位ハあるべし、疊の一枚二枚ハ一句二句の如し、又表の入口が文章の首あれバ裏の入口が文章の尾あり、されバ短文と雖首尾の二つハ必あるものと思ふべ

君の臣と爲り、君の急難よ當て、則深坐高視、案よ據り、策を披きて曰、我れ道德を懷抱す、君我を三顧せされバ、我ハ出つるを肯ぜざるあり、然る後、始めて功臣の徒たるを免かるゝか、豪傑の事を作す、機よ因り、變を制し、少を以て、衆を擒き、弱を轉じて强と爲す、唯々我が長する所を、是れ視る權謀可あり、奇譎可あり、危を行ひ、成を求むるも可あり、亦何ぞ擇ぶ所あらん、公の時よ當て、必す其千百の疲卒を以て、天地風雲龍虎鳥蛇の伍を分ち、雍容指麾し、以て北條、足利、百萬の敵よ臨む、曰く、是れ我三代節制の師ありと、機會有て之を弄つ、曰く、君子ハ危よ臨まざるありと、然る後、始めて功名の徒たるを免るゝか、設し此論を爲す者をして公の時よ當らしめんか、其成す所、觀る可きのみ、我れ嘗て公の忠を論ずるよ、亮と相下らず、而して其才、日を同して論ず可からざるあり、亮ハ天下を三分して、其一を有ち、東、强吳よ連ね、則ち又其二を有つ、其二を有て、其一よ勝つ能ハず、公が千百の疲卒を以て、六十州を賊手よ奪ひ、諸を天子よ授くるよ孰か興ぞや、亮上よ專任の主あり、下よ用命の將あり、子午以南、海以北、尺地寸草も其號令よ從ハざるハ無し、掃焉として北出する者、六たび、終に曹丕一豎子の命を制する能ハず、足利尊氏の雄略、曹丕よ萬萬す、延元帝の人を任する先生の萬一を望まず、公乃河泉の卒を以て、新田義貞の節度を受く、尊氏二十萬の兵、公の一擊に遇へバ、則京よ人影無し、故よ公をして亮の地よ居らしめバ、則尺組を曹丕の頸よ係けて、諸を洛陽の廟よ獻ずる、蜚を刺すが如し、木牛流馬以て爲す無きあり、延元帝、諸を我よ用ひて、以て七道を定むるを知らざるハ命あり、呼々其多難よ遇ひ、間關百折、社稷の大功を

し、諸官衙は門のある如く、大文は必冒頭あるべし、我等の宅は門のあきあり、あるあり、あきものは冒頭を置ず、あるものは冒頭を置くが如し、

◎文は主客、照應、波瀾對句ある事の喩

文の主客あるは我等の宅は主人と客人とあるが如く判然區別を立てざるべからず、照應とは給事する者とき〳〵顏出しをする狀あり、成すは垂として、則賊尊氏賊清忠、糾して之を陷る、天の怨を含み、地は入るの時を想ふみ、其志固より如何ぞや、而して後人亦安坐綏頰、以て其失を識せんと欲す、天地の間、何ぞ、尊氏、清忠の黨多くして、而して公の徒少きや。

武侯諸葛亮孔明あり　切齒はぎしりすることにて　狗鼠の賊尊氏等を指す　雍容指麾すること　延元帝後醍醐天皇のこと延元は帝年号あり　間關たんぎすること　社稷國家と云ふ如し

瓜分三國時代ゆえに其時の天下うりみわりたる如くあるを云ふ　萬々はるかすぐれること

●疑と迷の辯　柳澤　洪園

人のまことは、おのれが信を以て引き出し、人の僞りも、おのれが僞りより引き出すものあり。遂ぐる時は信とあり、信も遂げざる時は、僞りとあれり。されば嘘も誠も、まじいる者の心はありて、おのれ誠ありて、人はうそある事あく、おのれ嘘ありて人は誠いあるべからず。唯人として、むづかしきを抑揚といふ抑は坐るあり揚は起ちて歩くあり、波瀾といふ座敷の粧飾品の類はて目を喜ばしむるもの對句といふ一對の屏風一對の花瓶の類の如し。

右の喩の如く文章は必ず主客、照應、抑揚、波瀾對句、等あるべきあり、されど初學の輩は、これらのことは拘泥せずして幾百篇も作り刪正を乞ふべし。

◎放膽文及小心文の事

は。心の疑ひ一つあり。兼好法師は、迷ひの一つ、おそろしと書きたれども、迷ひは表はいづることあれば、おそろしといへども、恐るゝは足らずして、捨て易し。疑ひは心はありて、あらはす所あきが故は捨てがたし。

●勤の辯　貝原　益軒

およそ、務めは體屈し、久しくつとめ難きは、おほかたは、精力の弱きはいわらず、氣隨はして、事をつとむるを、きらひ、心はそがはしくて、短きゆゑ、むづかしく思ひて早くたいくつするものあり。心靜はして、事をきらはず、次第は隨ひて、一つ宛、やうやくは、勤むれば、久しく勤めてもつかれず。怠りおくたゆみあければ、しづかはしても、はかゆくものあり。

○四方拜の由來　藤原　兼良

四方拜といふ事は、元正寅の時は、すべらぎ屬星を唱へ、天

文章軌範より放膽を初めとして、小心を次とし初めは膽の大なるを要し、終は心の小なるを要す、粗より細に入り、俗より雅に入り、繁より簡に入る、初學之を熟せば、但文の易きを見て難きを見ずと云はれたれ、能く注意すべきことなこそ。

◎文を作る六種の工夫

凡文を作るには主客表裏の四つを暗記し置くへき、是には皆虛と實

地四方山陵を拜し給ひて、年災をも排ひ、實祚をも祈り申さる、儀にて侍るなり。清涼殿の東階のまへ、砌の外に、御屏風をたてめぐらし、其中に御座三所をまうけ、其前にそら木の机を設きて、香華燈おのをおのへ、この所にして、御拜の儀式あり。むかしい、殿上の侍臣おのも、四方拜をば去ける也。近頃い、內裏、仙洞、摂關、大臣家おのの外い、さる事もなきなり。この事いつ始るとも見へず、仁和五年正月寅の刻に、天地四方屬星山陵を拜し給ふ由、宇多の御門の御記にのせられたれども、濫觴とい見へず、また皇極天皇雨を祈り給ふとて、南淵の河上に行幸ありて、四方を拜し給ひければ、雨五日まで降りける由、日本紀にのせられたれば、これおのをや、はじめとも申すべからん。

すべらぎ　天子をいふ　砌　階の下の石だたみの所なり　仙洞　太上皇の御所

とありさて此六種のものは文を作るに必要の道具にて之を用ゐざれば如何なる大家と雖も文を作ること能はず、是を用ふれば初學と雖容易に作り得らるべし。

◎九思法

題を得て文を作る時に九様に之を考へ案を立る法あり、例へい善人論と云へる題あれば

(一)善人の右傍　善人の他に及ぼす行を云ふ

(二)善人の正面　善人の心と行を云ふ

●桐葉封弟辯

柳子厚

古之傳者有レ言成王以二桐葉一與二小弱弟一戲曰、以レ封レ汝、周公入賀。王曰、戲也、周公曰、天子不レ可レ戲、乃封二小弱弟於唐一。吾意不レ然、王之弟當レ封邪、周公宣下以レ時言於王上、不下待二其戲一而賀以成上之也。不レ當レ封邪、周公乃成二其不レ中之戲一、以レ地以レ人與二小弱弟者一、爲二之主一、其得レ爲レ聖乎。且周公以二王之言不レ可レ苟焉而已一、必從而成レ之耶。設有下不幸王以二桐葉一戲中婦寺上、亦將二舉而從レ之乎。凡王者之德、在二行レ之何若一、設未レ得二其當一、雖二十易レ之、不レ爲レ病。要於二其當一不レ可レ使レ易也。而況以二其戲一乎。若戲而必行レ之、是周公教二王遂レ過也。吾意周公輔二成王一、宜二以レ道從容優樂、要歸二之大中一而已、必不下逢二其失一而

(三)善人の左傍　善人の自ら行ふ心をいふ
(四)善人對面　自ら行ふことの他人に渉るを云ふ
(五)惡人の右傍　惡人の行を云ふ
(六)惡人の正面　惡人の心と行をいふ
(七)惡人の左傍　惡人の行ふ惡をいふ
(八)惡人對面　惡人自らの行他人に渉るを云
(九)善人の然る所以と惡人の然る所以とを推原すべし。

以上合せて九思法とす、

◎起稿の法

作文起稿の方法は三種の別あり之を三稿と云ふ左の如し。

(一)書稿
(二)腹書兼施法
(三)腹稿

書稿は書きあがら作るあり初學の者は多く此法より始む大人は用ゆる勿れ。

腹書兼施法是は概略首中と尾とを腹中に考へて後に筆を執り始より終迄書き考へては刪正する法あり、世人此方法を用ゐる者尤多し、

為之辭、又不レ當ニ束ニ縛之ヲ、馳ニ驟之ヲ、使ニ若ニ牛馬ノ然ル、急則敗矣。且家人父子、尚不レ能ニ以レ此自克ニ、況號為ニ君臣ニ者邪。是特小丈夫缺缺者之事、非ニ周公所ニ宜レ用、故不レ可レ信、我曰、封ニ唐叔ニ史佚成レ之。

小弱弟云ふ　缺缺　缺は缺に同し、老子に其政察々其民缺々とあり、小明あること、即こざかしきことを云ふ

◎解類

解は、釋あり、人の疑あるによりて、之を解釋するあり、其文疑惑を解釋し、紛難を解剖するを以て、主と為し、論、說、議、辯と、蓋し相通ずるあり。某を解すと曰ふも、某の解と曰ふも唯、人の命ずる所のまゝあり。

●七儒解　明　宋濂

儒者一に非ざるあり、世の人察せざるあり、游俠の儒あり、文史の儒あり、曠達の儒あり、智數の儒あり、章句の儒あり、事功の儒あり、道德の儒あり、儒者一に非ざるあり、世の人察せざるあり、能く之を察して然して後道に入るべきあり。」

成は以て之を制し、術は以て之を淩ぎ、才は以て之に駕し、强は以て之に勝ち、和は以て之を誘ひ、信は以て之を結ぶ、夫是之を游俠の儒と謂ふ。上は羲軒より下は近代に至るまで、載籍の繁、浩として煙海の如く、其玄精を櫛ひ、其芳腴を嚼はさること、其闊逸を搜り、其粗滓を畧し、其枝蔓を約し、瓜を引き、辭を吐き、頃刻にして萬言し、而して之を止めざる夫是之を文史の儒と謂ふ。三才も之を以て混するあり、萬物も之を以て濟するあり、名理も之を以てすれば假あり、塗轍も之を以てすれば寓あり、智者ありと雖其存する所を測るものおき、夫是之を曠達の儒と謂ふ。沈默寡言にして逆め事機を料り、翼然、疑然、規然、幽然、漆漆然、逮逮然、察察然、獵獵

腹稿は題をよく考へて首より前中後及尾ゑ至るまで盡く胸中ゑ暗記し、或は之を聲音ゑ發し時々朗誦し、尚能く考て毫も疵おきゑ至りて始て書くあり。

◎草稿の書き方

草稿の書式は行の間を十分ゑ明けて認むべし、これは刪正して書き込むが爲あり、人ゑよりて草稿と思ひ乱筆ゑ書き付くるは大ある誤あり、十分ゑ腹稿して其後ゑ筆を取るべし

前ゑ云へる腹稿の如きは、それがすぐゑ淨書ゑある樣ゑすべし、凡一篇の文章を書き終りたるときは、幾度も讀み味ひて刪正するこそ宜しけれ。

◎文を作る三多

歐陽修曰く作文ゑ三多あり多讀、多做、多商量と謂ゑ曰く千篇の文を讀むゑ一篇の文を作るゑ如かずと、これらの言をよく味ふべ

然、として千變萬化ゑして窺度すべからざる夫是之を智數の儒と謂ふ。業ゐ專門を擅ゑして、異を伐ち同ゑ黨し、言を以て句を求め、句を以て章を求め、章を以て意を求む、高くして窮めざるあく、遠くして即かざるあく、微ゑして探らざるあく、滯ゑして宣べざるあく、幽ゑして燭さゐるあき、夫是之を章句の儒と謂ふ。事を謀れば則方畧ゑ鄉ひ、師を馭すれば則勞佚を審かゑし、民を使へば則蓄積を謹み、國を治むれゐ則政令を嚴ゑし、衆を服すれば則刑賞を信にし、務めて澤を當時ゑ布き、烈を後世ゑ垂れしむる、夫是之を事功の儒と謂ふ。陰陽の和を備へ而して其純を知らず、萬物の理ゑ達して而して其遠きを知らず、言ゐ以て世法とするゑ足り、行ゐ以て世表とするゑ足り、而して人得て名つくることあき夫れ是れ之を道德の儒と

謂ふ、儒者一ゑ非さるあり、世の人察せざるあり、能く之を察して然して後道ゑ入るべきあり、游俠の儒ゐ田仲、王孟是れあり、理を要とせずして惟氣を之れ使へゐ以て道ゑ入るべからざるあり、文史の儒ゐ司馬遷、班固是れあり、浮文質に勝ち纖巧ゑして朴を劉れゐ以て道ゑ入るべからざるあり、曠達の儒ゐ莊周、列禦寇是れあり、情を肆ゑし縱誕ゑして人紀を滅絶すれば以て道ゑ入るべからざるあり、智數の儒ゐ張良、陳平是れあり、機慮ゑ出入し、或ゐ譎詐ゑ流れ、以て道ゑ入るべからざるあり、章句の儒ゐ毛萇、鄭玄是れあり、牽合、傅會、墳典ゑ乖けること甚れば以て道ゑ入るべからざるあり、事功の儒ゐ管仲、晏嬰、是れあり、跡ゐ經世ゑ存すれども、心ゐ則假とするゑあれば以て道ゑ入るべからざるあり、道德の儒ゐ孔子是れあり、千萬世の宗とする所あり、私が願ふ所ゐ

し。

或人作文の秘訣を文章家に問ふ曰く多く讀むべし又多く作るべしと又佳篇を得るの要を問ふ曰く古人の名文を暗誦し置くべし、但し數の多きを要せず、一類題に一篇づゝ宜し、然るときは筆を執りて澁滯せざるに至るべしと。

◎文を作る三病

作文に熟せざるもの左の三病あり。

(一)稿既に成りし者は意を審するものあるも惜くして芟除せざること。

(二)既に叙し去りし後は其他に說くべきの理あしと思ふて更に一歩を進で、奇思妙案を出すを知らざること。

(三)句法章法篇法は既に成りし者の外他に法あしと思ひて之を變換するを知らざる是れあり。

右の三病に早く治せざれば宿病となりて遂に

則孔子を學ぶにあるあり、」其道には則仁義禮智信あり、其倫には則父子君臣夫婦長幼朋友あり、其事には知り易く行ひ易きあり、能く之を行へば則身脩るべきあり、家齊ふべきあり、國治るべきあり、天下平かあるべきあり、我が願ふ所は孔子を學ぶにあるあり、今三尺の童子を指して之に問へば則曰く、我は孔子を學ぶと、其孔子の道を知れるものを求むれば班白の人と雖、あることあきあり、嗚呼上は天を戴き、下は地を履み、中は人を圃すれば一あり、天も高しとするに足らず、地も厚しとするに足らず、人も小とするに足らず、此れ儒者の道の天地と並び立て三となる所以なり、司馬遷は儒と五家とを以て並列し、荀卿は儒に大小ありと謂ひ、楊雄は天地に通ずるを儒者と曰ふと、謂へらく要するに皆以て儒を知るに足らざるあり、必學は孔子に至りて然して後、儒の名に媿づること

とあきあり、」然れば則儒は亦異るものあるか、曰く之れあり位同じからざるあり、三皇は儒にして皇、五帝は儒にして帝、三王は儒にして王、皐陶、伊傅、周召は、儒にして臣、孔子は儒にして師、其道は則未だ嘗て同じからざるはあらざるあり、然りと雖生民ありてより以來、未だ孔子より盛あるものあらざるあり、我願ふ所は孔子を學ぶにあるあり。

(一)稿既に成りし者は意を審するものあるも惜くして芟除せざること。

(二)既に叙し去りし後は其他に說くべきの理あしと思ふて更に一歩を進で、奇思妙案を出すを知らざること。

(三)句法章法篇法は既に成りし者の外他に法あしと思ひて之を變換するを知らざる是れあり。

右の三病に早く治せざれば宿病となりて遂に

○作文要法類篇　●解類　七儒解　百六十七

游俠	游俠は俗に「なとこた」といふものなり
芳腹	芳は香のよきをいひ腹は味のよきをいふ
法に拘束せられず故旨高論する者をいふ	
智數	智略あり
文史	文史の儒は文章家あり
章句	古書の訓詁考證を事とするもの
噴達	悟を開きて何事にも頓着せず自儀作義軒輊伏羲氏軒輊氏あり
粗滓	粗末なる糟
三才	三才とは天地人あり
名理	儒通學者の言ふ所の名分や理論は此道を以て見るときは假り物にて此の大道に非ずといふ
事功	人業を興し功名を立つる
道德	心を正し身ををさめ國ををさめ民をすくふを主とするもの
戴籍籍	書のこと
沈黙	沈黙たしかにもつて
翼然	翼然たるかたち
凝然	凝然たるかたち
規然	規然たるかたち
幽然	幽然たるかたち
漆々然	漆々然たるかたち
逮々然	逮々然たるかたち
察々	察々

治すべからざるよ至る。

◎佳篇を作る法

大文佳篇を作らんと思はゞ速に得んと欲する勿れ能く其題意を推考して之を腦中よ記し置き耳目の觸るゝ處造次顚沛よも佳篇を工夫する材料を得んと思ふべし、かくて數日怠たることおきは必ず佳篇を得らるゝものあり。

◎文思を培養する法

良き文章を作らんと欲

然るもかにものを獵々然たるつるかたち　田仲、王孟客なり　司馬遷、班固遷は前漢の人史記の作者固は後漢の人前漢書の作者　莊周、列禦寇　莊は莊子の作者列は列子の作者共よ周の人なり　張良、陳平の功臣なり　二人皆漢の高祖　毛萇、鄭玄　毛は前漢の人毛詩傳の作者鄭は後漢の人三禮の註をかきし人

肆レ情　從　誕　誕法よかまはずこゝろのまま論ずるなり　牽合傅會　こぢつけの

三墳五典　三墳五典とて古の墳典文字の書体なり　五家　陰陽、墨、法、名、　三皇　伏羲、神農、　五帝　少昊、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜、　三王　夏の禹王殷の湯周の武王、　皐陶　堯舜の臣なり　伊傅　伊尹傅說周公、召公、周の臣なり

○獲麟の解

韓愈

麟の靈たる照々たり、詩よ詠じ、春秋よ書し、傳記百家の書に雜出す、婦人小子と雖も、皆其祥爲るを知る、然るよ麟の物たる、家に畜おいれず、常よ天下よあらず、其の形たるや、類せず、馬牛犬豕豺狼麋鹿の若く然るよ非す、然るに則ち麟あり、と雖其の麟たるを知る可からざるあり、角あるものい、吾

するよは第一に文思を養ふべし之を養ふよは精神を爽快おらしめ思想を清潤おらしむるよあり、唐の杜牧之云、文は氣を以て主と爲す、氣和げゞ文自ら雍容大雅おり、氣壯おれば文自ら强克雄健おり、氣清ければ文自ら澄潔鮮明おり、と、文章家とおらんと思はゞ潛心沈默して平生文思を養ひ置き題を得るよ當りては速かに起稿して筆を下すべし是れ文章家の秘訣とする處おり。

れ其の牛たるを知る、駁わるものい、吾れ其の馬たるを知る、犬豕豺狼麋鹿い吾れ其の犬豕豺狼麋鹿たるを知る、惟麟や知る可からず、知る可からざれゞ則ち其れ之れを不祥と謂ふも亦た宜へおり、然りと雖も麟の出る必ず、聖人の位よ在るおり、麟い聖人の爲よ出るおり、聖人おる者い、必ず麟を知る、麟の之れ果して不祥たらざるおり、又曰ゝ麟たる所以の者、德を以てして形を以てせず、若し麟の出る聖人を待たざれゞ則之れを不祥と謂も亦宜おり。

●樂みの解

貝原　益軒

ひろき家よ居てい、むかしの穴よすみ、野よ居りし時と、今のまどしき人の、はよふの小屋のいぶせさを、思ひやりて樂しむべし。穀肉を食してい、むかしの人の、木の葉、草の根を食とせしと、今の餓るよ、おやめる人を、おいれむべし。さ

※※※※※※※※
助字解
※※※※※※※※

あ部

(あゝ)○噫 かなしみいたむ聲
○於戯 同上
○吁 物におどろきたるときの聲
○悪 深くおどろきたんずる
○嗚呼 大に聲を發してなげくなり　於乎も同じ
(あへて)○敢 むかふみずにおしてする
○肯 うけこみとくしんずる
(あに)○豈 いかさま又どうして、何ぞ……せざらんやと反語の上に用ゆ

い部

(いづれ)○何 いづれの處いづれの時
○孰 何なりどちらかまさるなどを
(いはんや)○況 ましてや

ぬを着て、あたゝかよしては、むかしの木の葉を、つゞりて、きたると、今の衣なくして、こゞゆる者とを、あはれむべし。わがめしつかふ奴婢わらべ、貧しき人の水くみ、みづからかしぐ苦をおもふべし。かくの如くならば、樂しみ多くして、上をねがふ外の、求めなかるべし。

まどし（まづしといふこと）　はにふ（いやしきいへをいふなり）　いぶせき（きのふさぐことなり）

●鶯宿梅の起因

作者　不詳

天暦の御時に、清涼殿の、御前の梅の木、枯れたりしかば、索めさせ給ひしに、なにがしの主の、藏人にて、いますかりし時、承りて、若き者どもは、得見知らじ。きんぢ索めよと、のたまひしかば、ひと京まかりありきしかども、侍らざりしに、西の京のそこ〳〵なる家に、色こく咲きたる木の、やう體美しきが侍りしを、掘りとりしかば、家あるじの、木にこれゆひつ

○剏 いつに及んでなり
(いづくんぞ)○焉 なんぞしてか
○烏 どうしてか
○胡奚曷安 みないづくんぞなり
(いなや)○否 その通りならぬどうしやう
○不問ドことはあらず
(いよ〳〵)○愈 りのうへ〳〵にある
○彌 ひろがりわたる
(い)○矣 直よりもれと決定するときに用ゐる又歎辭ともなる決辭なり

おを部

(およそ)○凡 一つにとりまとめて云ふ詞いろ〳〵のことを總括するなり又發語也
(おのれ)○己 人に對してわが身をさして云ふ辭わたくしと云ふこと

け候ひて、もて參れといはせ給ひしかば、ある樣こそはとて、もて參りて候ひしを、何ぞとて、御覽じければ、女の手にて書き侍りける。

勅なればいともかしこし鶯の
　宿はと問はゞいかゞ答へん

とありけるに、怪しみ思しめされて、何ものゝ家ぞと尋ねさせ給ひければ、貫之のぬしの、みむすめの、住む所なりけり。

◎賛類

賛は稱美なり、字、本、讃に作る。其体三あり、其一を雑賛と曰ふ褒して美とするを專とす。其二を哀賛と曰ふ、人の沒するを哀て、德を述べて、之を賛するなり。其三を史賛と曰ふ、詞、褒と貶とを兼ぬ、其文は促にして、嚝しからざるを要とす。又一種あり、是は評論の文に似た

(おい)○於　さす處の一事一物を示すなり乎の字と同じ

か　部

(かれ)○彼　これに對して云ふこと

○伊　かれともこれとも訓す

○渠　人を指呼の辞あり

(かなら)○必　必定ときめむること事物の上につきてきつとときめ他を疑せざること

むかしと云ふまと　こゝろむるあむる

(かつ)○嘗　とも云ふ味あるものを好みてあめこゝろむること

年月をへたゝりたる昔の事にて經るの意月日いかられさること

○曾　發語の辞ありその上と云ふこと又何ぞせんとすと反語にも用ゆ

(かも)○哉　嘆頌の辞やと云ふときハ疑の辞となるあり

(か)○乎　多く疑て未た定めさる辞又問の辞ともなることあり

○邪　問語の余聲未定の辞

○歟　同上又歎辞あり

け　部

(けだし)○蓋　發語の辞大抵ほゞと云ふまと又疑の意あり

こ　部

(ことに)○特　とりわけて云ふこと

○殊　同上

○獨　同上ひとりたちとりたつす意

(しこと)○如　ろのやうある、このやうある、又もしとも用ふ

○若　如と同しもしと用ふ

○似　にたるの意

○猶　これとかれとくらぶれハてうどれあじやうだなどの意あり

るものあり。

●加藤公の像の賛　鹽谷　岩陰

勇い三軍を蓋ひ、忠い一姓を奉ず、衆寡を以て、氣を動さず、盛衰の爲ま行を改めず。剿んや復た兵を治めて寛ま、猛を濟ひ、德を立て、智仁を該ね、勝を措くこと手ま在り。敵を量ること神の如きをや。豈ま惟ま、一槍の雄のみあらんや。寔ま是れ、百將の冠あり。殊域の異類之を畏るゝこと、夜叉の如く、之を愛すること、慈親の如き所以あり。奈何せん宗祀二葉まして殄え、威靈千載、獨り新あり。猗嗟浩然の塞る凝りて神祇とある、偉人の精、箕尾の騎、公の靈の如きい、其れ蓬勃軒騰して、五緯を六ましして、三台を四まするわるあからんや。

冠一等ことし、第　箕尾二十八宿の一星のやどりの名あり、蓬勃軒騰ちのぼること盛氣の天上ま、たあり

五緯五星を云ふ　三台名あり

●范睢蔡澤列傳の賛　司馬遷

太史公曰、韓子稱す、長袖善舞、多錢善賈と、信ある哉、是言や、范睢蔡澤い、世の所謂一切の辯士、然とも諸侯ま游說して、白首ま至まて、遇する所の者ある し、計策の拙あるに非ず、爲ま說する所、力少けれハあり。二人羈旅ましして秦ま入り運を繼て卿相を取り、功を天下ま垂るゝ者固ま軀弱の勢異あれハあり。然とも士亦偶合あり、賢者多く此二子の如くまして意を盡すことを得ざるも、豈勝て道ふ可けんや、然ども二子困尼せざれハ、惡んぞ能く激せんや。

長袖善舞　多錢善賈　羈旅　偶合　困尼

●卒塔婆小町賛　芭蕉

上下の文にこれとさす處あるときも又用ゐることあり

(これ)○之

○諸之乎の義かろし

○是上をうけて下を定むる辞

○維語の辞

○此彼の反事物をさす

○旃之と同じ又焉に近し

○茲斯と同し

○斯此の義と同じ〜やゝかろし

○惟發語の辞維と同し

○伊惟に同し

○焉物をさす辞

し　部

そのとほりと云ふ

(しか)○然ことしかれはの時はうれなればと云ふこと

○爾きつとその通と云ふこと

あゝ尊と、錢も尊とし、笠もたふとし、何れの人か語り傳へ、如何ある人か、うつしとゞめて、千載のまぼろし、今こゝに現いす、其形ち有る時い、魂もまた、こゝにあらん、錢も尊とし、笠もたふとし。

たふとさや雪ふらぬ日も錢と笠。

●圓右衛門像賛　林鶴梁

手足胼胝、山斫谷割、創闢便道、廿稔志達、馬走輿丁、歌頌嘈囋、今諦斯像、醜面若鬼、雖則若鬼、心肖菩薩。

●畫牧牛賛　米元章

鼻之柔也、以繩牧之。心之柔也、以道牧之。縱而不覊人之田。其惟早服之。

●畫像自賛　頼山陽

○俞同上

(しか)○而上をうけ下を起す辞しかうしてはそうしての意

(しかず)○否その通りにせぬこと然らずと云ふこと

○不否と同じく否より也しうちけしの辞なり

す　部

(すでに)○既なゝりの辞もはやこと

○已前の事のなはるとなはらぬとの間よいひだす辞

○業しかするからは云ゝなり業已なかされて用ふるあり

(すなわち)○則あれば云ふ義上に何々すればと受る辞

○乃おこす則よりはゆるし

○即すぐに續けて云ふ辞とりもあるさす

躬偃仰一室、而心關百代之失得、弗恤己鹽虀、而憂人家國、文章滿腹、不濟乎饑、曲尺直尋、則此迂拙者之時上哉。

所不爲、噫、是何物、迂拙男兒乎、雖然、烏知無念此膝不屈於諸侯、聊答故君之德、此眼竭之群籍、不虛先人之囑、此脚待母興、二蹄芳山、五蹄大湖、十上三下、濕濕、而未曾踵朱頓之門、此口不能飽、殘杯冷炙、而此手欲援黔黎之寒饑也。

●孔子世家賛　司馬遷

太史公曰、詩有之、高山仰止、景行行止、雖不能至、然心鄉往之。余讀孔氏書、想見其爲人、適魯觀仲尼廟堂、車服、禮器、諸生以時習禮、其家、余祗回留之、不能去云、天下君王、至于賢人衆矣、

○輙　たちまちすぐにあり事のかたからぬときに用ふ
○戯　そのまゝと云ふきみはじめともよめり
○廼　乃に同し
○便　そこであり

せ　部

(せし)○令　おしつけさしづするの意
○使　うゝさせるの意つかふもとなり
○伻　せしむとよむ
○聘　同上
○遣　しかさせる
○占　しむるの意
○教　ものゝとほりさせることと

そ　部

(それ)○其　發語の辭それと物をさすもとあり

當時則榮沒則已焉、孔子布衣傳二十餘世一、學者宗レ之、自二天子王侯一、中國言二六藝一者、折二中於夫子一。可レ謂二至聖一矣。

●楠公贊　安井息軒

智伐二群雄一之謀、勇折二萬卒一之氣、據二數仞一来レ完之城一激二四海敵愾之志一、終能滅二逆焔於既燎一拯二皇統於將レ墜、偉矣、公之有レ大二造於天地一也。然是尚有二可レ言者一、陪臣執二國命一、僭逆滔レ天、天特假二公手一、漏二其忿悁一、神明森羅、我不二敢謂一不レ然至二賞溯而不レ怨、謀斥而不レ恫、自知必死一而遁逸、就二命於大戎一、又勅二其幼兒一、全二報國之始終一、天下古今獨有レ公而已矣。而世或以成敗論レ事謂、窒而不レ通、寧知二時事一、不レ可レ爲、而誠忠大義、扶植名教有二千載而未レ窮者一哉。嗚呼盛矣哉。

○夫　發語の辭あらたにいひ出もときに用ふ
(そも)○抑　發語の辭又反語の辭かくしたはそも〳〵何々と云ふ
(そと)○許　あまたありてかぞへがたきこと
○計　許と同じ多少あるゝかぞへるとき

た　部

(たゞ)○徒　空の意ありあにもあくかちのまと
○止　までと云ふこと而已と同じ
○翅　たつたこればかり
○維　もつぱらゝれをさす
○唯　同上口もつぱら也
○惟　同上心もつぱら也
○祇　わきへゆかぬ義なり云ふことを二つに分ちはじめをうたがひをとはるなりたゞしと訓も
○但　特ことにの意

●繡阿彌陀佛贊　白樂天

善始二一念一、千念相屬。繡始二一縷一、萬縷相續。功績成就、相好具足、金身螺髮、玉毫紺目、報二罔極恩一、薦二無量福一。

●繡觀音菩薩贊　白樂天

集二萬縷一、成、積二千針一、勤二十指一、成、虔二一心一、嗚呼鑑二悲誠一、而介二冥福一、實有レ望二於觀音一。

●孔仲尼贊　陸機

孔丘大聖、配レ天弘レ道、風扇玄流、思探神寶、明發懷レ周興言謨レ老、靈魄有行言觀二蒼昊一、清歌先誠丹書有レ造。

●折蘆達摩贊　徐文長

○只（ただ）　おこすとき又おはりに用

○當（まさに）　まさにの意翻と同じ

○直（ただちに）　わき目ふらずまつすぐにゆく意　とみちによらずかみちよりしてちをあける意

○徑（こ）

○譬（たとへ）　彼をたとへたるあり

○喩　迷ふ人にときかせのみこます意

○假令（かりに）　とにくらべたとへるあり

○例　それにおぞらふこをあげたとへるあり

○互（たがひに）　左右入りまざりて

○迭（たがひに）　やりちがひありてゆくの意

○偶（たまたま）　時にあひ事にかかふことてうどたまたまあり

○會　そのまとにでつくはず意

片蘆長江隻鞋懲領弄二此伎倆一作二傀儡影一我諦思レ之必傳者訛麻姑被レ哂鄰レ米成レ砂。

◎箴類

箴い　誡あり、醫者、箴石を以て、病を刺す、故に諷刺して、其失を救ふ所あるもの、之を箴と云ふ、箴石を喩へて名くるあり。其品、二あり、一は曰く、公箴、二は曰く、私箴と、大抵、古今興衰理乱の變を反覆し、以て警戒を垂れ、讀者をして惕然として自ら寧ぜざる心あらしむべきを要とす。

●閑居の箴　　芭蕉

あら物くさの翁や、日頃い、人の訪ひ來るも、うるさく、人はもまみえじ、人をも招かじと、あまたゝび、心よちかふおれど、月の夜、雪のあしたの友の慕はるもわりあし。山をもいはず、獨り酒飲みて、心よ問ひ、心よ語る、庵の戸押しあけて、雪を眺め、又い盃を取りて、筆を染め草をすつ。あら物くるはしの翁や

酒のめばいとゞ寐られぬ夜の雪。

●自警箴　　皆川　洪園

氣疾而闇、知徐而明、以レ徐克レ疾、制レ闇以レ明、即不レ由レ學、徐亦靡レ生、苟弗二以思一、明亦不レ朝、於レ爲二飄風一、莫レ折二筋蘖一、於レ耀二其光一、毋レ留二垢穢一、已欲レ隕レ穽、人誰止レ之、己好レ棄レ塵、人誰能撥、莫二之止撥一、尋必疾レ之、人既背畔、天亦從レ之、戒レ之哉、戒レ之哉。

◎戒類

戒い、警敕の辞あり、字、本と、誡より作る。文既に箴あり、又戒あり、されど戒とい、箴の別名か、其詞二体より分つ、

あ　部

○汝（なんぢ）　多人數の中よりそ辞の人をさしてよぶ

○爾　人をさして云ふ辞其方と云ふこと

○若　なんぢと其方と云ふまと

○子　男子の道理ありをこしらうやまひあがめたる辞

○乃　其方又そなたがどうしてなどの意

○而　其方たちあり

○女　汝と同し

○你　爾に同じ

○無（なし）　なにもなきこと

○罔　同上

○毋　同上うではなし

○勿　それはならぬと禁止とる辞

○蔑　ものおきことおきことよりあつかふ意
今までではありたる
○沒　かおくありし義水中ヨ入りしづむきみ

（なか）○勿　禁止辞
○莫　同上

（あり）○也　句終る辞又決定する辞あり

の　部

（のみ）○耳　助辞あり　これればかりとの義
○而已　それきりと決定する辞

へ　部

（せし）○可　許す辞あり又指定するの辞
○應　うけあるべしと云ふこと
○當　必そうあるおちんと云ふこと
○須　云々せよと命令する辞
○合　當に同しく用ふこと　ふときあるならんと云ふときの如し
○容　可と同しく許すの意あり

ほ　部

（ほど）○粗　あらまし大抵の意
○略　物をざつとあらぐりすること
○溥　略と同しくあらぐりもるきみ
○約　物のほどを云ふ辞大抵あらましなり
○蓋　ほゞ大抵あり
○蓋　同上

（ほとんど）○殆　事のせまりたること
○幾　あうかたといふ意近の意なり
○訖　それに及びつくきみ

ま　部

（まさに）○正　てうどその時ヨあたるの意
○將　もはやいかさまなどの意
○方　そのそばに向ふ意なり

一ハ韻文ヨして、他ハ散文あり。

「フランクリン」の教誨

巽作　麟祥

「フランクリン」ハ、德を分ちて十二とおし、簡畧ある註釋を加へて、之を簿冊の卷首ヨ記し、日々其簿冊を看る毎ヨ、心を留め、其十二德の中、一として怠ることおく、殊ヨ第一ハ飲食を節するの德を勉め、其簿冊を見る毎ヨ、己の其德ヨ背きしことおきや否を、自ら其本心ヨ問ひ、若し過ある時ハ、記号を簿冊ヨ附して、自ら警めたり。「フランクリン」嘗て自ら之を評して曰く、園圃を淨潔ヨ爲す者、一時ヨ園中の雜草を刈除せんと欲する時ハ、力及べすして、終ヨ其業を全廢するの恐ありと雖とも、先ず園中の一隅より、之を始め其終るヨ及で、然る後、復た他所ヨ及ぼし、漸を逐て、業ヨ進む時ハ、全く其業を成就することを得べし、因て吾今我不德を一時ヨ除去せんと欲すと雖とも、必ず其志を遂ることを能ハざるを悟り、此ヨ於て、毎日我過ある毎ヨ、其記号を此簿冊ヨ附し、日ヨ其記号の數を減ずるを以て樂みとす、若し漸を逐ひ、德ヨ進み、數百日を經るの後、此簿冊の白紙のみとおることを得べ、我か悅び又殊ヨ大おらんと。

鴉片禁止の告諭

樺山　資紀

鴉片烟の健康を戕害して、能く痼疾を釀すハ、較著おる事實ヨして、其流傳波及するや、遂ヨ國家の衰亡を見るヨ至る、彼の支那國運の如き、現今の萎靡、振ハざるを致すもの、烟害、實ヨ其の原因の一ヨ居る、是を以て我が刑法ハ夙ヨ鴉片烟、及び其の器什を輸入製練、若くハ鬻賣する者の罪名を定め、又鴉片烟を喫する者、鴉片烟具を收藏授受する者、並ヨ烟樓を開設する者の、處分を明かヨしたり。今や臺灣及び澎湖列島

○當（きつと）　こうかけれ　ばならぬと反りべしと訓す
○應（かう）　あるべしとあり　當と同じくべしと反り訓す
○的（めあて）　めあてのちがひなるきみ　又あきらかなるきみ
○端（まつぱし）　あたる意　正よりやゝかろし
○適（ちよう）　時よあたるの意なり
○雅（ゆう）　正の意
○鼎（てい）　方の意

（また）○又（ひまた）　りれをはなれて再ひまたの意一つの上へ又一つ加ふるの意
○亦（また）　餘へおよぶの辭これもまたかれもまたなり
○復（ふく）　事のかさなる意
○還（かへり）　めぐりかへる意よりまたと云ふこと
○也（や）　亦と同しくして意やゝかろし
○行（ゆく）　〳〵といふ義に基く

新たに我が版圖に歸し、吏を置き、軍を駐し、渡來する所の兵民、辮髮の人と、糅居雜處す、酒ち知る、烟害を防遏するの急、復た疇昔の比に非ざることを、是れ本官が臺灣人民の鴉片烟、及其器材等を將て我が軍人、軍屬、並に從軍者に交付する者を處するに、死罪を以てせんと欲する所以なり。何ぞ圖らん、禍暗處に伏し、弊下流より生じ、役夫僕圭の輩或い奸商の爲めに誘おはれ、或い婦賤の爲めに惑はされ、禁を犯して、顧りみず、身を滅ぼして、悔おきに至らんとい、本官憂きに我が軍役、人夫の臺北附近に居る者、往々鴉片烟を喫するを聞き、初め其の虛傳あるを疑がふ、今にして之れを考かふれば、其說未だ必ずしも憑據する所なしとせず、豈に懼れざる可けんや。蓋し鴉片烟の物たる、其之れを用ゐて、未だ久しきを經ざるものゝ、有れば則ち喫し、無ければ則ち止む、喫するも其毒を被むること少く、止むるも其欲を忘れ易し、然れども其慣習浸染の後に迫びてゝ、氣血皆耗し、心身倶に衰へ、之を獲て纔かに生を偷み、之を獲されば則ち困廢委頓して、復た起たず、有識の士、尙ほ且つ遽に之を絕つこと能はず、況んや役夫僕圭の甘じて嗜欲の犧牲となるものをや、若し此の如きの徒に對して、相率ゐて俗を成し、禍を鄉國に齎らすことあらば、是れ實に邦家千載の大患なり。各部團隊長い、其の微を防ぎ漸を戒しめ、所屬の人員をして、此の惡習に漸漬せしむること莫れ。

●神德と皇恩とを思ふべし

源　親房

神は、人をやすくするを、本誓とす。天下の萬民は、皆神物なり。君は尊くましませど、一人を樂しましめ、萬民を困しむる事は、天もゆるさず、神もさいはひせぬいはれなれば、政

○却（かへり）　ての義にてまたと訓す

山　部

（しる）○寧（いつそ）　といふ意なり疑を含む辭
（そのはづと云ふ意）（なりもつともに思ふこと）○宜

也　部

（し）○如（ごとし）　疑の辭未定まちわふ意　万一にもと云ふ意
○苟（かりそめにも）　ふ意
○倘（忽止の貞）
○儻（或然の辭）
○若（如に同じもしくは）　ゝ疑の辭

助字解畢

の可否をしたがひて、御運の通塞あるべしとぞ覺へ侍る。まして、人臣としては、君を尊び、民をあはれび、天をせぐ。まり、地をぬきあし、日月の照すをあふぎても、心のきたおくして、光りをあたらざらん事をおぢ、雨露のほどこすを見ても、身の正しからずして惠みを、もれん事を返り見るべし。朝夕を長田、狹田の、稻のたねをくふも、皇恩あり。晝夜、生井、榮井の水の流れを飲むも、神德あり。是を、思ひもいれず、わるに任せて、欲をほしきまゝをし、私をさきとして、公をわすれ、心あるあらば、世を、久しきことわり侍らじ。いはんや、國柄をとる仁をあたり、兵權をあづかる人として、正路をふまざらんをおきては、いかでか、其運を全くすべき。

せぐ、まりせなかを、ひくめ　おぢ畏れ、かしこまるの意あり

●恥心を持つべき事

熊澤　了井

心友問ひていはく、今の世、幼少の子は、大かた知藝能あるが如く昔はきかざりし秀でたる樣なる者多し。然るを、世間の人は、次第を劣りゆく事は、心得難き事なて侍りと。答へていはく、然り、田を植る稻も、晩稻ほど取實おほし。今時の子供の利根あるは、稻の早稻の如し、おとなをある程智慧の取實すくなし。其うへ平人の利發といふ者い、大かた鈍あるものあり。わらはべの瓜ぐはへして、赤面し、人前なて、もの言ひかぬるは、知わきらかなして、恥の心ある故あり。人を存するものは、恥心より、よきはおし。恥の心わきらかある者は、學問してはは、君子の地位をもいたり、たとひ無學なても平生は、人からよく、軍陣なては、武勇のはたらきある者あり。昔の童どもなは、瓜ぐはへする者おほかりし故を、成人を隨ひて、一役の用を立つ者ありき。今のわらべは、人をめ

○灼まばゆく見えること
(あやまる)○誤すぢのちがひたること
○訛事のかはりてちがふたること
○錯入りくみてちがふこと
○謬さるべき事のいづれてくること
○惡心あてのちがふこと
○過やりすごしちがふこと
○差すぢちがひにありたること
○失とりはづすこと
(あはれむ)○哀あはれみいたむ意のでたる
○恤わかことをせはにたもふこと
○憐あはれみかけること
○愍ふびんにおもふこと
(おもむき)○周一まはりする意
○洽むちあく水などのしみ渡る

せず、人前よりても利發よものいひ、立ち居ふるまひよし。この故よ、成人する程、用人よ選ぶべき人すくなし。人の親たる者、德をしらざれば、耻心ある子をば叱り威して、耻心を亡し、耻心なき子をばほめ愛して、いよいよはこらしむ。賢才は日々よ長ずる所あり。かなしむべし。

●人よ交はる道　貝原益軒

人よ交はるよ、愛敬の二つを心法とす。これ簡要の事なり。誰れも知らずんばあるべからず。愛とは人をあはれむをいふ、惡まざるなり。敬とは人をうやまふをいふ、あなどらざる也。人を憐むは仁なり、人をうやまふは禮なり。仁禮を心のうちよたもちて、人を憐み、人を敬ふこと、忘るべからず。これ人よ對して、行ふべき善なり。父母を憐み、主君をうやまふは、いふに及ばず、疎き人、卑しき人よ對しても、其位よ從ひて、

○普すべてへゆきわたること
○遍のこらず一めんよ
(あたかも)○恰ちようどよくあひ
○宛同上
(おもむく)○顯人よしらする意
○麥物のあらはれ見えること
○旌はたをかけて人よ示す
○著りの所よつきあらはる
○露むきだしにすること
○見現同めのまへよあらはる
○發内のものが外へあらはる
○覺内より外へあらはる
(おもむく)○爭人よ取られまいと先をする
○鬪つけくちをしあらそうこと
(ふつかる)○預主にならず、しようにんにある

よき程よ變敬すべし。わなどりおろそかよすべからず。これ人よまじはる道なり。

●皇國の事を知らぬ學者を戒む　本居宣長

儒者に、皇國の事を問ふよは、知らずといひて耻ぢとせず。かちの國の事をとふよ、さらずといふをば、いたく耻ぢと思ひて、さらぬことをも知り顔よいひまきらはす。こは、よろづをからめかさんとするわまりよ、其身をも漢人めかして、皇國をば、よその國のこと、もてあさむとするなるべし。されど、猶から人よはあらず、御國人なるよ、儒者とあらむものゝ、おのが國のことを知らでであるべきわざかは。但し皇國の人よ對ひては、さあらむも、から人めきてよかめれど、もし漢國人の、どひたらむよは、われはそなたの國の事は、よくされゝども、わが國のことは知らずとは、さすがよ、にいひたらとをや。も

○闘かいりあふこと
（改）○改これまてのことをきりかへる
○更きはたちてあらためるとこと
○悛心を入れかへること
○革つくろひあらためること
（侮）○侮かろ〳〵しく人をみこなす
○嫚人をうちこあすこと
（集）○集一處にあつまること
○聚ちれたるものをあつまること
○斂あつめおさむること
○鞫革かぶのそろひあつまる
○輳車のあつまり一處にあること
○湊水のあつまるところ
○彙物のかずかぎりあくふること
○撰あつまりよりつくこと

しさもいひたらむよは、おのが國の事をたよ、え知らぬ儒者の、いかでか、人の國の事をば、えるべきとて、手をうちていたく笑ひつべし。

●過譽の戒

橘　南谿

人のおしき事は、語るへからざる事あり。書きえるし置くは、さらあり、惡聲一たび世に流布しては、取り返し難きものあり。善事を言ひふらすは、盛德の事にて、すこし過譽ありとて、強ひて害もあらじと思ひ居りしが、鈴鹿の孝子の如く、幼年の時は、其名高く、公よりも褒美し給ひけるが、年長じて後は、穢行多く、又博奕おごさへ好みて、よろづ常人よりも、其行ひ及びがたければ、其里の庄屋おど、おほやけの咎めを恐れて、とかく異見を加へけれども、更に聞き入れずと、風説ありしが、いかゝありしや、これらの事に就きて思へべ、善事を稱譽することだにもかみだりにえがたし。人始めあらざる事おし、能く終りある事すくおしといふ、古語も思ひ合されさ。

（剛）○剛あざけりうしること
○叫わちひあざけること
（温）○温湯のぬるきこと
○暄日のあたゝかなる
○照氣にてあたゝむこと
○暖暄に同じ
（味）○味舌にて物をあじはふこと
（當）○當そのばしよにあたること
○中向の的へ行きあたること
○搭うちあたること
○抵其あたひにあたること
○抗はりあひあたること
○膺心にあて、物をおもふこと
（暴）○暴むやみにあらきこと
○粗物のあらくうまつあること

●弟子を戒む

本居　宣長

吾よりたがひて物學べん輩は、わが後によき考の出來たらむよりは、かあらず、わが說に勿泥。わが惡しき故をいひて、よき考をひろめよ。すべて、おのが人を敎ふるは、道を明らかにせんとおれば、彼よりも此よりも、道を明らかにせんぞ、われを用ゐるよりわりける、道を思はで、いたづらに、われをたふとまんは。わが心にあらざるぞかし。

（まんは）まんいらむときには　これも又、まんこの略あり

●勸孝篇

世有不孝子。浮生空碌碌。不念父母恩。何生殊

（あれ）○荒田あどのあれはてること
○荒草のはへてあれるあと
（あり）○餘十分にて余けいにあるあと
○剩あまりてむだにあるほど
（あし）○惡きたあ〜あしきこと
○凶いま〜しきこと
○歹法よはづれたるあと
○否よかちざるあと
（あぶる）○炙火にかけてあぶるあと
○煬火にあてるあと
（あふれ）○溢外へあふれいだすこと
○濫同上
（あつ）○熱炎氣たへがたきあと
○暑日のあつきあと
（あを）○青あをき色
○蒼青きいろのときはくみえるあと
○碧あをくみどりの入りたるあと
○翠るり色
（あか）○赤あかき色
○丹たんの色
○紅もいろのときを云ふ
○赭くり色
○騂牛やうまのあかき
○殷あかにくろの入りたるいろ
○緋もえたつあかいろ
○朱朱の色
（あま）○甘味のあまきこと
○甜舌あまきこと
（しぶ）○淡味のうすきこと
○澁水の臭すること

枯木百骸未成人十月居母腹渴飲母之血飢食母之肉兒身將欲生產母身如戮父爲母悲辛妻對夫啼哭惟恐生產時身爲鬼眷屬一旦見兒面一命喜再續自是慈母心日夜勤撫鞠母臥濕簟席兒眠乾裯褥兒睡正安穩母不敢伸縮潛身在臭穢不暇思沐浴橫簪與倒冠形容不顧辱動步落坑阱舉足畏顛覆乳哺經三年汗血經幾斛辛苦千萬端年至十五六性氣漸剛强行止難約束朋友外遨遊酒色恣所欲日暮不歸家倚門至昏旭兒行千里程母心千里逐一要得好妻魚水情和睦母若責一言合怒怒双目妻或罵百般陪笑不爲辱母披舊裙杉妻着新羅裳父母或鰥寡長夜守孤獨健則

興一飯病則與一粥棄置在空房猶如客寄宿將爲泉下鬼命若風中燭快快至無常孤棺殯山谷曝露在草中誰念營故宅纔值父母亡兒弟分財屋不識二親恩惟言我之福咸謂此等人不如禽與畜慈烏尙反哺羔羊猶跪足勸汝爲人子經書曾覽讀黃香夏扇枕冬則溫衾褥王祥臥寒氷孟宗哭枯竹郭巨尙埋兒丁蘭曾刻木如何今時人不學古風俗勿以不孝頭枉戴人間屋勿以不孝身枉着人衣服勿以不孝口枉食人五穀天地雖廣大不容忤逆族早早悔前非莫待天誅戮

敵戒

柳宗元

皆知敵之仇而不知爲益之尤皆知敵之害而

(あそ)○游ぶのことなはきつてする
○遊あるきまはる
(あが)○翹高く上りたるまと
○上下よりあがりてゐること
○颯風がものなふきあぐること
○揭かゝぐる
○褰ぬきあぐる
○抗手上てあぐる
(しゃ)○奇るゐあくして異あること
○怪一こほりあらぬ
○異かくべつなるまと
○妖〜ろしめきよはず
(ふた)○與人にゆるしあたへる
○給たすけあたへる
(ひた)○價ろの物のれたんのこと

不レ知レ爲二利之大一。秦有二六國一。兢々以レ彊六國既レ滅。誰々乃亡。晉敗二楚鄢一。范文爲レ患、厲之不レ圖、舉レ國造レ怨、孟孫惡レ臧、孟死臧恤藥石去矣。吾亡無レ日、智能知レ之、猶二卒以レ危、矧今之人、曾不二是思一。敵存而懼、敵去而舞。廢レ備自盈秪益爲レ瘵、敵存滅レ禍、敵去召レ過、有二能知一此、道大名播、懲レ病克レ壽、矜レ壯死レ暴、縱レ欲不レ戒、匪レ患伊耄。我作二戒詩一、愚者無レ咎。

◎頌類

詩ふ六義あり、頌い其一なり、頌い容あり、盛德の形容を美ふし、其成功を以て、神明ふ告るものあり。之を正体とし、專ら韻語を用ふ。然れども、後世い韻文を用ふるも、散文を用ふるも、心のまゝとなりたり、之を變体と曰ふ、頌は典雅清鑠ふして、加ふるふ揄揚汪洋として、

○直そうたうなる金錢のあたひ
(あと)○合ものちよりあはす
○勁力をあはせともよること
(あと)○跡あしのあとのつきたる
○痕きずなどのなたりたるあと
○轍車のゆきたるわのあと
○殿あとにてきたなふせぐこと
(あふ)○逢向ふよりくる人ふあふ
○遇ふとであふこと
○合ものうはうからあふこと
○遭ときたまめぐりあふこと
○値ろのすぢにあたりてあふ
○偶ふとあふこと
○邂たまさかにあふこと
○儷ならびあふこと

附寫する所い、賦ふ似て華侈ふ走らざらんことを要とす。

韓愈

●伯夷頌

士之特立獨行、適二於義一而已、不レ顧二人之是非一、皆豪傑之士、信レ道篤而自知明者也、一家非レ之力行而不レ惑、一鄉非レ之力行而不レ惑者、蓋天下一人而已矣、若至レ於舉レ世非レ之力行而不レ惑者上則千百年乃一人而已耳、若二伯夷一者、窮二天地一亘二萬世一而不レ顧者也。昭乎日月不レ足レ爲レ明、卒乎泰山不レ足レ爲レ高、巍乎天地不レ足レ爲レ容也、當二殷之亡一周之興一、微子賢也、抱二祭器一而去レ之、武王周公聖也、從二天下之賢士一與二天下之諸侯一而往攻レ之、未二嘗聞一有二非レ之者一也、彼伯夷叔齊者、乃獨以爲二不可一、殷既滅矣、天下宗レ周、彼二子

○會あつまりあふこと
○配合せて一しよにすること
(あや)○文あやありて見ごとなること
○紋おりものなどのあやあること
(あく)○飽十分くらひてあく
○厭いやになる
○飫くひあきる
○慊不足のなき
(あり)○有物のあること
○在現にここにあること
(あだ)○仇つけねらふあひて
○讎あひてとする
○寇敵地をせめおびやかすこと
(あひ)○相あひもち
○胥もちあひにおりゆくこと

乃獨恥食二其粟一、餓死而不レ顧、由レ是而言、夫豈有レ求而爲哉、信レ道篤而自知明也、今世之所レ謂士者、一凡人、譽レ之則、自以爲有レ餘、一凡人沮レ之則、自以爲不レ足、彼獨非二聖人一而自是如レ此、夫聖人、乃萬世之標準也、予故曰若二伯夷一者、特立獨行、第二天地一、亘二萬世一、而不レ顧者也、雖レ然微二二予一亂臣賊子、接二迹於後世一矣。

◎喩類

喩い比喩あり、詩の比あるが如し、比喩を取りて文を作るあり、直喩と隱喩とあり、前者い直よ以て、若し、猶ほ等の語よて、明かよ示すもの、後者い、其文、跡を晦ますと雖ども、義の尋ぬべきあるものを云ふ。

(あやつる)○技其術につきてのはたらき
○操とりまはし

い　部

(いとが)○忙事おほくして心のせはしき
○忽せはしく心いそがしき
○匆忽に同し
○鬧市中などのさわがしき
(いきど)○清きよくすみたること
○淨きつぱりとしてきよきこと
○廉分別して妄りに物をうけぬこと
○潔いさぎよくけつぺく
(いきどほる)○憤ふるつて志をおこす
○憤にもちいかる
○懣心にたもたれぬ
○恚いきどをりて口に云はぬ

◎日喩　宋蘇軾

生れながらよして、而して眇する者い、日を識らず、之を有目者よ問ふ、或ひと之よ告げて、日の狀は銅槃の如しと曰へは、槃を扣きて、而して其聲を得、他日鐘を聞きて、以て日ありと爲せり、或ひと之よ告げて、日の光は燭の如しと曰へい、燭を捫けて、而して其形を得、他日籥を揣りて、以て日ありと爲せり。日はしも鐘籥と亦遠し、而れども眇者い、其異なるを知らず、其未嘗て見すして、而して之を人よ求むればあり。道の見難きや、日よりも甚し、而して人の未習はざるや、以て眇よ異なることあし、達者之よ告ぐるよ、巧譬善導することあり、雖、亦以て槃と燭とよ過ぐること無きあり。槃よりして、而して鐘よ之き、燭よりして、籥よ之き、轉じて而して之を相せべ、豈既ること有らんや、故よ世の道を言

(いつく)○慈下のものをあはれむ心
○愛かはゆがる
(いつる)○僞つくりごとをする
○佯おもてむきみせかける
○詐まにあひのうら
○譎手をかへていつはる
○詭はつしいつはる
○謬すぢをちがへる
○譌つたへちがへる
○矯なき事をしひてすること
○誕あさばにていつはる
○覆にせものにていつはる
(いたく)○戴首へ物をのせてゆ
○頂頭へ物をのせること
(いさ)○功わざのしるしあること

ふ者、或い其見る所より既きて、而して之を名づけ、或い之を見ることおくして、而して之を意ふ者、道を求むるの過あり。然らば則、道は卒より求む可からざるか。蘇子曰く、道い致す可くして、而して求む可からず。何をか致と謂ふ、孫武曰く、善く戰ふ者は、人を致して、人より致されずと、孔子曰く、百工は肆に居て、以て其事を成し、君子は學びを以て其道を致すと。之を求むることおくして、而して自至る。斯を以て、致ありと爲るか、南方より沒人多し、日より水と居れり。七歳よりして、而して能く涉り、十歳よりして而して能く浮び、十五にして能く沒せり。夫沒する者、豈苟も然るあらんや。必將より水の道より得る者あらんとす。日より水と居れば、則十五にして、而して其道を得、生れながらよして、水を識らざれば、則壯よして舟を見ると雖、而も之を畏る。故より北方の勇者、沒人より問

○績わざをつみてなしとげる
○勳功なりて身の光ること
○烈其氣のさかんなること
(いましめ)○誡いましめつける
○訓をしへつゝしまする
○諦道理をいひきかせる
○警氣のつくやうにする
○箴心のあしきをすくうる
○諗わすれぬやうにする
(いと)○息いきをいれてやむ
○憩あひだをぬきやむ
○休しまひてやすむ
○歇息に同
(いた)○痛いたみを身におぼへる
○悼人の死などをかなしむ

ひて、而して其沒する所以を求め、其言を以て之を河より試みて、未溺れざる者有らざるあり、故より凡學ばずして、而して道を求めんことを務むるい、皆北方の沒を學ぶ者あり。昔者は聲律を以て士を取れり、士雜學して、而して道より志さず。今や經術を以て、士を取れり。士い道を求むることを知りて、而して學を務めず、渤海の吳君彦律い、學より志ある者あり、方より禮部より擧げられんことを求めり。日の喻を作りて以て之を告ぐ。

銅槃　巧譬善導　沒人

●雲喩

齋藤　拙堂

屬者、余同志を糾合し、文會を創む、衆題目を索む、余乃雲喩を以て之れより應す、且之より謂て曰く、雲い以て文より喩ふ可

○悵ざんれんに思ふ
○惻心にいたゝしく思ふ
○慟哀のすぎたる
○傷思ひわづらふこと
○慨いたみつよきこと
○弔きのぎくに思ひなぐさむ
○厭(いと)あきていやになる
○歌いやに思ふ
○怨(いか)ほらをたつ
○怨うらみいかること
○悲むつとする
○憂はちたちてだまち
○愾人につゝかゝる
○瞋目をいからす
○嗔こゑをいからす

し、蓋し物これより切あるゝ莫し、吾れ嘗て山巔に登り、其狀を覽觀し、因て發悟する所あり、請ふ諸君の爲めに之を言いん」其始めて起るや、浮々焉として黍を蒸すが如く、縷々焉として絲を吐が如し、散して綿の筐より出づるが如く、鎔して銀の冶に在るが如し、樹を繞りて行き、石を抱きて憩ふ、徘徊顧望、躊躇して前まず。騰りて天際に至るに洎びて、俯仰百變、挹く者は練の如く、張る者は幔の如く、行く者は水の若く、蹙む者は鱗の如く、突怒する者は峯の若く、貔豹する者は坡の若く、馬の奔るが若く、虎の蹲るが若く、龍の躍るが如く、鳳の翔るが若し、飜りて旌旗となり、聯りて瓔珞となり、覆ひて蓋となり、旋りて輪となり、亘りて樓閣城闕と爲り、時ちて山嶽と爲る、種々の異狀殫く述ぶ可らず俄かにして洸然、潰然、洶々然、浪の駭くが如く、濤の舂く

○嘯聲をあげしかること
○賤(いや)しき賤位のいやしきこと
○鄙(いや)しきそぼうなる
○卑下品なる
○陋せまくいやしきこと
○僅げびたる
○猥(いや)しいやしき
○至(いた)るの處にゆきかゝる
○到ることまでゆきおよぶ
○蹤あつまりいたる
○達ゆきたつする
○造ずゝみいたる
○詣きうする
○屆いたりとどく
○抵ることへゆきいたる

か如く、陂塘の決するが如く、紛紜擾乱して、大軍の移り動くが如し、圍既に合ひ、戰既に酣なれば、則雨霈然として至り、朝を終へずして天下に徧し」烏虖是れ天下の至奇至變と謂ふ可き者あり、然れども皆是れ一氣の變あり、意有りて、之れを爲すに非す、故に曰く、雲い無心にして岫を出づと、文能く是の如あらば亦其至れる者に非ずや、請ふ諸君と之を學いん」然りと雖雲にして雨を致さず、文にして用を濟ざるは、奇にして益無きあり、易に曰く、雲天に上るい霈と、人の雲に霈むるは雨の爲の故に非ずや、夫の旱魃の虐を作すに方りて、百苗槁れ、百物渚む、人々領を引きて雲を望むこと、猶疲民の天吏に於るか如し、是れ雲を望むに非ず、雨を望むあり、雲にして雨無くば、將た何の望む所あらん、唯其油然として雨を載て、之れを下土に行り、稿者をして勃然として

○戻　高き處へ入りこみいたる
○距　ものはしまでいたる
（いき）○生死せざること
○活　いきばたらきのある
○存　ながらへいきてある
○蘇　死したるものがいきかへる
（いの）○祈　いのり助をもとむる
○禱　幸福を求むる
（むい）○諫　道を以て非をたゞす
○諷　わきからちまはしいさむる
（いた）○致　さまりまでやりとほす
○輸　だん〳〵はこびいたす
（いね）○寢　ねどころへはいりねる
○寐　目をとぢやすむ
（いく）○軍　軍兵

以て興き、病者をして瞿然として以て起たしむ、此れ其人物よ需めらるゝ所以なり、文能く此の如くみして、後天下に用あり、請ふ諸君と之を勉めんと、衆唯々として退く、遂よ其言を書して出て課責を塞く。

紛紜　文會作文を作る　題目のこと　浮々焉　くすぐる
纖々焉　ほそくかたち　俳徊顧望　たちやすらひふり　躊躇　一足すゝみ一足あとへ
俯仰百變　いろ〳〵にかはる　練ねりぎぬ　幔たれぬの　盛　突怒
逡巡の家あり　城闕　しろのかまへ　泱然　ひろたち　潰然　くづるゝかたち　淵々然　ふかくかたち
紛紜　ふれまぎれ　擾乱　みだれさはぎ　霈然　あめのせつと　岫　やまのあな　旱魃　ひでり
領を引　くびをのばして　疲民　つかれたたみ　油然　うるほふかたち　勃然　おきる　霍然　とびたつかたち
唯々　はい〳〵と　課責　ひつけ

●食喩　篠崎　小竹

○師　軍の多きもの
（いも）○入　内へ入れる
○容　はいりこむこと
○納　いれおくこと
○沒　水中に入りみえぬこと
（いむ）○忌　いみきらふはゞかる
○諱　いみまける
（いふ）○曰　聲を發してものを
○言　口へだしてこゝろをいふ
○謂　事をさしていふ
○云　前のことをさきあげる
○道　わけをいひきかす
○稱　ほめていふ
（いや）○癒　きつぱりとなる
○痊　元氣のふゝしたること

味の美ある者、其の香必ず芳ゝし、其の香を嗅ぎて其の美を嚼ふ、兩者兼て食の美盡く、味と香と其れ偏廢す可けんや、然るよ美の嚼ふ可き者ゝ實よして、芳の嗅ぐ可き者は虛あり、人其の實を重じて、其の虛を略す、味を知る所以のもの鮮なし、藝の文詩ある猶經の禮樂あるが如し、禮の味、美よして、其の芳、樂よ在り、文の味、美よして、其の芳、詩よあり、學者或ゝ曰く、君子禮あるのみ、何ぞ樂を以てせんと、鼻竈の人よ非ざらんや。

偏廢　味と香とかたゝめること　經の禮樂　經書の中の禮記樂記あり

●水喩　齋藤　竹堂

水よ非さるゝ莫きあり、一杯の水、江海の水と異なる無し、故よ杯よ在れば、則吾れ其の杯水たるを知り、諸を江海よ投ずれば、則江海の水を見るのみ、復た杯水を求めんと欲する

○療りやうじしてなをる
○癒平復するも

う部

(うつく)○蹲手をつきつくばう
○踞物の上にすはるも
○跪ひざをつきてつくばうも
(うるはし)○美きれいにうつくし
○麗形色のうるはしきも
○艶容色のうるはしきも
○好かほのうつくしきも
○妍美にしてこぼるも
○娟もがたのしなやかなるも
○嬈人にもそれて長大なる
○妖艶にしてこぼる
○嬢やさしくうつくし
○姝容儀のうるはしき
(うらむ)○羨れがひうらやむ
○歆同上欽も同じ
(うたがふ)○疑さきを心もとなく
○猜おもふ
○猜じやすぬする
○意さきをかうとうた
○吁うたがふ聲
○訝あやしむ
○惕むさぼりうらやむきみ
○怪ふしぎにあやしむ
○貳二心をいだきうたがふ
(うつわ)○甌ものゝ中よりのぞく
○伺こちから向ふをうかがふ
○候ためらひうかがふ
○覬向のひまをみてうかがふ

も得ず、油と曰ふ者あり、猶水の如きあり、一點、油を水中ゝ注げば、汎々として舟の河ゝ在るが若し、數日を經るも未た曾て混を成さゞるあり、蓋し二者ゝ其の形を同しくして、其性を異ゝす、故ゝ相容れざるや此の如し、噫是れ取て以て人ゝ喩ふ可し、夫れ圓顱ゝして横目あるゝ皆人あり、然れども其の心ゝ則君子小人ゝ分る、君子ゝ寛裕あり、強毅あり、狷介和厚の同しからざるあり、而るゝ其小人と居るときゝ、則必ず君子と君子と相合して、偕ゝ小人を拒ぐ者、其の性則然るあり、然らば則、君子の性ゝ水あり、小人の性ゝ油あり、油の水ゝ容れられざる固とゝ宜あり、而るゝ今水の水と、或ゝ反眼し、相視て曰く、彼ゝ一杯の水あり、我れゝ江海の水あり、彼れ安ぞ我れゝ及ゝんやと、將た且つ其己と類を同ふするを忘れ、油を以て之を視、油の後ゝ笑ふを知らざるあり。

汎々（へんへん）　圓顱（まるあたま）　横目（よこめ）

◎祝類

●吾妻橋落成式の祝辭

山縣　有朋

祝文ゝ神ゝ纏する辞と云ふが本義ありしを、祝賀ゝ云ひて、現今ゝ、專ら賀章を稱するゝ至れり、大率、慶賀の時ゝ用ふ、文体華麗ゝして、人目を懌ばしむるを貴ぶ。

吾妻橋架設工を竣へ、茲ゝ落成の式を行ふ、鐵欄高く空際ゝ横はり、石柱深く河底ゝ入る、結構の堅牢ある、觀望の壯麗ある、實ゝ府下第一とす、顧みるゝ明治十八年、洪水横流、堤防を崩し、橋梁を壞り府下、數大橋概ね皆害を被り、此橋も亦支ふる能はず、乃ち其年の十一月始めて工を起し、是ゝ於て成る、月を閲する二十四、金を費す拾餘萬、一欄一柱、皆府民の辛苦勞力の餘ゝ出ざるはなし、蓋此橋や從來府下四大

○覘向のやうすを知ち
○瞰みおろしうかがふ
○偵さぐりうかゞふと
○闖頭を出してうかゞふ
○闘物のひまよりみると
○覗こかげよりうかゞふ
（ちつ）○訟財寶あらそひ
○獄くにのと
○訴つげうったふ
○愬同上
（ちつと）○疎あひだをとうざける
○疏うとゝしきと
（がす）○趣せつくと
○促さいそくする
（ちつ）○濕しめるると

橋の一よ居り、其路線の通塞は、大よ府民の利益よ關する、固より言を俟たず、則ち橋梁の堅脆其禍福の係る所亦僅少あらず、是れ工事の彌久を脈はず、費額の増大を吝まずして、遂よ今日の盛舉ある所以あり、今や此美觀よ對し、曩日の災害を追想せずんべあらず、而して府民の鋭意、敢て苟且よ安ぜざるもの既よ斯の如し、庶幾は今後再び崩壊の患なくして、府民の幸福を永遠よ保全する、銕石も雷あらざらんことを、是れ有朋の信じて疑はざる所あり。

●祝捷會の祝辭

補本　正隆

我東京市、日本橋區は何故よ祝捷會を開く、

今上天皇陛下の神武聖文を祝せんが爲めあり、我が軍隊の忠勇精勵を祝せんが爲めあり、我國民の愛國殉公の精神と行爲とを祝せんが爲めあり、而して我國史よ光榮赫々たる雄圖

○滋したしふやかす
○潤にた〳〵してかは
○濡ぬれて水けのある
○沾水にぬれる
○津地氣のしぜんにうるほふ
○澤にたりとしたる
○浥水にしたもと
（ちつふ）○占來る者のやうすをみると
○トうらなひみる
（ちつ）○俯頭を下にむくと
○俛同上
（ちつと）○動しごかあらす氣内にありてうごくと
○感心のかんじうごく
○搖ゆら〳〵すると
○撼風が物をうごかす

英略の記錄を加へたるを祝せんが爲めあり、獨り之よ止まらず、我が大日本の膨脹せんとするを祝し、我大日本の世界よ於ける位置の一變せんとするを祝し、而して更よ屢々相接する戰勝を一躍して、東洋の平和を擔保する最終の大目的よ突進する新鮮鋭猛ある軍隊と、忠愛ある國民の元氣を皷舞せんが爲めあり、若し夫れ今日の祝捷會よして、漫よ軍隊の志を驕らしめ、國民の氣を惰らしめ、小康よ安んずるが如きあらば、是れ祝捷會の本意よあらざるあり、獨り祝捷會の本意よあらざるのみあらず、亦遠征將卒よ給はりし、前途尚ほ遠しとの

大元帥陛下の聖勅よ背反するものあり、今や戰功は縱令世界を震動するも、唯是れ端緒のみ、此端緒を今日よ於て祝するは、其終局よ向て、百尺竿頭一歩を餓進せんが爲めにて、宜

○掉手にてふりうごかす
○震ふるひうごく
○潛水のうごく
○落舟などのうごく
○颱風波をうごかす
○移(うつ)　○移動へやる
○徙日月のうつる
○遷こゝよりあちらへうつる近同し
○映月の水にうつること影のうつり其形に見あること
○寫(うつす)　○寫元の如くかきうつす
○抄中よりかきぬく
○摹形をうつしまれる
○抽あがきうつす
○恨(うらむ)　○恨のこりおほく思ふ
○怨人のしむけをあしく思ふ
○憾ゆきどゝかぬと
○悻いかりてうらむ
○怒にくみうらむ
○惋あてのちがひうらむ
○慊不足と思ふ
○慰うらみいかる
○受(うく)　○受くれたるをうける
○承下より上の物をうける
○稟米などを倉にてうける
○奉大じにうける
○穿(うがつ)　○穿きりにてうがつ
○鑿のみにてうがつ
○埋(うづむ)　○埋土をかぶせる
○瘞うつめおほふ
○湮うづもれてしれぬ

戰の詔勅炳として日星の如く、四千餘萬、國民の熱血を灑ぎたる臨時議會と於ける衆議院の上奏は、嚴として秋霜の如し、國民の猛志雄心、豈と中途と荒廢し、小康と安んずるが如きあらんや、要すると清國を膺懲し、東洋と於て、永久なる平和の擔保權を握るとあらずんば、止む可からざるなり。茲と謹で愚衷を表し、併せて以て祝す。

●勸業製絨所開業祝文

伊藤　博文

絨布の用、日と增し、月と加ふと雖とも、曾て我が工人の手と成るもの無く、擧げて之を海外と仰げり、是を以て政府新と、織機を歐州と購ひ、遠く工師を本邦と招けり、今や製絨工場、經營成るを告げ、茲と開業の典を行ふ、抑此場たる實と本邦創造の業として、民力の當り易からざる所あり、故と政府率先して、之れが端緒を開き、以て摸範を垂れんとす、願はくは規畫其宜を得て、大と成蹟を顯はし、人民の之と傚ふ者、所在並起るに至らば、工場の設も、亦終と徒爲あらず、諸君其れ之れを勉めよ。

絨布(じゅうふ)　織機(しょくき)　端緒(たんちょ)　摸範(もはん)　工師(こうし)　所在(しょざい)

●京都織工場開業式の祝辭

横村　正直

人生闘く可からざるものは、衣食住にして其最も人工を要する者は衣服なり、政を爲す者注意せざるへからず、今を距ること一千五百九十五年前、人皇十五代、應神天皇十四年、百濟國縫衣女を貢し、二十一代雄略天皇六年、諸國と詔し桑を植ゑ、后妃と勅し蠶事を勤めしむ、同十四年吳人、漢織、吳織を貢し、本邦織工の業大と開く、五十代桓武天皇延曆十八年、印度人、木綿實を齎し來り、四國紀州とこれを植るに雖

○塡あきまをうめる
（浮）○浮水の上にうゝ
○泛水の上にてしづま
○泳水中をゝいる
○漾たゞよひうゝ
○汎波にまかせうゝと
○漂たゞよひうゝ
（奪）○奪尚の物をとる
○奪むりにとる
○褫衣服をはぎとると官位などをとると
（歌）○歌堂わる曲を歌と云ふ喉にて聲をしちべるなり
○頌德をほめうたふ
○謳はなうた
○嘯うそぶきうたふ
○謠ふしをつけてうた

も、中間、其種を失ひしよ、百七代後陽成天皇文祿年間、支那國より再び之を傳へ、衣服の料其用大ありとす、近年外國交易の道開け、彼が輸入する絹綿毛布、其製精よして、其用多く、殆んど內地の布帛を壓せんとするの兆あり、抑京師の地たるや、衣服の料を製出する古來名譽の所よして、往昔漢織、呉織の業を傳へしも、正しく西陣よ在りて、今よ至るまで、海內擧て京師の製法を仰ぎ倣ふ、夫斯の如くよして、豈空しく內地製品の輸入物よ壓せらるゝを坐視するの理あらんや、若かず勇進して、彼が長を取り、我が短を補ひ、出藍の青、未然の萎靡を救はんよは、去明治五年、二三の織工を勸誘し、遙かよ佛蘭西國よ航せしめ、其織法を學び、此よ之を傳へしめ、織て昨明治十年八人の學生を發遣し、尙其學を研究せしむ、庶幾は、織工の開進よ功驗し、古來の名譽を擴張し、內

○謳こゑをとゝのへうたふ
○誦そらよみする
（患）○患行するをあんじる
○憂くるうする
○愁かなしむ
○悄さびしくなる
○怫むね一ぱいになる
○嗔いんきになる
○罹それにかゝりうれ
○憫かなしみのある
○感いたみうれう
○罕ひとりぼしの貞
○疾、病、疾、やまひをうれうる
（薄）○薄あつくなき
○非そまつなあしらひ

地の製品を盛大ならしめんことを、嗚呼此場を開く原因を悠久よ延き、功驗を遠大よ望む、豈一時一場經濟の爲めならむや、此場を看る者、此舉を聞くもの、能く此意を領せば、亦以て國家經濟の裨益を爲あらん。

◎祭類

祭文は、親友よ祭奠する辭よして、其人の言行を讃し、以て哀傷悼惜の意を寓するあり。其旨、恭よして、且つ哀しかる可し。然れは、辭、華よして、實靡く、情鬱して宣びざる若きい、文よ到れるものと稱せざるあり。

●樂翁公を祭る文　頼山陽

歳、庚寅よ在り、夏五月十有八日、故少將、樂翁公の周忌の辰と爲す。布衣頼襄、私よ宋の民が、司馬溫公を祭るの例を用ひ、香を焚きて、遙よ拜し、敢て清酌庶羞の奠を用ひず、而して

○涼底までみえる
○濁酒のあぢのうすき
○澆そゝぐことのうすき
○磷うすき石
（ゑる）○植ゑたてる
○樹たてゝおくこと
○栽きなどをうゑこむ
○種ゑうゑて根づかすこと
○藝ゑうゑておひたゝす
○殖ゑふやす
（いと）○旨香にてあぢあふこと
○熟ゑみてうまみのある
（ゑき）○賣あたひをとりうる
○售物をうること
○酤酒をうる

文を用ひて、之を祭て曰く、人貴賤の相懸ること天地の隔るか如く、而して知遇の間あき意念の死より出る者わり、況んや、昔の日仰して、今の神契する所あるをや、昔在、吾輩、稗、天明の季、寛政の始め、聞く信岳の火を發する、灰七道の二より被ふり、閭里の哭、饑より號び、斃るを待ち、起て盜賊を爲し、蟻聚蜂萃し、三都の市、白晝、肆を閉づ、官吏來り捕ふるも、罵詈して忌まず、曰く、汝が肉を啖いんと欲す、寧ぞ汝を之れ畏れんや、汝より大なる者わらべ、來て吾と對せよ、吾れ童心と雖も、恂懼寐ねず、況んや天下の心、敗船を以て海より坐し、洪波逆風底る所を知らざるが如し、已まして聞く、越公ある者ありて出で、宗親の懿を躬らし、付詫の密を任じ、其の賞罰を宣べ、凶を變じて、吉と爲す。一令發する毎に、人の之を望む、暗夜より出て、日月を覩るが如きあり。其之

○沽賣と同し
（ゑる）○餓いらのへる
○餓米穀のできずうえ
○餒ひたるき
○饉野さいのできずうえ
（ゑつ）○擊手にて物をうつ
○打物をうつこと
○扣物をたゝく
○鞭ばちにて太鼓をう
○撞こたへるやうにう
○撞杖にてうつ
○拍掌力かちうち合ち
○撞うすに入れてつく
○敲たゝく
○鼓たゝきて音をたず

を聽くや、將より潰んとするの卒、良將を得て、其の呵喝を聞くが如きあり。其或い畏怠して、之を謗訕するや、狡奴黠僕の家宰の聰察を便とせざるが如きあり、七年の中、百弊盡く撤り、骸骨を方より壯ある年より乞ひ、而して權勢を意を得るの日より舍つ、經世濟民の精を集古玩物の末より消し、我が君事を濟し、吾肩を息んことを願ふ、政書一の如し、吾建て、吾れ觀る、才茅茹の如し、吾に代て君を輔け、身を以て安危より繫くる、三十有九年、老て終を令す。公より於てい、安より就くも、而も天下の忠と爲す所あり。而して吾鰥生何ぞ己と關せん、抑〻幼より强より及び、公の海内より立を聞き、公を望む天際より在るが如く、忽ち潛夫の一書を徵す。蓋し今を去ること四歲、其の媒瀆を懼るゝより、乃ち嘉誨を辱くす、汝の事を紀する、繁備より適す、事を論ずる、兆會を見る、後の論者、何と云はん。

○揉こつ〳〵つゝく
○搢うちあてる
○搭うちかける
○控うつこと
○戛こすりて音をたゝす
○搢うちやぶる
（うむ）○産うみだす
○生はたらきを以てうみだす
（うも）○得求て自分のものとする
○獲とりいれる

え　部

（えが）○畫形をえにうつしとる
○描えがくこと
（えた）○撰手にてえらぶこと
○擇えりわけそろへる

吾其の大を知ると、一言の九鼎より重きを以て、信を百世より取るよ足る、自ら顧ふ、孤寒よして、世を擧て、背く所、何を以て獨り公の愛を得たるや、感激を抱くの衆よ異あるも、而も報答の期おきを悼む。爰よ忌辰よ遇ひ、聊か吾か私を盡す、嗚呼哀ひ哉敢て其の纓を望まず。

周忌　一周忌のことなり　信岳山をいふ　信濃の國諏訪　蟻聚蜂萃　たくさんに　越公　公あり
宗親　そうしんぞくをいふ　謗訕　そしり　家宰　からう　百弊　〳〵のもろ〳〵　經世濟民
一書　外史より　茅茹　ひいでゝ　強　三十歳のこと　潛夫　りんしていふ
嫋瀆　けがるゝこと　嘉誨　よきをしへ

㊟太史公を祭る文

方孝孺

公の量、以て天下を包む可くして、而して天下、公の一身を容る、こと能はず、公の識、以て一世よ鑑とす可くして、而して世を舉げて、公の人と爲りを知ること能はず。道以て造化

○揀分別してえらぶ
○掄品をわかつ
○選よりとること
○簡すぐりとる
○差したいをたてゝえらぶ
○算かぞへとる
（える）○彫ほりつけるみがくこと
○刻きざみつける
○鐫きざみつける
○鈸刀を以て水にすぢをつける
（えだ）○枝木の幹よりわかれたるまた
○條みきよりわかれたるもの
○朶樹木のたれて下りたる臭朶も同字

お　部

（おかる）○慮工夫をつける

を陶冶す可くして、而して正寢よ終ることを獲ず、德以て萬類を涵濡す可くして、而して其の後昆を蓋ふことを獲ず、其の有する所の者い、皆衆人の勉め難き所よして、而して未だ嘗て、自ら以て足れりと爲さず、其の遇ふ所の者は、皆衆人の處し難き所、則怏然として、命を委して、而して戚欣を置かず、此れ公の前古よ跨越し、彙を拔き、倫を超へ、宇宙を控して、獨立し、天地よ後て、而して長存する所以の者あり、世烏ぞ、以て之を知るよ足らん。徒よ其の雄文を傳誦して、其の詞を執る者は、其の意よ惑ひ、其の似を得る者い、其の直を失ひ、彼の好慕者すら、且つ此の若し、又何ぞ臧食と叔孫とよ恠まん、宜あるかな、公の斯の世を厭て居らず、遠跡を峨眠よ甘んず、蓋し將よ重華を九疑に弔し、屈子を江濱よ唁せんとす。而して流俗の埃塵よ汙るゝよ忍ひざるあり。然

○憎いろ〳〵とおもふ
○恕身にくらべおもふ
○臆心のそこにおもふ
（ふも）○思心をつける
○念心にとめる
○懷それを心にこめる
○想形を心におもひやる
○憶思ひいだす
○惟これいかうとおもふ
○爲おもふてする
○顧ふりかへりおもふ
○願ねがひおもふ
○謂おもひをいれる
（おつ）○落木葉などのおちへおつる
○墜地におつる

れい則、公固より死生榮辱を以て、夢幻と爲し、得失毀譽を浮雲と爲す、六合の內、孰れか、其の第宅ょ非ざらん。薦神の士、皆其の曾玄の若し、尙ほ何ぞ窮達を之れ云ふょ足らんや。吾れ獨り悲嘆して、止まざる者は、上は以て斯の道を憂ひ、下は以て斯の民を憫み、恩を受けて、而して未だ報ひざるを愧ぢ、來者の聞ゆるおきを懼る。嗚呼哀いかあ、公其れ此を舍て、、安くょか之く、豈其れ形と俱ょ逝き、物と同しく泯びんか、吾れ猶ほ彷彿として公の風に騎り、氣を馭し、日月に鞭て、星辰を叱し、豈冪の野ょ遨遊し、無窮の門ょ出入するを見る。是れ蓋し世ょ處る者、止々七十有三年ょして、而して死せざる者、其の幾千万春あるを知らず、其の人ょ遇ふ者、艱危して、痛む可きが若しと雖も、而れども、天を樂しむ者、數計ょして、而して具陳す可からず、而して吾猶ほ、嗷々と

○隕天より地へおつる
○陀くづれおつる
○貶っりかけおとす
○擠をしのけおとす
○頹くづれおつる
○零雨雫のほつ〳〵おつる
○墮、隋、高き處よりおつるやぶれおつるの意
（おとろ）○衰血氣つきておとろふる
○憔からだのおとろへる
（おし）○遲ゆる〳〵ゆきみあへす
○晩日のくれる
○晏日のたける
○訥言のどもる
（おせ）○掩手にてかくす
○蓋ふたをする

して、山嶺と水濱とょ哭す、是れ皆公の笑ふ所、而して笑ゞ能く、教育の厚恩ょ酬ひん。嗚呼哀しひかあ。泰萃を列して、以て教と爲し、滄海を注ひで以て尊と爲す、吾公の我を願みざるを知て、而して焉いくい、以て公ょ報ず可き者、其の聞く所を習て、以て明訓に負むかざるを求め、其の得る所を行て、以て黎元ょ益あらんことを冀ふょ幾からん皇天と后土とょ酹ふ尙わくい、同じく斯の言を聽みよ。

鳳、赤霄ょ飛び、百鳥之ょ朝し、或い粘ょ集る、鵲雀之を嘲ける、蛟龍天ょ遊び、九土を雷雨ょす、一い或い泥蟠蛙蚓侮を獻ず、古の賢豪身廟堂ょ居り、耆倪稽旨其の餘光を望む、一朝勢を失ひ、讒ょ遭ひ、斥ょ遇ふ。羣兒禍を樂み、謗毀山積惟太史公、間世の英、國の耆龜、人の典刑、洪武の初載、光天寵ょ膺り、名い夷夏ょ聞ゆ、內外風動衣冠雲の如し、門ょ

趨拜し、一言を得るあれば、寶、璵璠の若し、不幸にして西遷し、江湖に瞑目し、麟踣して亡ぶ、羣犬交吠し、物之を怪まるゝに、常に異るを以てあり、衆人知らず、吾道乃光、茲の賢王に賴りて、誠明濟哲、先正を興懷し、黄髮を追悼し、意、公を起んと欲す。過を論じ、失を規す、每に遺文を觀て、弊獨を軫卹す。惟君、臣を知る、惟賢、德を知る、王言既に出で、讒妬自ら息む、公の名績終古磨せず、鬼燐紛々日月を如何せん。小子無能蚤く教育を承く。其の愚を鄙まず、千載是れ託し、歲月遄邁、忽二十年、志大、成すことなく、公の門を辱しひるを懼る、俗論の悲き、夫れ豈に辨を待たん、九原之を聞かば、當に其論を笑ふべし。青城鑑天、群仙都する所、公の神、亡びずして、其れ茲に在らんか。

●殉國の士を祭る告文　荒尾精

○蔽日のまへにさへぎる
○祢かげにやすんする
○蒙上をつゝみかくす
○胃おほひつゝむ
○廡かげにしおくと
○廡下になつてゐると
○覆上からかぶせる
○庇ひさしのと
（おもむく）○趣その處へもちかける
○趨そこへはしりこむ
○赴そのつぼへゆく
○歸おちつく
（おとか）○嚴わきからも威げんれぬこと
○莊つゝしみうやまふ
○儼ものやうす

（おびゆ）○怯おそれおゝてる
○駭はいやうしおどろく
○怯あゝておどろく
○愕ふゐにおどろく
（おびや）○喝聲をだしてしかりつける
○勦せめおびやかす
○嚇うひかれぬやうにおどす
○威いせいを人にしめす
（おびや）○劫ものをとる
○脅へいこうさせる
○剽おびやかして物をぶんどる　むりにとりあげること
（おこる）○起ひきおこす
○發内のものが外へでる
○興下地のあるものをおこす
○作あらたにつくりおこす

嗚呼諸士、忠慨の志、義勇の膽を以て、厥然軍に從ひ、身を忘れて公に奉じ、奮然敢往、遂に以て命を致せり。天下聞く者、誰か感激して、英風を思はざらむ。況んや、余の諸士に於ける、尋常師友を以て、相識視す可からざるをや。嗚呼忠に志して、忠に死し、義に志して、義に終り、興亞の業に志して、征清の役に殉せしい、所謂馬革に屍を裹むもの、諸士の志に於て、則ち負く所なし。然りと雖も、東方の事、任重くして、道遠し、余の諸士に期する所、豈唯此の如きのみならんや。而して天遽かに、我有望の士を奪ふ。それ余の心に於ける如何ぞや。余い大に同志の士を會し、一大祭事を舉げ、以て聊か忠魂毅魄を慰めんと欲す。獨り憾む、諸同志、遠征未だ還らず、且諸士の勳蹟未だ詳ならざる所あり。因て暫く待つあり。今や鳳輦改瑞、海内齊しく、我皇の威德を仰ぎ、我軍

（おく）○置　うごかぬやうにする
○舍　それなりにしておく
○錯　加へおく
○釋　はなしておく
（おほひ）○大　盛大なり
○太　ふとき事
○鉅　おほひなること
○偉　すぐれておほひなる
○洪　かさの大なる
○鴻　とりの大なる
○宏　ひろくふかし
○譚　ふかきこと
○恢　ぐわいりとして大なる
○厦　家の大なる
○奄　あまりある心もち大なり

の連勝を頌す。余諸士を懷ふて見る可からず、乃ち年饌香果の供を敬具して、以て諸士の魂を招く。嗚呼鴨水の東、東山の麓い、是れ余が諸士と春を迎へし處、山靜かゝ谷幽ゝ、門ゝ俗客無く、室ゝ圖書あり。庶幾い諸士の靈、優游棲止、以て靜かゝ三軍の振旅と、諸同志が凱歌を奏して、至るを待て。

◎凱旋後、碑を樹て祭る文　西郷隆盛

夫れ生あるものゝ死あるゝ、自然の理ゝして、豈之を逃るゝことを得んや、然れども死い人の難しとする所、獨り大義ゝ臨みて之を棄つるゝ鴻毛よりも輕し、其難しとするものを以て、輕しとして、之を棄つる、変誼の至れるものと云ふべし。これ人の言ゝ依て、强て之を爲す者ゝ非ず、皆自ら感發して生を忘れ、衆人期せずして一致ゝ歸す、所謂神盟あるものあり、これ臺灣の役ゝ從事する所以なり、是ゝ於て我徵集隊中、

○哆　大なる口の貌
（おそ）○恐　心もとなく思ふ
○懼　おそれきづかう
○怕　おそれきづく
○懼　おそれちゝむ
○懦　おそれあはてる
○懾　おびやかされておそるゝ
○怯　おそれくれのする
○怯　おくびやう
○惕　うれひおそるゝこと
○懾　きをうしなふ
○竦　ぞつとしておそれる
○畏　おそれつゝしむ
○威　おそれにおそれる
○怖　おそれおそれる

一心同体、猶右手急あれば、左手覺へずしてこれゝ應するが如し、何ぞ命を待て爲んや、嗟乎難戰急激の間ゝ當りて、一隊四方ゝ分離し、之を救ふゝ暇なく、憤戰衝突して終ゝ斃る、實ゝ吾骨を刮り、我肉を剖くゝ異あらず、年を歷、月を經て、猶切痛ゝ堪ふ可らず、是ゝ於て同隊余生を保つ者、相會し、戰亡者の姓名を錄し、之を席上ゝ居き、永く神盟の義を失いず して、而して存亡を以て、親疎わらざらんことを欲す、願くゝ大義を踏み、泉下ゝ謁し、必ず口を噤せざるあり、請ふ之を以て、靈魂を慰めよ、西郷隆盛謹誌。

◎祭二田横一文　韓文公

貞元十一年九月、愈如二東京一、道出二田横墓下一、感横義高能得士、因取酒以祭、爲文而吊之、其辭曰、

(おびた)○多たゝさん
○饒たりてみちたること
○夥敷たゝさんなること
○衆生きものゝおほき
○庶衆生のおほきこと
○穰おほくゆたかなること
(おく)○饋食をすゝむること
○餉家より外へ食物をおくること
○餽おくるものゝこと
○餞はなむけをおくること
○遺かたみのものをおくること
○遣おくりつかはすこと
○贈おくりあたへること
○貽子孫のためにおくること
○饋生物や米をおくること

事有ㇾ贖ニ百世ニ而相感者、余不ニ自知ニ何心ニ非ニ今世之所ニ稀、孰爲ㇾ使ニ余歔欷而不ㇾ可ㇾ禁、余既博覩ニ乎天下、曷有ニ庶幾乎夫子之所ㇾ爲、死者不ニ復生ニ、嗟余去ㇾ此、其從ㇾ誰、當ニ秦氏之失ㇾ鹿、得ニ一士ニ而可ㇾ王、何五百人之擾擾而不ㇾ能ㇾ脫ニ夫子於劒岳ニ抑所ㇾ寶之非ㇾ賢、亦天命之有ㇾ常、昔闕里之多士、孔聖亦云其遑々、苟余行之不ㇾ迷、雖ニ顛沛ニ、其何傷。自ㇾ古死者非ㇾ一、夫子至ㇾ今有ニ耿光ニ。隕ㇾ辭而薦ㇾ酒。魂髣髴而來享。

●祭ニ劍岳先生ニ文　柴野栗山

維壬辰、十二月辛酉朔、越十七日、丁丑、姪、阿波國、儒學邦彦、敢具ニ清酌時羞之奠ニ謹祭ニ亡伯父、劍岳先生之靈ニ。嗚呼祖先之積善宜ㇾ延ニ慶福ニ、伯

○賂望のかなふやうゝ
○賻貨財を喪事のたすけにする
○送たびゝ行く人をみおくること
(おぎな)○補たりぬをたすけること
○裨たすけること
(おす)○推おしのけること
○搾おしおさること
○押上からおさつける
○壓同上
○排おさひらくこと
○捺手にておさへること
○壁ゆびまておさへる
○劾罪をおさたゝし上へつゞる
(はぶく)○奢表をはること
○倨人にたかぶること

父之盛德、宜ㇾ享ニ康壽榮達ニ而遽至ニ乎斯ニ乎。嗚呼哀哉、病不ㇾ待ㇾ藥、葬不ㇾ執ㇾ紼、背ㇾ恩、違ㇾ義、行負ニ神明ニ、聞ㇾ赴一慟永訣、終天音容、恍惚若ㇾ臨ニ其前ニ。哀迷擺裂、錯辭無ㇾ次。尊靈不ㇾ亡、鑒ニ茲哀誠ニ。嗚呼哀哉、尚饗。

◎吊類

吊ハ至ル、吊文ハ死を吊する辭なり。蓋し賓の主を慰するゝ至到を以て、言を爲せばなり。或ハ其時ゝ於てし、或ハ前人を吊す、並ゝ吊文と云ふ。大抵、吊文ハ屈原の離騷の体ゝ髣髴として、而も切要惻怛なるを要す。

●菅公を吊ふ文　藤田東湖

嗚呼曠世の才を抱き、聖主の知を受け、出處進退、實ゝ皇道の盛衰ゝ關す。呼喻密勿、豈ゝ天下の大機ゝ非ずや。其の上

○侈　奢むきをはりひろげること
○傲　人をみくだす
○汰　みぶんをこす
○驕　滿心してたかぶる
（おと）○怠　ぶまやう
○懈　心のだらける
○惰　物をなげやる
○慢　物をすておくこと
○嬾　ものうきこと
○懶　同上
○弛　氣のはりのなきこと
○倦　つかれおこたること
○緩　のひゆるみたること
○勤　怠と同じ
（かい）○老　七十より
○習　六十又八十
○耋　八十
○頤　九十
○期　百年
（むろ）○愚　はたらきのなき
○愚　りひのわからぬ
○愚　かたしなること
○頑　かたくなゝてぜひしらぬ
○憧　心のむなさき
○鈍　きがきかぬ
○蚩　いやしき
○騃　ぐち
○癡　ちえのなき
○駑　馬のあしき、こと
○魯　はたらきのなきこと

下、莫無きの日ゝ在るも、亦宜しく明哲身を保ち、以て鴻基を護るべし。況んや、藤氏の蔓延するゝ當りて、國勢漸く陵遲ゝ就く、椒房槐坐、壟斷を是れ私す、聖主慨然として、乾綱を振て、坤維を肅せんと欲す、輔弼の任、公ゝ非すして誰ぞ、乃ち身を文苑ゝ起し、直ゝ位を台史ゝ致し、魚水の遭逢、千載の一時、大化の隆、日を數て期すべし、曷ぞ圖らんや、讒人極まり陶く、鳥と爲り、鳴と爲り、君門九重、雲霧の曦を蔽ふて嘆し、關山千里、身西州の塵ゝ落つ、知者福を未萌ゝ消し、達人誰を撝つて、雌を守る、公の聰明を以て、何ぞ慮の斯ゝ及はざる、既ゝ已ゝ、幾伏阨窮す、亦宜しく物外ゝ超然として、壽を神龜ゝ比すべし。顧ふゝ壹鬱憤懣、白玉碎け、幽闇萎む、抑々盛衰の機、其跡ゝ就て之を論せば、何の術か施す可からざらん。而して禍福の理、或い推す可らず、獨り

夫の盜跖と伯夷とを見ずや、且つ公をして得るを患ひ、失ふを患へしめば、曠世の才ありと雖も、亦奚を以てか爲さん。廟堂を去て、其君憂へずんば、又安ぞ身を以て、社稷の安危と爲すゝ在んや、嗚呼盛衰の變、猶朝暮の相隨ふがごとし。古の聖賢も亦然り、何ぞ公ゝ於て獨り疑わん。唯天、皇室ゝ福せず、公にして此の如し、孰か民瘼を扶けん。遂ゝ延喜以降をして、徒ゝ粉飾を以て治と爲し、綱維上ゝ壞ぶれ、威權下ゝ移り、大化の隆、天を極めて亦追ふ可からざらしむ。是れ千載の大遺憾ゝして、志士仁人の永く、歎欷する所あり。夫れ公の一身い、日月と輝を爭ひ、遐陬僻壤、或い廟し、或は祠し、天下後世、神と爲り、師と爲り、英靈赫々たる若くあれば、又復た何んぞ悲まん。

吁喻密勿天子より政事むきの御問合せあることなり　右大臣　台史のこと　椒房　後宮あり　槐坐

○范無智の貞

（おと）○追あとよりおふ

○逐あきなしたひゆく

○遁めぐりおひゆく

○從あとにつひてゆく

○尾あとにつきゆく

○驅馬をおひたてる

（およ）○及そこに至りかゝる

○遘うれにかゝる

○迨だん〳〵ゆく

○豐日のよはどあらはれる

（おし）○壓擊のでぬ

○瘠同上

（おそ）○懼おろろしきゆめを

○襲おそひうつ

三公を云ふ　聖斷ひとりじめ　君門九重天子のをす　物外おつくわいか　社稷くにのこと

粉飾ふんしよくをかざる　獸欲ようりやう　遐陬へんすうくにのすみ○國中遐陬僻壤のこちずのこと

●古戰場を吊ふ文

李華

浩々乎として、平沙根り無く、夏人を見す、河水縈帶、群山糾紛、蹈たり、慘悴風悲しみ、日曛し、蓬斷草枯れ、凜として霜晨の如し、烏飛んで下らず、獸挺して、群を亡ふ、亭長余に告げて曰く、此れ古戰場なり。常に三軍を覆す、往々鬼哭し、天陰れば則ち聞ゆと、心を傷ましむるかな、秦か、漢か、將た近代歟、吾聞く、夫れ齊魏の徭戍、荆韓の召募、萬里奔走し、連年暴露す、沙草晨に牧し、河水夜渡る、地闊く、天長くして、歸路を知らず、身を鋒刃に寄せ、腦膽誰か訴へん、秦漢而還四夷の多事なり、中國耗敝世として之れ無きに、古稱す、戎夏い、王師に抗せずと、文教、宜を失ひ、武臣奇を用ひて、奇兵仁義に異るあり、王道迂闊として、而して爲すこと莫し、嗚呼噫嘻吾れ想ふ、夫の北風漠に振ひ、胡兵便を伺ひ、主將敵に驕り、期門戰を受く、野に旌旗を竪て、川に組練を廻らす、法嚴く、心驍き、威尊く、命賤し、利鏃骨を穿ち、鞨沙面に入る、主客相撲ち、山川震眩して、聲江河を折き、勢雷電を崩す、窮陰凝閉して、海隅に凜列たる若きに至りては、積雪脛を沒し、堅冰鬚に在り、鶯烏巢に休ひ、征馬踟躕、繒纊温かく、指を墮し、膚を裂く、此の苦寒に當て、天强胡に假す、澈傻殺氣以て相翦屠す、徑に輜重を截り、橫に士卒を攻む、都尉親から降り、將軍復た沒す、屍亘港の岸を塡め、血長城の窟に滿つ、貴とおく賤とおく、同く枯骨と爲る、言ふに勝ゆ可けんや、鼓衰へ力盡き、矢竭き絃絶ち、白刃交て寶刀折れ、兩軍壓て、生死決す、降らんかな、身

（おこ）○行すぐ身におよばなふ

○將ひきゐおこなふ

（をは）○終つきてしまひたる

○卒物のはて

○畢きまりつ〳〵

○訖しまひのつ〳〵

○已もうふまうと

○了ちちのつきたる

○竟ゆきとどまる

○闋歌曲のしまひたる

（をし）○教みちびきをづくる

○喻をしへさとらすこと

○誨ものをいひきかせる

○詁古今を明かにいひきかせる

身にうくるやうにいひきかせる男に教と云ひ女に訓と云ふ

○訓

(ゐる)○居　所をきめてとどまる
○宅　やれをこゝろへてゐる
そこに身をすわら
○處　してをるあと又物をうれしくきまりをつけると
(をど)○踊　ゐどりあがる
○躍　はねをどる
○跳　とびあがる
○跳　をどりこへる
○趨　こをどりもる
○趨走　ることのはやき
(ゐる)○折　をりはなす
○刱　へしまげる
(をさ)○治　各その所をうるやうにせわをしとりあつかふと
○理　すぢをみてとりあつかふ
○經　糸のみだれねやうする

を夷狄よ終へん、戰いんかな、骨沙礫よ暴さん、鳥聲あく、山嶽々夜正よ長く、風淅々、魂魄結んで、天沈々、鬼神聚つて雲霧々、日光寒くして草短かし、月色苦んで霜白し、心を傷ましめ、目を慘ましむ。是の如きあらんや、之を聞く、牧趙卒を用ひて、大よ林胡よ破り、地を開くこと千里、匈奴を遁逃せしむ、漢天下を傾け、財殫き、力痛む、人を任するのみ、其れ多あらんや、周獫狁を逐ひ、北太原よ至る、既よ朔方よ城き、師を全ふして而して還る、飲至策勳和樂且閑む、穆々棣々、君臣の間、秦長城を起し、海を竟て、關と爲す、生靈を荼毒して、萬里朱殷、漢匈奴を擊ち、隱山を得ると雖も、枕骸野よ遍く、功、患を補はず、蒼々たる黎民、誰か父母無からん、提携捧負其の壽あらざるを畏る、誰か兄弟あからん、足の如く手の如し、誰れか夫婦無らん、賓の如く、友の如し、生

○爲　したてゐしゆくと
○納　きたものをうけいる
○繕　をりつくろひをさむ
○綜　一處よよせてをさむる
○修　下地のをほりにをさめる
○脩　同上
○蔵　たくわへ人にみせぬ
○攻　害そのをとをさむる
○収　外の物を内の物にする
○倫　その事をわけをさむる
○戈　くさをかりとる
○薙　やれをふきつくらう
○斂　あつめて一處にする
○討　たづれもとめる
○戢　とりまつへるきみ

るや何れの恩ぞ、之を殺す何れの咎ぞ、其の存、其の沒、家聞知する莫し、人或い言ふことありて、將た信と、將た疑ふ、心目よ悁々として、寤寐之を見る、冥を布き、觴を傾け、哭して天涯を望めば、天地爲よ愁ひ、草木凄悲す、弔祭至らず、精魂何れよか依らん、必ず凶年ありて、人其れ流離せん、嗚呼噫嘻、時ある邪、命ある邪、古より斯の如し、之を爲すこと奈何ぞや、守り四夷よ在り。
四夷東夷、南蠻、北狄、西戎を云ふ

◎碑類
碑文よ二あり、墓碑と、表碑と、これあり。前者い墳墓の上よ建つ、後者い、其効蹟を千載の後よ傳へんため、其の處よ立つるあり、碑よ銘あり、頌あり、大率文章誠實を貴び、虛飾を避くるを要す。

○懼それ〳〵わけつけかさめる
（むし）○惜心にをしむ
○慳だしなしみ
○悋しわきま
○愛もちたるをはなしかれる
○嗇にぎりてはあさぬ
○繆物をなしむ
（すか）○犯むかふみすにをか
○侵他の地へ入りこむ
○浸水のしたす
○干入こむと
か　部
（かゝる）○懸ふらりとさがりたる
○掛物がきて戦よかゝる
○嬰むれの前に抱くと

●田原坂之碑　二品親王熾仁

鹿兒島縣い、西海ょ於て、地最も廣く、人最も勇ょして、而して西鄉隆盛の名望世を蓋ふょ至れり、海内の人士、其進退を候ひ、以て安危を爲す、明治十年二月、隆盛反して熊本城を圍む、

天皇震怒、兵を發して之れを討つ、熾仁總督の責ょ任ず、陸軍中將山縣有朋、海軍中將河村純義、參軍たり、賊、兵を分ち て植木山鹿を扼し、兩道より進みて高瀨ょ入る、廿七日我軍擊て高瀨を取る、粵て四日木の葉を拔く、賊退きて、田原坂の險ょ據る、熊本の圍益密、援路皆絶ゆ、夫れ田原の地たる兩崖壁立、復路崎嶇、賊精鋭を悉し、堅壘を築き、砲哮出沒、虎狼の如きあり、要害異形、攻守勢を殊ょす、我軍殊死して戰ひ、晝夜を舍かず、十有七日遂ょ之を拔く、死傷四千

○繋むすびつなぐ
○麗かゝりついて内に
○掛こちらの物がそれ
○係それにつあがれて
○系つりをかけたる
○結こちらのものがそれにひつかゝる掛も同じ
（かも）○協和合するとも
○叶同上
○適てきたうする
○合よくあふこと
○稱つりあひよき
○諧もちまひよくかあふ
○符ありふのあふ
○副たすけにおりかあふ
（かゝる）○重上へ〳〵とかさな

餘人、此の役や、鏖戰前後數百、而して未た田原坂の如き劇きnわらざるあり、苟も此坂ょして拔ず、賊をして南の關を破りて、北せしめべ、則四方不逞の徒、必釁ょ乘じて、起らん、禍測る可からず、其此ょ至らしめず遂ょ速ょ討滅を致しn實ょ此の一撻ょ由る、嗚呼死者の功大あり、而して焉ょ見るょ及nず痛ましきかな、因て碑を坂上ょ建てゝ、以て之を記す、蓋し忠烈を勸奬する所以なり。

名望世を蓋ふ西鄉隆盛の人望評判　援路たすけにやく　兩崖壁立　徑路崎嶇　要害異形　攻守勢を殊ょす　鏖戰　不逞の徒

●樂翁公墓碑　南合　琦

公諱n定信、幼ょして賢丸と稱し、晩ょ樂翁と號す、田安中

○累つみかさなる
○疊たゝみをかさねる
○層上へひとかいかさねる
○申ことばをゝしりかへす
○沓かさありあふ
○襲きものをかさねる
○葺いやがうへにかさある
（かね）○兼本の上へ又外の物をかねる
○包つゝみかねる
○該いろ〳〵の事をかねる
○謙かりゝかねる
（かく）○歸そこへきちつく
○還めもりてもとへかへる
○郤あとへかへる
○返もとへもどる

納言宗武卿の第七子、安永三年甲子俊明大君、我か寛光公ゝ命じ、養ひ以て嗣と爲し、上總介ゝ任じ、天明三年癸卯封を白河ゝ襲ぎ、越中守ゝ任ず、四年甲辰四品ゝ叙す、六年丙午今の大君立つ、七年丁未執政ゝ拜し、侍從ゝ任じ、特ゝ輔佐ゝ命し、上列ゝ班す、時ゝ年三十、輔佐尤も其人を難しとす、歷安中會津侯正之獨り其職ゝ居るのみ、八年戊申京師災あり延て禁闕ゝ及ぶ、大君公ゝ命し、營宮の事を總督せしむ、寛政五年癸丑旨を奉じ相豆の沿海を巡視す、未た畿あらずして、罷を乞ふ、乃其職を免し、少將ゝ任し、溜間ゝ班す、仍て不時ゝ政府ゝ入らしめ、大議ゝ參預す、文化六年己巳致仕を乞ふ、允されず、七年庚午命して洋警ゝ備ふ、因て白河封内三萬石の地を房總ゝ易ふ、九年壬申再ひ致仕を乞ひて、允さるゝを得たり、築地の別邸に老す、時ゝ年五十五、初天明

○反ひつゝりかへる
○復これまでの如くゝある
○回めもりもとへかへる
○旋ぐるゝめぐる
（かば）○變だんゝ形がかハる
○代人のかハりをする
○化あきものができて
○渝色のさめかハる
○易かハりへんする
○換入れかへる
○替すたりかハる
○交入れかハる
（かく）○欠たらぬ
○玷きずつきかける
○缺全き物のへりかける

の季、朝政稍弛み、加ふるゝ飢荒を以てす、時ゝ公宗室懿親を以て重輔ゝ膺當し、幼主を佐け、賢士を甄し、奸蠹を祛し、文教を興し、武備を振ひ、奢侈を禁し、儉素を務め、紀綱法度之が爲ゝ煥然として一新す、政を罷るの後ゝ迨び、寵眷衰へず、歳時存問、始終一の如しと云ふ、公寶曆八年戊寅年十二月廿七日を以て生れ、文政十二年己丑五月十三日を以て逝く、享年七十二、始め寛光公の女を配す、先づ逝く、再び大洲加藤氏の女を娶り、一男三女を生む、男ハ即ち今公の側室中井氏、一男四女を擧ぐ、文政十二年己丑六月五日臣南合琦謹て誌す。

禁闕（きんけつ）宮城のこと内裏と禁闕し御所とも云ふ　相豆（相模伊豆）　房總（安房下總）　飢荒（きき）（きん）即天明のき
煥然（くわんぜん）あきらかゝ　寵眷（ちようけん）こちよう　側室（そくしつ）わくさまの　宗室（そうしつ）ほんけの
俊明（しゅんめい）大君（たいくん）德川十代の將軍家治公　嫡（ちゃく）して後明院殿と號す　奸蠹（かんと）俊奸（しゅんかん）あるゆし

○斷かけてへる
（かく）○抓つめにてかく
○搔かゆきをかく
（かた）○形なりかたち
○狀やうす
○象ようるかたち
○貌ありかつこう
○質目よみえるかたち
○姿すがた
○容かたちつくる
○態ありふり
（かた）○傾一方さがる
○側まつすぐでおきと
○昃日が西へかたむく
○陂すがたくずれになるまと

●畑六郎左衛門碣　　安積　艮齋

精忠峻節、以て天地を動す可く、以て鬼神を感ず可く、以て萬世の人心を皷舞す可し、故ゝ其身患難を踏み、以て沒すと雖、必慶を子孫ゝ流す、此理照然として經ゆ可からざるあり、元弘建武の際ゝ當りて、新田羽林公義旗を揭け、北條氏を滅し、又足利氏と戰ふ、陛下熊羆の士志を貳ゝせざるの臣ありて、相與ゝ勳業を翊贊す、其邪正相軋るゝ及びて、天道定らず、公遂ゝ國家の爲めゝ命を授く、則亦皆忠節を致して、以て死す、畑君の若き其の尤も傑出する者あり、君諱い時能、姓い丹治、畑い其氏、六郎左衛門と稱す、世々武藏の名族たり、姿貌魁岸ゝして、神力あり、幼ゝして、角觝を好み、八州の壯士能く抗する莫し、長ずるゝ及びて、信濃ゝ遷り、遊獵を喜み、馬ゝ策ち、巖壑ゝ馳騁し、迅捷飛が如し、

（かま）○局かゞまりてのびぬ
○屈まがりのびぬ
○偃せむし
○攣手足のまがる
○詛ことばのまがりたる
○僂うつむくこと
（かた）○語人ゝ對し口をきく
○話人とはなしをする
○談いひかたる
（かる）○刈かりとること
○艾草をかりのける
○薙なぎすてる
（いた）○罔網ゝかたき
○確しつかりしたること
○難なんぎ

後羽林公ゝ仕へ、大小百餘戰、向ふ所摧靡せざるい莫し、其旗を麾き、將を斬るの功、計るゝ勝ゆべからず、羽林公戰沒し、弟義助君をして、越前の淺城を守らしむ、是年義助の命を稟け、金津長崎の諸城を攻め、皆之を陷る、斬首八百餘級、退て鷹巢城を守る、敵將斯波高經三千餘人を以て、之を圍む、是時南朝益振いす、北國の官軍皆敗亡す、獨り君、區々の衆を以て、孤城を守る、內斗糧の儲へ無く、外蚍蜉蟻子の援け無し、徒ゝ忠義を以て、士卒を激し、晝夜ゝ乘して營を斫り、殺傷算無し、敵軍震慴し、呼びて畑將軍と曰ふ、各々潛ゝ賂遺して、我營を襲ふ勿らんことを請ふ、遂ゝ力戰して、高經を走らす、君も亦流矢ゝ中つて沒す、實ゝ歷應元年十二月二十五日あり、其の精忠峻節、以て天地を動かし、鬼神を感せしむ可し、嗚呼亦偉あらずや、十世の孫、時義撫太

○硬しんありてかたき
○牢かたくてうごかぬ
○頑かたくな
（かる）○借物をかりる
○假がりる
○餞賞をたしてかる
○貸かしすえにしてお
（ふせ）○計かん定すること
○算かすをつもる
○數かすをかぞへること
○籌かずとりをしてかぞふ
○員きまりあるかず
○撰數あるをかぞへる
（かふる）○蒙おほひかぶりせる
○冠うへへのせかふむる

郎と稱す、勢州より生れ、木造長政より仕ふ、天正中長政亡ふ、富田信高より仕へ、後退きて備中早島に居る、子孫相繼て秀重に至る、秀重戸州安論君に仕ふ、寛政中扈從して蝦夷を巡る、享和中、安論君、蝦夷奉行となる、又之に從ひ、三たび箱館に至る、天保中、嗣子安清君に從ひ、長崎に赴く、明年安清君長崎奉行に除せらる、即ち擢られて室老となる、宗族繁衍、或い江戸に居り、或い備中に在り、益し天の忠臣に報ずる所以の者、是に至つて益炳如あり、今茲天保九年、君の五百年忌辰にあたる、秀重其忠烈を追慕し、碣を武州目黒最上寺に建つ、予に屬して之が文を爲る、予謂らく、今の人其身を奉ずる甚た厚くして、遠を追ひ、先に報するの義を爲すを知らず、秀重顧て能く祖先を追慕し、碑を建て、以て之を祭る、孝と謂いさる可けんや、且つ二主に歷事し、東蝦夷を極め、西長崎に抵る、千里跋涉、匪躬の節を致す、洵とに忠臣の後たるに愧ずる無し、乃爲めに其梗概を叙して刻せしむ、

新田羽林公こと　姿貌魁岸姿貌はようもなり魁岸　角觝角力なり
斗糧の儲兵糧の貯蓄　蚍蜉蟻子の援大ありなり蟻子もありあり
震慴ふるひおそれる　賂遺おくりて　少しのかせいといふこと
流矢やがれやといひたれがいたやたかしれざるやあり　室老老あり安論君の家　祖先秀重のせんか六郎左
忌辰めいにち　梗概あらまし　衛門のこと

●烈士喜劍の碑

林鶴梁

喜劍と云ふ者い、何れの人なるを詳にせず、或い云ふ薩藩の士と、蓋し奇節の士なり、元祿中に赤穗の國除かれ、大石良雄去りて、京師に在り、時に物論囂々として、其の復讎の志あるを言ふ、良雄之れを患ひ、故に歌舞遊衍を假りて、以て人口を滅す、一日島原の妓館に遊ぶ、會〻喜劍も亦た來り遊ぶ、喜劍素より良雄と相識らず、然るに竊に物論の虛しからざる

○被おほひきる
○冒おーふ
（かたはら）○傍そのわきのところ
○側かたはし
○邊うのあたりうのほとりまはりを云ふ
（むかと）○圍四方とりかこむ
○衛かたくまもる
（かゝ）○掲高くあげる
○揺にぎりあげる
○擧手上てあげる
○揺表のすそをあげる
○裳きものをあげる
○招かんげんにあげる
○捲まきあげる
○厲かちげること

(おう)○勝相手にかつ
○捷かちをしらせる
○克かちえたる
○贏ぜんえきすまうに
(かく)○匿人目にかくらぬや
○隱かげになりてかくす
○藏中に入れてかくす
○韜つゝみかくす
○潛水にひろむ
○廋かこひてみえぬやうする
○秘かくして人の見ぬやうにす
○微かすかにてみえぬ
○密きびしくかくす
○翳かげになりて見えぬ
(かく)○耀光の遮くてらすと

を希ふ、其の遊蕩已まずと聞くよ及びて、心甚だ懌べず、乃ち良雄を招ぬき、同じく一樓よ飲む、微言を以て之れを諷す、良雄應ぜず、因て更よ反復直言す、良雄猶ほ應ぜず、笑言自若として、承服の色無し、喜劍乃ち目を怒し、大よ罵て曰く、汝い眞よ人面よして獸心あり、汝の主死し、汝の國亡ぶ、汝大臣として仇を報ずることを知らず、獸よ非らずして何んぞや、余れ將よ汝を獸待ぜんとす、是よ於て左脚を展べ、魚膾數臠を脚の指頭よ盛りて、良雄をして之れを食いしむ、良雄夷然として首を俯し之を喫し畢りて指頭の餘瀝を舐る、時よ良雄の啞々の笑聲と、喜劍叱叱の罵聲と、喧然として樓外よ聞ゆ、既よして喜劍于て江戸よ役す、適赤穗人の報讎の事を聞く、之れを問へべ則同謀四十六人よして、良雄其の首あり、喜劍愕然として曰く、吁々余死せん、夫れ余が目、良雄を獸

○嗶かゞやきてらすと
○營あかくかゞやくと
○熒光りのちらつをかゞやく
○炫あきらかなると
○爍光のきらつく
○曜光のうごきて定まらぬ
○赫赤くかゞやく
(かく)○飾其やうすに從てかざる
○華はでやかなる
○文見せぬやうよかざる
○裝よそをひかざる
(かへり)○顧たちかへりおもてみる
○省念を入れてみると
○眄かほをふりむけてみる
○眷かへりみおもふ

視す、乃我目の罪あり、余の舌、良雄を獸罵す、乃我舌の罪あり余の足、良雄よ獸食せしむ、乃我足の罪あり余の心、良雄を獸待す、乃我心の罪あり、一身皆罪あり、吁々余死せんと、是よ於て病よ托して國よ歸り、公私の事を了へて、復江戸よ來れべ、則良雄既よ同謀の士と皆死を賜いり、之を江戸泉岳寺よ葬むる、乃其墓よ詣て拜して曰く、我當よ萬罪を、地下よ面謝す可きのみと、乃刀を拔き、腹を屠りて、逝く、人あり又之を其墓側よ葬むる、夫れ喜劍氏、初め、良雄と相識らず、而して其義擧を希ふ、中ごろの直言忠告たる、罵てこれを辱しむるよ至る、終よ身を殺して志を明よし以て其の罪を謝す、中行の士よあらずと雖、其奇節たる、古の俠者よ耻ずと謂ふ可し、中西伯基亦奇士あり、恒よ喜びて、忠臣烈士の事を談じ、嘖々として口を離れず、嘗て喜劍の此の奇節

(かしび)○誼やかましくいふ
○囂わけもなくやかま
しくいふ
○譁〻ちゝくやかま
しくいふ
○囂口やかましき
○噪鳥のやかましくな
く
○聒耳にこたへてやか
ましき
(かは)○乾うるほひのとれて
○渴のどのかはく
○燥いしやぎてしめり
けなき
○晞日の出てつゆあど
のかわく
(かし)○賢才智の人にまさり
たる
○才心のはたらきある
○智理にあかるき
○慧細きちゑのある
○點めはしのきく

ありて、世ゑ多く之を知られざるを憾むや、別ゑ一石を泉岳寺ゑ建て、事蹟を畧記して、以て後人ゑ示さんと欲すと、乃費金若干を齎し來りて、文を余ゑ徵す、余時ゑ年方ゑ二十七八、未た嘗て金石の文字を作らず、固く辭すれども可かず、乃約す、今より文を學ふこと十年ゑして、之を草せんと、時ゑ余貧甚し、伯基乃其金を留めて、余をして自ら救ハしむ、爾來荏苒二十餘年を過ぐ、今則伯基の年六秩を踰ゆ、余も亦五十餘、皆頹然として老す、余乃文を爲り金を出して、諸を伯基ゑ致し、遂ひゑ兩償を償ふ、嗟乎喜劍の死、固より奇あり、伯基の此舉亦奇あり、獨り余の文の奇あらざるを恨むのみ、

國除穢を德川家ゑ召し上げられたること　囂〻やかましき　妓館のこと
啞〻ゝくにのぞかれともよむ淺野の領地亦　叱〻しかりつかる　報讎復讎と同じゑて、かたきうちのこと　獸待ちしくようたい

○狡わるかしこき
(しか)○輕をもからざること
○鞠手がろきこと
(かす)○幽めにかゝらぬ
○邃おくゆかしきこと
○微すゑしにてえがた
き
○眇遠くてみえぬ
(かい)○飼食物を與へてうえ
させぬ
○餧えをやりてやしな
ふ
○畜家ゑかふ
○牧外へ出さぬやうに
てかふ
(かげ)○景日光のうつりゆく
○影物の形のうつる
○陰日のさゝぬ處
○蔭木のかげ

愕然ゑ俠者て驍俠者　荏苒ぐづぐしてつゐ　文章の價と金の兩償償と二つあり

●菅公神廟碑

藤森大雅

嗚呼、大節天地ゑ明ゑ、至誠萬世ゑ孚ある、我菅公の若き者、古今ゑ亘て、一人のみ、蓋公迹を儒林ゑ發し、一朝陞て勳戚の右ゑ居る、是の時ゑ當り、幼主祚を踐み、公任重く、勢疑ひ、嫌謗生じ易し、況んや姦臣讒を內ゑ搆へ、諛臣又隨て之を外ゑ媒孽するをや、公の終らざる宜べある哉、然るゑ危疑の間、人或ハ退を勸む、公奮て願みず、上ハ天子の爲ゑ、百年の積弊を除き、下ハ萬世の爲ゑ、君臣の綱常を明ゑせんと欲す、易ゑ之れあり、蹇の六二ゑ曰、王臣蹇〻躬の故ゑ匪ず、と公の進むや、蓋之を用う、公の罪を獲て、去るゑ及び、姦諛遂ゑ志を得、乾綱の振ハざる、職として此れ之れゑ由る、公忠愛の念、死ゑ抵て渝らず、闕庭を眷戀し、君父を思慕す

る、往々之を歌詠に見し、毫も怨懟の意無し、易に之れあり、乾の文言に曰、是を見ずして而して悶無し、と公の退く之れを用う、是れ所謂、道理心肝を貫き、忠義骨髓を填む者、實に人臣の大節至誠に非ずして之を能くせんや、夫れ誠の至り神明を感ず、況んや人に於てをや、是を以て凡中國に在るもの、戴髮含齒の類、尊親せざる莫し、廟食海内に遍く、千載猶一日のごとし、豈盛んならずや、桐生の人、尤公を尊親す、奉祀して鄉社と爲す、烝嘗怠らず、事あれば必祈る、天正十九年、東照公教を下し、祀田二十石を置く、越て九年、關ヶ原の役起る、多く旗幟を張て以て軍容を盛にせんと欲す、初め八幡公此の鄉を過ぎ、民に命じて、絹及び竹竿を上り、取て以て白旗を作り、遂に奥賊を平く、公乃主計頭平岩親吉を遣いし、八幡公の例を援て、命を五十四邑に下し、日を刻して、旗幟を織り、獲る所の救を盡して、旗竿を併せて、之れを上らしむ、絹を獲ること二千四百一十四、鄉民各織る所を持し、神廟に會して戰勝を祈り、符章を併せて之れを上る、軍遂に大に捷つ、乃歲貢旗絹を命し、其の數に依て額とあし、併せて旗竿を採る所の竹林稅を除く、民も亦必神廟に會し、幕府の爲に隆運を祈り、章符を併せて之れを上る、歲に以て常とあす、寛永中更に命して、絹に代ふるに錢若干を納るを以てす、嘉永五年壬子公の九百五十年忌辰と爲す、邑民以て梅花い公平生愛する所と爲す、乃同志を集め力を戮せて、園を祠側に闢き、多く梅花を栽う、亦尊親の一端あり、其の明年、余桐生に遊ぶ、石原義章吉田某、祠廟の由る所を碑に以て永久に示さんと欲し、余の文を乞ふ乃爲に之れを書す。

柳宗元

(かい)○香香氣のはなにつく
○薫香の物につきてくる
○芳香氣の立ちたる
○芬香のみちたる
○馨香氣のはなにつく
○郁にをひのよきこと

(かぎ)○限かぎりの處
○疆界しきり
○劃刀にてすぢをつけかぎる
○期あてある處

(かす)○掠おびやかしとる
○抄中よりぬきとる
○略みだりにとる
○掃うちとる

(かり)○獵鳥獸をとり害をのぞく
○狩なににてもとる
○佃かりのこと
○田太鼓をうちてとる

(かむ)○嚙はを以てかむ
○咋かみくらふ
○噬かみつく
○嚙のみくらふ
○咀かみくらふ
○咬かみつく

(かん)○考熟をつけてみること
○勘引合かんがへる
○稽心をとめてはかる
○按しらべかんがへる

(かう)○買價をだしてかふ
○沽かひもとむ

○市かひいれ
○糴米をかひ入れる
（かし）○炊飯をたく
○爨火をたく
（かなしむ）○哀きのどくにおもふ
○悲嘆ふやうならぬを
○悽心の内にものかな
○感うれへかなしむ

き　部

（きはまる）○究ゆきつまる
○極至極のきまり
○竟物のをはり
○研こまかにきはめる
（きよ）○清きよくすみたること
○淨きつぱりしたる

凡そ大人の道ゑ三つ有り、一ゑ曰く、正しふして難を蒙る、二ゑ曰く、法聖ゑ授く、三ゑ曰く、化民ゑ及ぶ殷ゑ仁人あり、箕子と曰ふ、實ゑ玆の道を具へて以て世ゑ立つ、故ゑ孔子六經の旨を述べて尤も殷勤ゑす、紂の時ゑ當つて、天道悖亂し、天威の動も戒しむること能はず、聖人の言も用ゆる所無し、死ゑ進んで以て命を併すゝ、誠とゑ仁あり、吾が祀ゑ益無し、故ゑ爲さず、身を委して以て祀を存するゝ誠ゑ仁あり、吾が國を亡すゑ與る、故ゑ忍ひず、且是二道之を行ふ者あり、是を以て其明哲を保ち、之と俯仰し、是の謨範を晦まし、四奴ゑ辱しめらる、昏ゑして邪無し、隕ゑして息まず、故ゑ易ゑ在りていゝ、曰く、箕子の明夷と、正しふして難を蒙るあり、天命既ゑ改まり生人以て正しきゑ及びて乃大法を出して、用ひられて、聖師と爲り周人以て彝倫を序して、大典を立つる

○潔けつぱり
○雪すゝぎきよめること
（きる）○着きものをみにつける
○被上にきること
○衣きものをきる
○服中へはいりきること
（きく）○聞聖が耳にはいること
○聽きゝいること
○聆耳をとめてきくこと
○可よしとすること
○肯うことをきゝてがてんすること
（しがる）○緊ゆるみなきこと
○嚴げんぢうなること
（きゆる）○消物のつきふくなる

を得、故ゑ書ゑ在ていゝ曰く、箕子を以て歸り、洪範を作る、と法聖ゑ授くるあり、朝鮮ゑ封せらるゝゑ及びて、道を推し、俗を訓ゑ、惟德墮さること無く、惟人遠さること無し、殷の祀を賤め、彝を棄て華と爲さしむ、化民ゑ及すあり、是大道ゑ率ひ、厥の躬ゑ叢め、天地變化するも、我れ其正を得る、其大人あるか、於吁其周の時未だ至らず、殷の祀り未だ殄へざるに當つて、比干已ゑ死し、微子已ゑ去る、向ゑ紂をして惡未だ稔せずして自から斃れ、武庚國を念ふて以て、存を圖り、國其人無れば、誰と與ゑか理を興さん、是れ固とゑ、人事の或いゝ然る者あり、然れば則先生隱忍ゑして、此を爲せしい、其斯ゑ志あるか、唐の某年、廟を汲郡ゑ作り、歲時ゑ祀を致す、先生の獨り易象ゑ列するを喜して、是頌を作ると云ふ。

●自撰墓誌

柴栗山

○熄火のきゆること
○滅たえつくること
○泯きえてあとなきこと
(きる)○切きりはなす
○削きりきざむ
○剪はさみきる
○剌ぬかにきる
○刖耳をきる
○刖足のすぢをきる
○剄くびをはねる
○斬きりてべつにする
○截たちわける
○刲よきほどにきること
○斫きりはねる
○斷たちきること

柴い姓たり、邦彥い名たり、智い挈餅を用ひず、志い蒼生よ存す、道妻子よ行れず、業い遺經よ任ふ、顏淵より壽く、原憲より富み、有虞葬の棺よ斂し、君子國の野よ葬る、大葬を得ずと雖、道路よ死せず、文政四年冬十二月柴邦彥自ら誌す。

顏淵(がんえん)孔子の門人中第一等の人物なれども早死したる人なり　原憲(げんけん)も孔子の門人にして貧乏なりし人なり　有虞(ゆうぐ)舜帝の氏(し)ことなり　君子國(くんしこく)我大日本國のことなり

◎李太白碑陰記

李太白、狂士也、又嘗失節於永王璘、此豈濟世之人哉、而畢文簡公、以王佐期之、不亦過乎、曰、士固有大言而無實、虛名不適於用者、然不可以此料天下之士、士以氣爲主、方高力士用事、公卿大夫爭事之、而太白使脫靴殿上、固已氣盡天下矣、使之得志、必不肯附權倖以取容、其肯從君於昏乎、夏侯湛賛東方生云、開濟明豁、包含宏大、陵轢卿相、嘲哢豪傑、籠罩靡韵、跨藉貴勢、出不休顯、賤不憂戚、戲萬乘若僚友、視儕列如草芥、雄節邁倫、高氣蓋世、可謂扳乎其萃、遊方之外者也、吾於太白亦云、太白之從永王璘、當由迫脅、不然、璘之狂、肆寢陋、雖庸人知其必敗也、太白識郭子儀之爲人傑、而不能識璘之無成、此理之必不然者也、吾不可以不辨、取容(とりいるる)

包含(ほうがん)、陵轢(りようれつ)、儕列(ちうれつ)、狂肆(きようし)

○伐木をきりたおすこと
○鑽もみきる
(きず)○疵きずつきたる
○瘢できもの、あとの
○痍きずつきたる
○瘕ちよつとあとのつきたる
○玷玉のきず
○刱きりきず
○傷きずのつくこと
(きざむ)○剉ざくざくきざむ
○刻きざみつけること
(きざす)○萌草のはじめんとき
○兆やうすのまへからみえること
(きたう)○鍛金てつをやききたふ
○冶いかたに入ている
(きしる)○轢車の物にあたること

◎銘類

銘い名あり、器を觀て名を正すあり、其体二あり、一よ曰く、警戒、二よ曰く、祝頌、其文い博文よして、温潤あるを貴ぶ。又墓誌銘とあり、碑銘とあるい此銘より出でしあり。

○輾輪のまけること
○轢輪が物をすれあふ
○轉輪が物をすつてゆく

く　部

(くじ)○拉をしひしぐこと
○折がゞめをること
○挫をきへつぶすこと
○衂くじきて血のでること
(くだ)○碎ゐまかにくだく
○摧物のくだけること
高きもの又ハ聳きものゝくづれること
(くつ)○崩天子の死山のくづれるなど
○壞くづれやぶること
○頽くづれおつること
(くねび)○刻たちわる又ハきざむ

◎坐右の銘

入ていゝ孝、出てゝゝ弟、家教乃成る、德を本とし、財を末とし、維れ俗維れ貞、民ゝ則あるを善とし、人ゝ恒無きを惡む、味々を欺むく勿れ、必らず明々を愼しむ、言を行ふ願りみ、實を名ふ務め、人と交ゝりて信あり、四海兄弟、周して比せず、克く其の誠を立つ、仁ふ依り、藝ふ遊ぶ、邪辟萌す無し、好中ゐれゞ志を養ゐふ、好頗ゐれゞ形を役す、道腴是れ味ひ、秉心以て寧し、優ゐるかゐ、遊ゐるかゐ、永く吾か生を終へん。

則ゝ　恒るべきこと　味々　周てゐかよくする　比たりにしたがひ
好頗　道腴たりのよきこと　秉心心にとるはじめのところ

◎自誌銘　尾藤肇

良佐又名孝肇字ゝ志尹、二州と號す、姓ゝ藤氏、家世々尾藤と稱す、其系由る所を審ふせず、伊豫川江の人たり、生れて五歲、足疾を得て一室ふ靜居し、人事を交へず、少くして好みて、文を作る、長して學を講するを知る、其多病を以て、時敏ゐる能ゝず、而して兩ゐがら得る所ゐし、然れども其聞洛の說ふ於て、終身信して貳あらざるゐり、他ゝ言ふふ足るものゐし、寛政辛亥布衣を以て召されて國學ふ入り教事を掌る、素習疎放人ふ益あらず、居常其職ふ差るのみ、是を以て平生を概すべし、平生世の文、實ふ浮ゐるを惡み自ら誌を爲る。

閩洛の說學派なり　宋の宋學の系圖なり即血系すぢのこと

◎佩刀銘　青山拙齋

己巳之夏、渡邊君公雲、購得一刀、堀川國廣之所造、蓋龍文龍藻、若二奔渠之出水、若二狂瀾之赴

○到くびをはねる
(いも)○喟あかりなき
○晦日よそむきくらき
○昧物の色のわかちぬ
○旰ひのくれがた
○暮日くれにくらくなること
○懵心亂れてくらきこと
○蒙上より掩てくらきこと
○昏日くれて物のわからぬ
(くもる)○転苗のあひだのくさをきること
○耨草をとる器
(くぼ)○凹まん中のへこみたること
○陥その中のくぼきこと
(いる)○苦いやなことにくるしむこと
○困ゐんぎ

○毒いやなもの　こまらせる
○窘ゆきどまりのなき　もと
（くる）○狂氣のちがふ
○猖くるひさわぐ
（くむ）○汲水を非よりくみ上げる
○掬くみて行と
○酌酒をくむ
○掘くみとる
（くは）○加ある上にくはへる
○倚物をくはへそへる
（くら）○較分量をくらべあはす
○比ならべみあはす
○校ならべてかんがへる
○方たくらべると
（くも）○鬱うちのくもる

堅、凜然雪清、皓然霜凝、眞希世之珍也、夫國廣者、近世所稱良工、而此刀又其尤佳者也、公雲寶愛、欲傳諸子孫、屬予爲銘、銘曰

神器化成、爰磨爰礱、質如霜雪、文如蛟龍、凜々秋水、淡々曉虹、赤心許國、賴爾銛鋒、可以斬姦、可以折衝、誰其服之、邀君之忠、子孫萬年、永賴爾功、

凜然　皓然　希世　曉虹

○周公服書齋銘

吾齋之中、不尚虛禮、不迎客來、不送客去、賓主相忘、坐列無序、不言是非、不論公事、閑談古今、靜玩山水、清茶好香、以適幽趣、道儀之交、如斯而已。

○陰ものゝかげでくもる
（くは）○精しらげたる
○委のこさずゆきわたる
○曲一ゃつをびらかにもとる
○忘一ゃのこさずつ
（くつが）○覆ひっくりかへす
○顛下が上になること
（くろ）○黑くろき色
○黔きのはいりたるいろ
○玄深く遠くして明の及ぶべからず
○混いろ〳〵にまぜる
（くも）○貪物をくふこと
○食くらふこと
○嚙くひこむ
○啖くらふこと

靜玩　幽趣

●鳳咮石硯銘

北苑茶、冠天下、歲貢龍鳳團、不得鳳凰山咮潭水、則不成、潭中石蒼黑堅緻如玉、以爲研、與筆墨宜、世初莫知也、熙寧中、太原王頤始發其妙、吾兄子瞻、始名之、然石性薄厚者不及寸、最後得此、長博豐碩、蓋石之傑、子瞻方爲易傳、日効於前、與有功焉、爲之銘、曰

陶土塗壁、崖石玄之蠹、潁之賊、涵清泉、閟重谷、聲如銅、色如鐵、性滑堅、善凝墨、乘不取、長歎息、招伏羲、揖西伯、發秘藏、與有力、非相待、誰爲出、長博豐碩　玄　潭

●潛軒銘

○啜ずゝりのむ
○喝くゝせること
（くせ）○配彼此配合をること
○賦それ〳〵にわりつける
（くだ）○降下へさがる
○下上よりさがる
（くゝ）○括一ところへよせくゝる
○絞しぼりくゝる
（くり）○庖だいどころ
○廚同上

け　部

（けは）○嶮山のけはしきところ
○峭けづりたてたるやうある
○阻へだゝりたる
○險水のふかき處
○峻山のたかくけはし
○嵒山石のあるけはしき處
（けづ）○削けづりとる
○鐺そこをすりをろす
○刪きりのける
○刮みそげとる
○剡けづりとがらす
○剉きざみけづる
○梳かみの毛をすくこと
○剞けづりとる
（けみ）○備えらびしらべること
○閱けみしかぞへること
○査しらべきはめること
○檢あはせしらべること
（けが）○汙水のきたなき

以レ船、撐レ船、船不レ行、以レ鼓打レ鼓、鼓不レ鳴、子欲下察レ味而辨上レ色、何不下坐於澹軒之上、出澹語以問澹叟、叟則味自味而色自形、吾然後知澹叟之不レ澹、蓋將下盡口眼之變、而起無窮之爭上、其自謂叢林之一害、豈虛名也哉

撐たつ　澹たん欲少き語言辭

●亡妻王氏墓志銘　蘇軾

治平二年五月丁亥、趙郡蘇軾之妻王氏、卒於京師、六月甲午、殯於京城之西、明年六月壬午、葬於眉之東北、彭山縣、安鎮鄉、可龍里、先君先夫人、墓之西北八步、軾銘其墓、曰、君諱弗、眉之青神人、鄉貢進士方之女、生十有六年、而歸于軾、有子、適君之未嫁、能事父母、既嫁事我先君

先夫人、皆以謹肅聞、其始未嘗自言其知書也、見軾讀書、則終日不去、亦不知其能通也、其後軾有所忘、君輒能記之、問其他書、則皆略知之、由是始知其敏而靜也、從軾官於鳳州、軾有所爲於外、君未嘗不問知其詳、曰、子去親遠、不可以不慎、日以下先君之所以戒軾者上相語也、軾與客言於外、君立屏間聽之、退、必反覆其言、曰、某人也、言輒持兩端、惟子意之所嚮、子何用與是人言、有下來求與軾親厚甚者上、君曰、恐不能久、其與人銳其去人必速、已而果然、將死之歲、其言多可聽、類有識者、其死也蓋年二十有七而已、始死、先君命軾曰、婦從汝於艱難、不可忘也、他日汝必葬諸其姑之側、未葬年而先君沒、軾

○沈土のつきてきたな
○羈自由にしてあやめる
○穢むさくるしき
○襲人にみせられぬやうある
○鐵血よごれてきたなき
（ける）○蹋足にて物をける
○跌つまづく
○蹉ふみはづす
○蹋けつける
○蹶馬なぎがける
○蹶走りつまづく
○蹴つけていてけること
○蹉つけてゆいてけること
（ゆす）○消つきてしまう
○滅火のきゆる

謹以遺令葬之、銘曰、
君得從先夫人於九原、余不能嗚呼哀哉、余永無所依怙、君雖沒其有與爲婦何傷乎、嗚呼哀哉

屏間（ひかん）　兩端（ふたところ）　有識者（ゆうしきしゃ）　朞年（いちねん）

●塙君輝信墓碣銘　川崎鼎春

波山之麓、霞湖之畔、有育才之士、曰塙君、惜哉今也乃亡矣、予深爲教育悲焉、按狀君姓源、諱輝信、初稱祐助、後改邦彥、家世仕茂木藩、祖諱修行稱治部右衛門、仕細川興隆公爲中小姓、次曰則房、亦襲稱治部右衛門、晩號安廻、次曰則攞、稱新八郎、後亦稱治郎右衛門、次曰則命、稱伊兵衛、次曰輝光、稱新輔、仕興德公爲御納

○銷金るいをとかす
○魂ぬくしてしまうこと

こ　部

（とひかふ）○希心がけのぞむ
○冀なにとぞれがふ
○覬うかゞひねがふ
○幸かくあらばさいはいあらん
○庶冀と同じ
○覦やうすをうかがひねがふ
（ととる）○異ちがひたる
○殊はあれたる
（ことび）○媚かはゆがられるやうにする
○諂ねびへつらふ
○嫵人のきをひく
○嬌やうすの目にとまる

戶衆供頭、尋遷御用人、次曰光一、稱術守、於君爲考、妣曾根田氏、生二男一女、長某稱龜太郎、嗣家、次曰輝信、即君也、別興家、君少而好學、及長負笈遊江都、業成歸鄉、專教養子弟、勵精超衆、弟子爲成材者不少、其將身也、方正而率直、常惡奢侈、不修邊幅、有暇則荷耒耜耕耘田園、家產爲殖矣、君尤長漢學、諸子百家無所不窺、性甚嗜酒、醉則陶然自適、措心於世塵之外矣、君初仕興嗣公爲近習、至明治後、專從事教育、歷任小張、沼田、西楢戶小學訓導、二十七年十二月二十日病歿、距其生嘉永三年七月七日、享年四十有五、葬其鄉谷田部町、道林寺之塋、佛諡曰方立院善學輝信居士、配清水氏無子、

(ことば)○言　心にあることを口にだす
○詞　文句のあやある
○辞　詞と同じくそのすぢみちのこと
(こころ)○心　心のこと
○意　かうかとおもふ
○性　氣しやう
○情　心のうごきたるはたらき
(こふ)○乞　かふて我にうける
○請　とうて我につくしやうする
(こたへ)○答　うけこたへる
○對　目上にこたへる
○應　うれにこたへる
○諾　のみこみてゆるす
(ためす)○試　使ひてためす
○診　脈をみる

以二其弟愼三郎一爲レ嗣、屬者僚友清水恵敏携レ狀來請二墓上之文一、固辭、不レ得、因揭以レ銘、々曰、

筑波之麓　霞湖之濱　有一奇士
育才自任　超然世表　朝嘯夕吟
德業普及　闔鄉仰欽

◎評類

評い平あり、議あり、品論あり、史家の人を褒貶し、史官の君臣言行の是非を訂する、皆これあり。然れとも、意より隨て理を立て、名を命ずる多し。史評、雜評の二あり、前者い歷史に關し、後者い種々雜多の事物に關す。

●楠公書牘後に書す　根岸耐軒

嗚呼楠公の忠節嚴霜烈日の如し、孰か以て之を疑いん、古人云へることあり、書い心畫あり、心の存する所、書以て形を

○嘗(かつて)　あんがいをみる
○驗(ためす)　証こたおしてみる
(こえる)○超　をぢりこえる
○越　向ふへまえる
○跨　またがりこえる
○踰　越に同じ
(はる)○判　はんだんをつける
○斷　かたをつける
○理　すぢを以てとりはからう
○訣　ひきわける
(こえる)○肥　肉のつきたる
○腹　油ののりたること
○肥　ゆつたりしたる
○豐　ふつきりしたる
(こまか)○小　ちいさきこと

畫す、而して君子小人見いる、此の斷烟尺牘、又虞褚顏柳の腕筆矯健人を服する者あるゑ非ざるあり。而して某生此の札を獲て之を珍襲し拱璧當あらざるい、抑も何ぞや、於戲豹い死して、皮を留むと、是れ其一班と雖も、炳蔚の美想ふ可きあり。

嚴霜烈日　矯健たつしやなること　炳蔚うつくしきこと　虞、褚、顏、柳　しはしはしるしたもつとも　はげしくすぐれたること　はしはしるしたもつとも　すぐれたもつとも

●熊澤了介の傳を讀む　齋藤謙

備い、一藩國のみ、其政教、法制、萬目盡く張り天下後世の法とある者い、烈公紀綱を上ゑ執り、熊澤大夫經濟を下ゑ行へ、おり。嗚呼大夫困頓窮餓の餘、一たび出て大國の相とおり。其君をして堯舜の君とおし、其民をして堯舜の民とおさしむ、當時賢君輩出する、水戸義公、會津神公の如き、烈公の

○細こまかきこと
(ことと)○事ありのしよさにつきて
○故しきたり
(ことと)○畢もらさぬ
○悉のこらず
○盡ありこまでたゝく
○咸あまねく
(ともに)○籠こめたること
○醫ぬりていんきなる
(ところ)○殺命をとること
○戮はづかしめころす
○屠きりころす
○塵のこらずころす
○戕やぶりそこなふ
○弑君父をころす

下ゝ在らずして、備の經濟。獨り諸國の上ゝ出づ。乃知る大夫の才、人ゝ過ることと遠きを、士學べざれべ則已む、學べべ則、當ゝ大夫の為す所を希ふべし。用ゐられざれべ則已む。用ゐられべ則、當ゝ大夫の行ふ所を希ふべし、復何ぞ區々として、章句文字ゝ汨沒して、自ら以て足るとあさんや。

備前、備中、備後を云ふ　備昔の吉備國なり　因頓窮餓くるしみなやむこと　區々こせ〳〵すること　汨沒おぼれもつること

●孟嘗君の傳を讀む　王荆公

世、皆稱す孟嘗君能く士を得、士故を以て之ゝ歸す、而して卒ゝ其力ゝ賴て以て虎豹の秦ゝ脫すと、嗟乎孟嘗君い、特ゝ鷄鳴狗吠の雄のみ、豈以て士を得ると言ふゝ足らんや、然らずんべ齊の强を擅ゝして一士を得べ、宜く以て南面して、秦を制すべし、尙何ぞ鷄鳴狗吠の力ゝ取らんや、夫れ鷄鳴狗吠

○誅つみをせめころす
○殛死ぬやうにしてころす
(ところ)○轉ころがりゆく
○頓へたばりたをるゝ
(よしろ)○快ほふさほりになる
○慊心にかなふ
○憺やすらかになる
○恢心もちよきこと

る部

(んはゆ)○盛さかへしげりたる
○昌だん〳〵あちへれる
○隆むつくりとなる
○殷さかんに多きこと
○壯氣がみちたる
○旱大なる岡

の、其門ゝ出るい、此の士の至らざる所以なり。

秦ゝ脫す　秦の國より逃れて　鷄鳴狗吠の狗の鳴聲をなるものあり其おかげにて秦より逃げたること

清少納言

●四季の評

春い曙、空い甚く霞みたるゝや、漸く白くなりゆく山きいの、すこしづゝあかみて、紫だちたる雲の、ほそくたなびきたるあと、甚有興。夏いよる、月のころい、さらなり、闇もなほ、螢おほく飛亂たる、又たゞ一つ二つなど、幽かなうち光りてゆくも、いとをかし。雨のぢやかゝ降りたるさへとそをかしけれ。秋い夕暮、夕日のさいやかゝさして、山の端近う見へわたるゝ、烏の、ねゝゆくとて、三つ四つ二つなど、とびゆくもあいれあり。況して、鴈のおほく飛連ねたる、いとちひさく見ゆるい、いとおかし。日入りはてゝのち、風のお

○蕃草のしげりたる
○熾火のもゆるさま
○煽火をあふぎたてる
○柴おもてのりつゞな
（さけ）○裂ききやぶる
○劈斧にてわる
○擘ゆびゆてひきさく
○剖二つにさく
○割きりわる
○綻衣ふくのさけほゝ
○剥皮をはぐ
○拆さけて二つにわかれる
（さか）○逆さかさま又はむかふさま
○忤氣に入らぬ
（しさと）○敏ちえなどの人にすぐれる

と、虫の聲、はたいふべきよもあらずめでたし。冬いつとめて、雪のふりたる、さらよもいいず、霜のいと白きも、又雖不然、いとさむきよ、火おこ急ぎ熾して、炭もてわりきおこするを見るも、いとつき〳〵し。昼よおりぬれば、やう〳〵温びもてゆきて、雪きへ炭櫃火桶の火も、白き灰多よおりぬれば、惡し。

春は曙はるはあけぼのいとをかしいふあり　秋は夕暮あきはゆうぐれのけしきなり　夏はよるよるはつはよるのけしきなり　冬はつとめて朝のけしきなり　たるよのりやくあり　さらありいふ　つとめてもしろしと賞ふ意なり

●白拍子舞の評　作者　不評

妙音院大相國禪門云く、舞を見、歌を聞きて、國の江亂を知るは、漢家の常の習ひあり。然るを、世間よ、白拍子といふ舞あり。其曲を聞けば、五音の中よは、これ商の音あり。此音は、亡國の音あり。舞の姿を見れば、立廻りて、空を仰ぎて立てり。其姿、甚だ物思ふ姿あり。詠曲身體、共よ、不快の舞ありとぞ、宣給ひける。

妙音院云々いふ　師長卿

●寛永時代江戸の風俗　太宰　春臺

つくゞと、百年以來の風俗を思ひめぐらすよ、餘所の事をば、置きて、江戸の人の、風俗こそ、殊よ昔よは、かはりたれ。わが親しき者の中よ、慶長元和の頃、生れたる者、男よも女よもありて、寛永の頃を歳の盛りよて經たりといふよ、男は、冬、草のうちかけ草の袴を美服とし、女を紫草の繼子をはくを、能きけはひとせりといふ。其繼子は、わが幼き時迄も遺りてありしあり。婦女の帶は、金襴を美麗の限りとし、黑地よ梅櫻松を所々よ織り付けて、是を鉢の木の帶と名付け

○聽耳にさとりよき
○智かしこきさま
○叡心かしこく何にも通ずる
（まも）○去あちらへゆく
○行そこをどきて外へ
○避はづまておきへゆく
○除のけて外へやること
○辟人をのける
○逃ゆえてはづす
（さと）○悟自分でさとること
○覺目のさむること
○曉うたがひのはれた
○領がてんする
○了さつぱりとちつく
○喩ときて人よのみこます

(さわ)○躁やかましき
○騒みたれさゝぐ
(さへる)○遮おさへとる
○障へだてのある
(ささ)○捧両手にて高くさしあげる
○挙さしあげてもつて
(しも)○寒時おうのさむく身のしまる
○凄ぞつと身にしみる
(むさ)○定さだめてうごかぬ
○決けつだんすること
○謨はかりさだむること
○蔽うの格式をさだめ入るゝ
○評ものをへうしさだむ
○鎮をもおうごかぬやうにする
(はひ)○幸仕合をれがふ

て、珍重しけり。廣さ僅かゑ鯨尺の二すばかり、紙を心として綿おどいる〻事おし。四月より八月まで、婦女の禮服ゑ、錦にて廣さ鯨尺の八分ばかりおるをうしろゑ結びて垂る〻を付け帶といふ。今の付け帶は、昔しの常の帶より廣し。今の人に、昔しのことを語れば、虚と思ひて、露信とせず。此等は。わがまのわたり、見たりし事ゑて、詐りゑあらず。舊き事知りたる人わらパ、尋ね問ふべし。すべて、男女の衣服、昔は極めて質素おりき。男子も女子も、十四五歳まで、長き袖を着るゑ、昔は鯨尺の一尺七寸を極とせしゑ、貞享の頃より、二尺ばかりゑおり、それより、やう〳〵、ます〳〵長くおりて、近き頃は、二尺四五寸ゑおりぬと見ゆ。婦女の帶も、貞享、元祿の頃より、やうやく廣くおりて、今は鯨尺ゑて八九寸ゑ及べり。綿を心として褥の如し。男の肩衣といふ物は、昔は麻

○禍よきしあいせにあへること
○非吾ゑそあハりたふ
○祿きまれる禄ひ料
○禎吉事のぜんひやう
○祉うれだけのしあハせ
○賴うのおかげをうけたる
○祐うなはれる福
(おけ)○號所にもとかくやうにゑぶゑと
○叫號をハりあげる
○嗷同上
(さむ)○瘠目がさめる
○醒酒のえひがさめること
(に)○曇むかしのこと
○向以前のこと
○嚮すぎしことのひさかたらぬ

の幅鯨尺の八すばかりおりしゑ、貞享、元祿の頃より、幅一尺ゑ及べり。寛永の頃までは、婦女細き麻縄ゑて、髪を束ねて、其上を黑き絹ゑて卷きしゑ、其後麻縄をやめて、紙ゑてゆふ。越前國より粉紙ゑて、元結紙といふ物を造り出して、海内の婦女、昔これを用ふ。それより絹ゑてまくこともやみぬ。わが父正しくこれを見て、語り聞かせり。今の人、これを聞きては、信とせず、かよそ男女の髪かたちわれらが見及びてより以來も、幾かはりかゑつらむ。今は昔のかたも遺ちす、昔の婦人は、髪多く長きをたけゑ餘るおどいひて、譽めたりしゑ、近き頃は、髪少く短きをよしとする風俗ゑおりて、髪多き女い、髪のうちを、或は剪り、或は剃りて、すくおくす。(中略)婦女外ゑ出るゑ、むかしは、きま〻とて黑き絹ゑて頭面をつ〻み、目ばかりを顯はしけるが、其後綿ゑて頭面を

○前すぎしまへ
○往以前のと
○日すぎし日をさして いふ
（すぐ）○暴日よあてさきすと
○曬ホにすゝぎて日に ほすこと
○曝はしやくこと
○晒晞におなじ

し　部

（しかた）○親身につけめいする こと
○成つゝきのはあれば やうすること
（しげ）○繁ことの多き
○滋ものゝふへて多く なる
（しず）○靜うひかぬやうにな る
○閑ひまにてしづかな る
○閑人ものてふづか

つゝみしは、わが二十あまり、寶示の頃までをかおりき。今は小さ綿を頭上よ いたゞきたるばかりよて、面を打ちさらし、はれやかおる顔よて、道をゆくさま、おもはゆげよも見へず。

●梁武帝評書

王右軍書、字勢、雄强如龍、跳天門、虎臥鳳閣、故歷代寶之永以爲訓。

◎表類

表ハ標あり、明あり、事緒を標著し、之をして明白あらしめ、以て上よ告するあり。或ハ論諫よ、或ハ謝勸よ或ハ陳乞よ、或ハ進獻よ、或ハ推薦よ、或ハ慶賀よ、或ハ辭解よ、或ハ陳謝よ、或ハ慰安よ、或ハ訟理よ、或ハ彈劾よ、皆之を用ふ。施す所、既よ斯の如く殊あり、從て

○問ひまのあるしづか
○寂しんとしてさびし
○寞聲のなき
○徐動作のしづか
○謐ひそかあること
（したが）○從ものよついてゆく
○循それにそひてゆく
○遵したしのとほりに ゆく
○隨まかせゆく
○徇身をまかす
○順そのすぢを受けて ゆく
○殉身をしたがへる
○服ふししたがふ
（しば）○且とうぶん
○暫すこしの間

其辭亦同じからず。

●頌德表　井上辰九郎

帝國大學、大學院學生、各分科大學學生、生徒總代、大學院學生臣辰九郎謹みて言す、伏して以るよ仁よ體して、友邦を扶け義よ依りて亂略を遏む、天才一たび麾ぎて、撻音熙りよ至り、頌聲洋々寰宇よ盈溢す恭々しく惟るよ、天皇陛下、聰明生知、神武天挺夙よ祖宗の丕基を紹ぎて、偉烈を八紘よ輝かし、施きて國家の大憲を定めて、鴻謨を億載に垂れ給ふ、富强の道、爰よ開け、教養の具、咸備へり、率土化よ霑ひ、萬方風を仰ぐ、今や征清の舉あり、大纛を廣島よ進め、方略を指授して、諸軍の節度をおし給ふ。畿筭内よ定りて、兵氣外に揚り、六師の向ふ所、野よ横陣あ

○姑まあとうぶん
○間間をおくこと
○少すこしの間
○頃ころほどの間
（しば）○屢さい〳〵たび〳〵
○數同上
（しば）○頻つゞけること
○荐上にかさなる
○連だん〳〵つゞく
○累だん〳〵つみあがる
○仍そのとほりにつゞける
○切せつ〳〵とする
（しる）○知物のわかちをしること
○識おぼへしること
（しる）○記わすれぬためしること
○誌人目につくやうにする
○識心おぼえする
○銘物に名をつけ記しるす
○註はりこみかきしるす
○署しわけてしるす
○勒文字をきざみつけること
○簽目じるしにふだをつけること
（しる）○徵せうこにもとる
○效しるしのあらはれたること
○効しるしのみえること
○徹目じるし
○證しやうこのこと
○印あとをつける
○驗しやうこにあること
○信あてのとうりにたがはぬ

く、水に堅艦厳し、固より以て
皇威を四表に宣揚し、國光を六合に炳燿するに足る、是れ中外の會て見ざる所、振古の絶えて聞かざる所、嗚呼盛なりと謂ふべし。臣等身、上庠に在りて、幸に此昌期に遭ふ、手抃ち足踏み、踴躍の至りに任へず、謹んで表を奉じ、陳賀して以て聞す、臣辰九郎、誠歡誠欣、頓首頓首謹言、

寰宇天地間の　盈溢ふれみつること　丕基おほもとること　偉烈おほいなるいさをし
八紘八極と同じ東西南北乾坤四隅　大業たいぎょう　叡算えいさんてんしのはかり
六合天地四方　振古ふるきよりのかた　上庠大學校のこと

●内國勧業博覽會場の盛儀を賀するの表

大久保利通

臣利通敬て白す、陛下叡聖至德の治、深く民産の興隆を慮り爰に内國勧業の博覽會を開く、維時明治十八年八月二十一日、會場の建築成るを告ぐ、貨物陳列、完きを稟し、鸞輅親臨、開場の盛典を舉ぐ、伏て惟るに博覽會の効績たる、大に農工の技藝を奬め、殊に智識の開進を資け、隨て貿易の宏圖を介け、以て國家の殷富を致す、陛下、叡聖至德の治、夙く已に、此典を舉るに至る、誠に偉大の功業と云ふべし、

退て會場を觀るに、陳列の品類、殆んど四萬、品主の員數、二萬に近し、其産出の佳、製作の美、已に其業の奬勵を徵す、將來、興隆殷富の期、果して立て俟つべきあり。實に此民の勉勉ある、能く其奮勵の効を表す、陛下、叡聖至德の治、蚤く已に、其徵を得る、臣民豈頌を奉らざるべけんや、嗚呼斯の億兆、幸に奎運炳時に遭ひ、萬貨爛熳の場に遊び、觀覽以て其智を進め、討究以て其識を伸ぶ、孰か感憤振興して、陛下、叡聖至德の治に報ふるを思ひ、以て丕績を贊せざらんや、

(しゅ)○蕭氣のせまる
○綿糸のちゞまる
物のしゞまりてちいさくあること敵に地をとられてせまくなること
(むし)○沈水底にある
○湎酒をむやみよのむこと
○淪水中にきひこむ
○鎮うごかぬやうとゞめる
(しく)○敷一面にしきわたす
○布しきのばす
○施しきおよぼす
○鋪しきつめる
○席しきものをしく
○藉下おき
○宣ことばをしきのべる

臣謹で會塲區劃、及び出品目錄を奉呈し、仰て聖主至德の治を頌す。

鸞輅親臨　殷富　億兆
萬貨爛熟

●陳情表

李密

臣密言す、臣險釁を以て、夙に閔凶に遭ひ、生孩六月、慈父背かる。行年四歲、舅母の志を奪ふ、祖母劉、臣の孤弱を憐み、躬親から撫養す、臣少ふして疾病多し、九歲にして行かず、零丁孤苦して成立に至る。既に伯叔無く、終に兄弟鮮なし、門衰へ祚薄く、晚に兒息あり、外に期功强近の親無く、內に應門五尺の童無し、煢々孑立形影相弔す、而して劉夙に疾病に嬰て、常に牀蓐に在り、臣、湯藥に侍して、未だ嘗て廢離せず、聖朝を奉し、淸化に沐浴するに逮んで、前の

○播のべし
(しも)○品それ〳〵にわかつ
○等うの次第
○科わかれをたてゝはめる
○差うれ〳〵ちがふし
(すす)○滴水につける
○滲しみこます
○漬水につけてこぼらず
○浸つけて走まう
○泌そのきめにしみこむこと
○蘭したしましまむと
(むし)○凋水の葉の色のかはること
○蘭くさきのかれたる
○萎草木のやみたるやうなる
○萎しぼみひつくこと

太守臣達、臣を孝廉に察す、後の刺史臣榮、臣を秀才に舉ぐ、臣供養主無きを以て赴かず、會詔書特に下り、臣を郎中に拜す、尋で國恩を蒙り、臣を洗馬に除す、猥りに微賤を以て、東宮に侍するに當る、臣首を隕すも、能く上報する所に非ず、臣具さに表を以て聞し、辭して職に就かず、詔書切峻、臣の逋慢を責めて郡縣逼迫、臣の上道を催し、州司門に臨むこと、星火より急なり、臣詔を奉じて、奔馳せんと欲すれば、則劉の病、日に篤きを以てし、苟も、私情に順はんと欲すれば、則告訴許さず、臣の進退、實に狼狽を爲す、伏して惟るに、聖朝孝を以て天下を治む、凡そ故老に在ては、猶ほ矜育を蒙る、況んや、臣の孤苦あるをや、尤も特に甚たしと爲す。且臣少ふして、荒朝に事へ、郎署に歷職す、本官達を圖て、名節に矜らず、今臣亡國の賤俘、至微至陋、過て拔擢を蒙る、

(しゆ)○強むりにする
○誣むたいをいひかける
(しめ)○示直にされをさして
○見目につくやうにする
○覩見物させる
○呈もちだしてみせる
(ごと)○事ものごとをする
○爲身につけてすること
○藪わざを身につける
○業業ともるしごと
(しか)○叱きめつける
○呵やりこめる
○咄氣をつける
○喝こえをはりあげていふ
(したる)○滴しづくのぼつ〳〵
○溜あまだれのおつる
○瀝しぼりしるのおつること
(しぼ)○絞しめしぼる
○搾しめ水にてしめる
(しろ)○白外の色あくきよきこと
○皚雪の白きこと
○皙美人の白きこと
○皤鳥の羽の白きこと
○皤しらがのこと
○素下地のしろき
(しりぞく)○退あとへひく
○貶官をおとししりぞく
○屈かゞみてあとへひく
○逡かへりしりぞく
○竣しりぞきたつ

豈敢て盤桓して希冀する所あらんや。但以ふよ、劉日に西山に薄り、氣息奄々、人命危淺、朝夕を慮らず、臣祖母無くんぺ、以て今日よ至ること無し、祖母臣無んぺ以て餘年を終ること無し、母孫二人、更々命を相爲す、是を以て、區々として廢達すること能いず、臣密、今年四十有四、祖母劉今年九十有六、是れ臣、節を陛下よ盡すの日い、長くして劉に報するの日い短きあり、烏鳥の私情、願くは養を終へんことを乞ふ、臣の辛苦い獨り蜀の人士及び二州の牧伯、明かよ知らるる所のみに非ず、皇天后土。實よ共よ鑒みる所あり、願くは陛下愚誠を矜愍して、臣の微志を聽さば、庶くい劉、僥倖よして、餘年を保つを卒へぺ、臣生ていい當よ、首を隕すべし、死していい當よ草を結ぶへし、臣犬馬怖懼の情よ勝へず、謹んで拜表して以て聞す。

險釁いくの　閔凶亂　生孩六月半年　零丁おちぶれて　伯叔兄弟
拳々けつけつ外に孤孤たるべく獨り立　孑孑ぽつぽつ　孩孩　孤孤
東宮とう　微賤　賤俘　至微至陋　拔擢
西山よ薄り　羶愍

諸葛亮

●前出師の表

臣亮言す。先帝創業未だ半ばならずして、而して中道にして崩殂す、今天下三分し、益州罷弊す。此れ誠よ危急存亡の秋あり、然るよ侍衛の臣、内よ懈らず、忠志の士、身を外よ忘るゝ者い、蓋し先帝の殊遇を追て、之を陛下に報ひんと欲するあり。誠よ宜しく聖德を開張して、以て先帝の遺德を光し、志士の氣を恢弘すべく、宜しく妄りよ自ら菲薄して、喩を引き、義を盟ふて以て、忠諫の路を塞ぐべからず、宮中、府中俱に一體爲り、臧否を陟罰して、宜しく異同すべからず。若し

○擯中ふりはれだす
○屏人たのける
○拂さりのける
○斥それたさしゝりぞ
○罷やめさりぞける
○却しりぞけとめる
○黜官たとりあげしりぞく

す　部

（すと）○過ずぎとほる
○淫づにはづれて甚しき
○倍それよりぱいまある
○軼車のずをる
○浮もちまへよりすぎたる
（すも）○朴きおのまゝ
○樸あらがれのまゝ

姦を作し、科を犯し、及び忠善を爲す者あれば、宜しく有司に付して、其の刑賞を論じ、以て陛下、平明の治を昭かにすべし、宜しく偏私、内外をして、法を異にせしむべからざるあり、侍中、侍郎、郭攸之、費禕、董允等、此れ皆良實、志慮、忠純、是を以て、先帝簡拔して以て陛下に遺す、愚以らく、宮中の事々、大小と無く悉く以て之に諮ひ、然る後に、施行せば、必ず能く闕漏を裨補して、闕益する所あらん、將軍向寵、性行、淑均、軍事に曉通し、昔日に試用せらる。先帝之を稱して能と曰ふ、是を以て、衆議、寵を舉て督と爲す、愚以らく、營中の事大小と無く悉く以て之に諮れば、必ず能く行陣、和睦優劣所を得せしめん。賢臣に親み、小人を遠くるは、此れ先漢の興隆する所以なり、小人を親み、賢臣を遠くるは、此れ後漢の傾頽する所以なり、先帝在時、毎に臣と此

○質生れのまゝ
○直おひたちぞほり
○淳すあをある
○素きおのと
（すみか）○速早くちちのつく
○迅風のはゝき
○遽むやみにはやき
○遄すぐにくる
○卒にはかある
○趣あはたゞしき
○駛馬のはやき
○疾行くとのはやきま
（ぜい）○都四方より人のあつまる
○凡たいてい
○總のまとす

の事を論じ、未だ嘗て、桓靈に嘆息痛恨せずんばあらざるなり、侍中、尚書、長史、參軍、此れ悉く貞亮、死節の臣なり、庶くは陛下之を親み之を信ぜば、則漢室の隆なる、日を計て待つ可きなり、臣本と布衣、躬ら南陽に耕す、苟も性名を亂世に全ふして、聞達を諸侯に求めず、先帝臣の卑鄙を以てせず、猥りに自から枉屈し、臣を草廬の中に、三顧して、臣に諮るに、當世の事を以てす、是に由て、感激し、遂に先帝に許す、驅馳を以てす、後傾覆に値ひ、任を敗軍の際に受け、命を危難の間に奉ず、爾來二十有一年なり。先帝臣の謹愼なるを知る、故に崩ずるに臨で、臣に寄するに大事を以てす、命を受けてより以來、夙夜憂慮付託の效あらずして、以て先帝の明を傷らんことを恐る。故に五月、瀘を渡り、深く不毛に入る。今南方已に定り、甲兵已に足る、當に三軍を奬帥して、

○渾一つゝして
○統引すべもつ
○管領内をすべもつ
（すし）○少多からぬと
○小ほさき
○么ホさきたいふ
○些すくおきと
○寡數のすくなき
○瑣こまかある
（しず）○涼身におぼへてすゝ
○冷つめたき
○凜身ゝこたへて
○凄ぞっとする
（むず）○進たん〳〵向ふへで
○遂とげゆく

北、中原を定むべし、庶くわ駑鈍を竭して、姦凶を攘除し、漢室を興復して、舊都ゝ還さん、此れ臣の先帝ゝ報いて、而して陛下ゝ忠する所以の職分あり。損益を斟酌して、進で忠言を盡すゝ至りては、則攸之、禕允の任あり。願くは、陛下臣に託するゝ、討賊、興復の效を以てせよ、效わらざれば則臣の罪を治めて、以て先帝の靈ゝ告ぐ、若し興德の言無れば則攸之、禕允等の咎を責めて、以て其の慢を彰はせ、陛下も亦宜しく自ら謀て、以て善道を諮諏し、雅言を察納して、深く先帝の遺詔を追ふべし。臣恩を受けて、感激ゝ勝へず、今當さゝ遠く離るゝゝ當り、表ゝ臨んで涕泣云ふ所を知らず。

諸葛亮孔明　寵弊つかるゝこと　臧否あしきこと　陟罰はめつみする
有司やくにん　偏私かたよりえこひいきのこと　簡拔えらびぬきちふる　愚以らく諸葛亮自ら思ふに
闕漏かけもれ　曉暢さとりつうじてなること　督とりしまり　傾頽かたむきくづれる　眞亮死節

○晉向ふへ入こむ
○勸うの氣ゝあるやう
すゝめる
○薦向ふへうけさす
○燕身を以てすゝめる
○前向ふへでる
○漸向ふへだんだん入
○奏すゝめ上まつる
○奬かくべつにおもい
（すむ）○住そこへ住居する
○棲高き所にやどると
○栖島の木にやどる
○澄水のすみてすきと
○澈すみてうこのみえ
○濟なしをいる
（すく）○拯引とめあげる

後出師表（一節）

諸葛亮

先帝、深く漢賊の兩び立ず、王業の偏安せざるを慮る。故ゝ臣ゝ託するに、賊を討ずるを以てす、先帝の明を以て、臣の才を量る、固より當さゝ、臣の賊を伐つゝ、才弱く、敵彊さを知るべし、然るゝ賊を伐たざれば、王業亦亡びん、惟坐して亡を待つい、之を伐つと孰ぞや、是故ゝ、臣ゝ託して疑わざるあり、臣命を受くるの日より、寢るも席を安せず、食するも味を甘ぜず、北征を思惟するゝ、宜しく先づ南ゝ入るべしと、故ゝ五月、瀘を渡り、深く不毛ゝ入る、臣自から惜まざるゝ非ざるあり、王業の蜀都ゝ偏安す可からざるを願ふ、故

ちょうぎにろつきこと　けらいのこと
驅馳かけまわること　付託たのみ　聞達名利　卑鄙みぶんいや　枉屈まげること　三顧さんたづねること
攘除はらひのける　委酌くみとること　諮諏はかりたづねること　察納かんがへいれること　奬帥はげましひきいること　不毛あれはてたること

○掬　両手にてすくふ
○援　たすけあげる
○救　とりとめる
（する）○摩　手のひらでなでる
○揺　手にてすりこむ
○磨　みがきする
○櫑　もりつぶす
○剿　すりきる
○研　とぎきる
（すふ）○吸　内にもふ
○吮　くちたるものをひとる
○啜　すゝりのむ
○嗜　口にてすう
（たすが）○姿　なりふり
○容　かたち

ゝ危難を冒して、以て先帝の遺意を奉ずるあり、而して議者謂て非計と爲す、今賊適ゝ西ゝ疲れ、又東ゝ務む、兵法ゝ勞ゝ乘ず、此れ進趨の時あり、謹で其の事を陳ぶる左の如し。高帝の明、日月ゝ並び、謀臣淵深、然るゝ險を涉り、創を被り、危ふして、然る後ゝ安し、今陛下未だ高帝ゝ及ゝず、謀臣、良平ゝ如ず、而して長策を以て勝を取り、坐おがら天下を定めんと欲す、此れ臣の未だ解せざる一あり、劉繇、王朗、各州郡ゝ據りて安を論じ、計を言ひ、動もすれば、聖人を引く、群疑腹ゝ滿ち、衆雜胸ゝ塞がる。今歲戰ゝず、明年征せず、孫策をして坐おがら、大ゝ、遂ゝ江東を并せしむ。此れ臣が未だ解せざる二あり、曹操の知計、人ゝ殊絶す、其れ兵を用ゆるや、孫吳ゝ髣髴たり、然るゝ、南陽ゝ困し、鳥巢ゝ險し、祁連ゝ危く、黎陽ゝ偪り、幾んど北山ゝ敗れ、殆んど潼關ゝ死

（ゐど）○傑人にぬけたる百人
○俊　千人にまさる
○最　中で一ぺんすぐれたるものをとりいでゝ云ふ
（けす）○雪　きつぱりとあらふ
○濯　そゝぎあらふ
（ぎう）○棄　やくにたゝぬものにする
○捨　ものにすておく
○去　すてゝわきへやる
○替　すたりほかへゆく
○委　向ふへすてまかす
○廢　すたりもの
○捐　すてゝほかへやる
○釋　すたりてしまうと

せ　部

せんとす、然る後、一時を僞定するのみ、況んや、臣才弱くして、而して危うからざるを以て、之を定めんと欲す、此れ臣が未だ解せざる三あり、曹操五たび昌覇を攻めて、下らず、四たび巢湖を越て成らず、李服を任用して、而して李服之を圖り、夏侯ゝ委任して、而して夏侯敗亡す。先帝每ゝ操を稱して、能と爲すも、猶ほ此の失あり、況んや臣の駑下あるをや、何ぞ能く勝を必せん、此れ臣の未だ解せざる四あり、臣漢中ゝ到りしより、中間、朞年のみ。然るゝ、趙雲、陽群、馬玉、閻芝、丁立、白壽、劉郃、鄧銅等及び曲長屯將七十餘人、突將無前、賨叟青羌、散騎武騎一千餘人を喪ふ、此れ皆數十年の内ゝ糾合する所ゝして、四方の精銳、一州の有する所ゝ非ず、若し復た數年あれば則、三分の二を損せん、當ゝ何を以て敵を圖る可き、此れ未だ解せざる五あり、今民窮し、

(せば)○狹きうくつなる
○隘両方よりつまりたる
○窄中のせばき
○褊みへどのせばき
(せめ)○責るせ〳〵とせめる
○誣とがめる
○誚不足よおもひてせめる
○讓仕方をせめる
○數罪をかぞへせめる
○攻せめつける
(せば)○迫おひつめる
○溥すれつきせまる
○逼うべへせまる
○促うながしせまる

そ　部

兵疲れて、事息む可からず、事息む可からざれば則、駐ると行くと、勞費正よ等ふして、而して蚤く之を圖るよ及べずして一州の地を以て、賊と久しきを持せんと欲す、此れ臣の未だ解せざる六あり、夫れ平らげ難き者い、事あり、昔先帝、楚よ敗軍す、此時よ當り、曹操手を拊て謂ふ、天下已よ定まると、然して後、先帝東し、吳越を連ね西巴蜀を取り、兵を舉て北征し、夏侯首を授く、此れ操の失計よして、漢の事、將よ成らんとするあり。然して後、吳更よ盟よ違ふて、關羽毀敗し、秭歸よ蹉跌し、曹丕帝と稱す。凡そ事是の如し、逆め料る可きこと難し、鞠躬力を盡し、死して後よ已まん、成敗利鈍よ至りては、臣の明かよ、能く逆め覩る所よ非ざるあり。

佛骨を論ずる表

韓愈

臣某言す、伏して以るよ、佛ある者い、夷狄の一法のみ。後漢

(そし)○謗わるくいふ
○訾あちこちないひたてる
○誹人のあしなないひたてる
○譏うたがひそしる
○刺人の耳に入るやうしる
○詆しかりそしる
○訕人の目をやぶりうしる
○短不足をいひたてる
○非非としてうしる
○毀あばちそしる
(そこな)○害ぶをとめる
○賊ころす
○殘やりこなす
○傷きづつける
○損へらしうこなふ

の時より流れて中國よ入る、上古未だ嘗て有らざるあり、昔者、黃帝位よ在る百年、年百一十歲、少昊位よ在る七十九年よして年九十八歲、帝嚳位よ在る七十年よして年百五歲、帝堯位よ在る九十八年よして年百一十八歲、帝舜及び禹の年皆百歲、此の時、天下太平、百姓、安樂、壽考あり、然り而して中國未だ佛あらざるあり、其の後、殷湯亦年百歲、湯の孫太戊位よ在る七十五年、武丁位よ在る五十九年、書史よ其年壽の極まる所を言いず、其の年數を推すに、蓋し亦俱よ百歲を減ぜず、周の文王年九十七歲、武王年九十三歲、穆王い位よ在る百年、此の時佛法未だ中國に入らず、佛よ事ふるよ因て然るを致すよ非ざるあり。漢の明帝の時、始て佛法あり、明帝位よ在る、纔かよ十八年のみ、其後、亂亡相繼ぎ、運祚長からず、宋、齊、梁、陳、元、

○忮もとりそこなふ
（そ）○乖もとりたがふ
○背うしろむきになる
○負恩をわすれる
○叛反たいにする
○倍うれをうしろにする
○畔うらむき
○睽目なそばめる
○反ひっくりかへる
（そ）○備かれてようゐする
○供うなへあたへる
○具首尾のうろふ
○饌食物をうゑへる
（そ）○沃うれにしみこます
○灌うゝぎかける

魏以下、佛ょ事ふること漸く謹み、年代尤も促る。惟梁の武帝、位ょ在ること四十八年、前後三度身を捨て佛ょ施し、宗廟の祭、牲牢を用ゐず、晝日一食菜果ょ止まる、其後竟ょ侯景の逼まる所と爲り、臺城ょ餓死して、國亦尋で滅す。佛ょ事へて、福を求め、乃ち更ょ禍を得、此ょ由て之を觀れば、佛、事ふるょ足らざること亦知る可し、高祖始めて、隋の禪を受け、則之を除かんと議す、當時の群臣、材識遠からず、深く先王の道、古今の宜を知て、聖明を推闡して、以て斯弊を救ふこと能はず、其の事遂ょ止む、臣常ょ恨む、伏して惟みるょ、睿聖文武、皇帝陛下、神聖英武數千百年已來、未だ倫比あらず、即位の初、即人を度して、僧尼、道士と爲るを許さず、又寺觀を創立することを許さず、臣常ょ以て高祖の志必ず陛下の手ょ行いると爲す。今縱ひ即行する能はざるも、豈之を

○濺水をはねかける
○注向へゆくやうにする
○灑水をまきちらす
○瀉ゆくやうにする
○漑田地に水をかける
○滌あがしかける
○洒まきちらす
○揮ふりかける
（そ）○峙山のたちと目にみえる
○岸きしのたちたる
○測かたうばたちたる
○欲とゝりれども上のうばたつ
（そ）○添外物を加へる
○副かゝりのひかへ
○傍よりうふ

恣ょして轉盛あらしむ可けんや、今聞く、陛下群僧をして、佛骨を鳳翔ょ迎へしめて、樓ょ御し、以て觀、昇げて大内ょ入れ、又諸寺をして、遞迎供養せしむと、臣至愚ありと雖も、必ず陛下の佛ょ惑ひ、此の崇奉を作して、以て福祥を祈らざるを知るあり、直ょ年豊かょ、人樂むを以て、人の心ょ狥ひ、京都士庶の爲ょ、詭異の觀、戲玩の具を設くるのみ、安んぞ聖明此の如くょして、而して肯て此等の事を信ずることあらんや、然るょ百姓愚冥ょして、惑ひ易く、曉り難し、苟も陛下の此の如きを見ば、將ょ眞心、佛ょ事ふと謂わんとす、皆云ふ、天子の大聖すら、猶ほ一心ょ敬信す、百姓何んぞ、豈合ょ、更ょ身命を惜むべけんやと、頂を燒き、指を燒き、百十、群を爲し、衣を解き、錢を散じ、朝より暮ょ至り、轉く相傚效して、惟時ょ後れんことを恐れ、老少奔波、其の業次を

○沿つきそふ
(そも)○剃かみたゝりのける
○鶏鳥のそれる
○反るらへひつくりかへる
○挺中をぬけいでる
(そも)○空からあるもの
○虚むほそら
○天 水土の氣のみちたる氣すみて物あく みゆる處
(むね)○姨れたみそれむ
○憎にくみそれむ

た　部

(たもち)○忽思ひしよりはやき
○乍さつるく
○倏はやきと
○奄いつかもう

棄ん、若し即ち禁遏を加へずんば、諸寺を更歴して、必ず臂を斷ち、身を燭として、以て供養を爲す者あらん、風を傷り、俗を傷り、笑を四方に傳ふ、細事に非ざるあり、夫れ佛は本夷狄の人、中國と言語通せず、衣服製を殊にし、口に先王の法言を言はず、身に先王の法服を服せず、君臣の義、父子の情を知らず、假如、其身今に至て尚ほ在り、其國命を奉じて、京師に來朝せば、陛下容れて而して之れに接するに、宣政一見し、聘賓一設し、衣一襲を賜ふに過ぎず、衛て而して之を境に出し、衆を惑わしめざるあり、況んや、其身死して已に久し、枯朽の骨、凶穢の餘、豈宜しく宮禁に入れしむべけんや、孔子曰く、鬼神を敬して、而して之を遠くと、古の諸侯、弔を其國に行ふ、尚ほ巫祝をして、先づ桃茢を以て、不祥を祓除せしめ、然る後に進で弔す、今故あく、朽穢の物を取て、

(たちまち)○直まつすぐに
○徑ちかみちにらちあく
(たゝ)○叩首を地につける
○扣うつと
○欷たゝきいる
○敲たゝきいる
○皷たゝきて音をたず
○椓つゝきうつ
(たず)○原もとつきたづねる
○温前のことをたづねる
○尋めとからたづねる
○踪あとをたづねる
○繹糸口をさがす
○討たづねもとめる
(たの)○憑入にもたれる

親臨之を觀る、巫祝先きたゝず、桃茢用ひず、群臣其の非を言はず、御史其の失を舉げず、臣實に之を恥づ、乞ふ此の骨を以て、之を有司に付し、諸を水火に投じて、永く根本を絶ち、天下の疑を斷ち、後代の惑を絶ち天下の人をして、大聖人の作爲する所、尋常に出ること萬々あるを知らしめんや、豈盛あらざらんや、豈快あらざらんや、佛如し靈ありて、能く禍祟を作さば、凡そ殃咎あらん、宜しく臣の身に加ふべし、上天鑒臨す、臣怨悔せず、感激懇悃の至に任ゆるあし、謹んで表を奉じて以聞す。臣某誠惶誠恐。

◎書類

書は其用最も廣し、書、記、啓、簡、狀、疏、牋、劄等總稱して書記とも云ふ、書は舒あり、其言を舒べ布きて、之を簡牘に陳ぶるあり。記は志あり、己の志を進むるを謂ふ。啓

○頼うしろだてにする
○估あてにする父のこと
○特同上毋のこと
（たゞ）○正まむきにする
○尹をさめたゞす
○規法を以てたゞす
○糾ぎんみする
○搭またへさせる
○督ゆたんせぬやうにする
○訂あやまりをたゞす
○匡ほろぼやうにする
○董督と同じ
○質ゐへさだむ
（たる）○垂下へさがる
○低ひくゝさがる

い開あり其意を開き陳ぶるあり、又曰く跪あり、跪きて之を陳ぶるあり、簡い略あり、言い其大略を陳ぶるあり、或い手簡と云ひ、或い小簡と云ひ、或い尺牘と云ふ、皆簡略の稱あり、狀の言たる陳あり。疏の言たる布あり、以上六体あれども、概言するゑ書記の体い、本、言を盡すゑわり、故ゑ宜しく條暢ゑして、以て意を宣べ、優柔ゑして、以て情を暢べしむべし、乃ちこれ心聲の献酬あれべあり

●李鴻章の負傷を慰問するの書　　佐野　常民

去年以來、兩國兵を搏へ、生民の不幸是れより大あるい莫し、而して本社の痛嘆亦た何を以てか、之れゑ加へん、抑、本社博愛慈惠の主義を以て、彼我の傷病兵を救護し、敢て厚薄わる莫し、幸ゑ今閣下、訂和の欽命を啣み、遠く我邦ゑ來り、我

（たてまつる）○獻物を上へたてまつる
○上同上
○奉大切にして
○貢すゝめあげる
（たゞし）○方はかりくらぶ
○亢とり合あたる
○較ならべくらぶ
○抗はり合ふ
（たつと）○尚うへにしてたつとぶ
○崇あがめる
○上上としとりあつかふ
○尊ゐんけいする
○貴上品とする
○宗正しとする
（たか）○高上にみあぐる

が大臣と樽俎會見、將さゑ慘澹の雲を排して、而して雍熙の日ゑ復せんとす、何ぞ圖らん、無賴の兇豎敢て狂暴を逞ふし、以て貴体を傷けんとい、驚愕慨嘆、何ぞ已まん、但幸ゑ創痍の微あるを聞き、差以て自ら安ず、伏して祈る、千萬加養、速ゑ平癒ゑ就かんことを、爰に社員十餘萬人ゑ代り、聊か慰問の意を表す敬具。

本社は赤十字社なり、佐野氏は其社長なれゝなり　慘澹たる世界　兇豎わるもの

●林長孺ゑ與ふる書　　長野　豊山

長孺足下、天氣晴和、想ふゑ、高園の梅花、已ゑ香を吐き、人を襲ふ、弊舍逼促、寒梅一株あり、未だ花を開かず、人をして懊惱せしむ、病中無聊、以て日を消遣する無し、聞く足下、家ゑ石刻の米書、天馬賦を藏すと、知らず、僕ゑ借觀を許すや否や、凡そ法帖、書畫い、雅士の珍秘する所、肯て輙く門

○隧中のたかき
○喬木のたかき
○卓あみよりすぐれた
（たが ひに）○互入りまぜてたがひに
○迷かハるゝ
（つた）○有我ものとする
○存心をたもつ
○保やすんぢたもつ
○持とりたもつ
（たつ）○立すハりのつく
○建おとしすへる
○起おきたつと
○樹うゑたてる
（よた）○賜上より下されもの
○貺あたへる

を出さず、古人皆然り、況んや足下が藏する所い、石刻の佳ある者、而るよ僕妄りよ求む、猶ほ劉玄德の、荆州を借るがごとし、足下必ず其の還さゝるを疑ひ、以て僕の人情よ近からざるを笑いん。然れども、僕老て且病む、久しく世俗の鄙棄する所と爲る、獨り賴よ足下還、一二清雅の士、過りて之よ存するあるのみ、僕奚ぞ敢て俗士よ求めん、幸よ足下之を亮せよ、帖い一月を留めて、乃ち奉還せん、儻し賤介よ付し來らぺ、尤も妙と爲す。幷よ梅花一枝を惠まるれぺ更よ妙と爲す。

足下人を尊呼する詞　米書の書家の書あり　米元章と云ふ有名　あたと云ふ意　遐促せきとと　懊惱おやむこと　無聊たいくつなること　鄙棄いやしみすてること　賤介おのれのつかひのものをいふ　珍秘ひざうすること

●象山先生より與ふるの書

吉田　松陰

矩方の先生より見ゆる、小林虎三、實よ矩方の爲めよ謁を行ふ。

○賚下したまふ
○賞ほめあたへる
○錫下されもの
○給あたへる
（たを る）○倒さかさになる
○仆頭の方が地につく
○僵たをれたりかへる
○殪、ころしたをる
○斃死ぬと
○踣つまづきたをる
（たす）○助たしにする
○佐身を入れてたすける
○援すくひたすける
○扶たすけころばぬや うよする
○翼つばさとなりたすける

虎三、年齒、矩方と相齊し、而して名稱も、亦矩方と偶々同じ、但虎三いゝ才華よして、矩方い則ち才粗、是を異と爲すのみ、之を終ふるよ、虎三い、先生よ因て、罪を獲、而して矩方い、則ち罪を以て先生を累いす、先生い天下の士、矩方獨り先生より負くのみよあらず、又天下より負くあり。且矩方、國の爲めよ、報を圖り、父母を顧みず、謂らく、忠孝兼ね難きこと古よりして然り、何ぞ獨り、吾のみあらんや。父母未だ老ひず、功成て歸る、猶ほ就養よ及ぶ可し、今乃ち事蹶づき、身敗れ、囹圄よ幽囚せらる、家山咫尺あるも、父母を拜するよ由おし。父母をして、吾を憂へて措かざらしむ、其忠孝よ於ける、亦何をか說かん、頃ごろ益〻古書を把り、之を讀み、竊よ順受素行の說を慕ふ、是よ於て、身萬々怨憫する所おし、但君父より辜負し、忠孝並び闕く、而して離群索居久しく師友

○輔ひかへとりたすける
○亮たすけみちびく
○介中にぬてもつと
○資もとでとしてたすける
○贊ちゑをつける
○右右手とりたすける
○相手引となりたすける
○賻死者のたすけに物をおくる
○宥欲食のたすけ
（たが）○差ありやこちにちがふ
○參入りまざる
○違はあれうむく
○武あてのはづれる
（ため）○採まげると
○嬬うの方ゑ向かへせると

み違ふ、得る所を質して、而して疑ふ所を叩くを得ず、退て自ら憂戚するのみ。既ゑして自ら奮て曰く、天地未だ全く吾を棄てず、吾猶ほ以て天地ゑ報ず可し、今日繫縲嚴ありと雖も、家ゑ父兄あり、頗る書を讀むを知り、矩方の爲めゑ多方營辨し、書籍を贈致し、閑ゑ居て、精研するを得、獄中法あり、墨を用ひ燈を點じ、及ひ外人ゑ交通するを得ず、而るゑ獄吏、矩方の志を憐れみ、假借して、禁を開く、一二の友人、稍書信の往來を得、是れ皆人力ゑ非ざるあり、而して文を著し、道を論じ、猶は以て四極を未廢ゑ立て、九州を未裂ゑ補ふ可けんか、去年九月十八日、郵街の獄を出で、奉行の署ゑ詣り、斷を受く、奉別の時、官吏座ゑ滿ち、言を發す可からず、一拜して去る。今乃ち隔地三百里、鶴唳鴈語を聞く毎ゑ、俯仰低回自ら措く能はず、因て憶ふ、獄を出づるとき、先生矩方

（たつ）○絶きれたえると
○斷同上
（たけ）○酣さめるこゝろの中ば
○闌酒の中すぎて來の方
（たの）○樂心ののびると
○娛なぐさむ
○嬉心のうきたつ
○愉氣をかへてたのしむ
○悰氣ののびると
○憂うれひのなきと
○耽たのしみのすぐると物にふけると
（たけ）○武ひかぬと
○猛はげしきと
○獰おそろしきやうす
○猖あばれる

を願み、懇ゑ著作を以て勉めらる、言猶は耳ゑ在り、愈〻益〻淬勵す、向ゑ巍川賢介の都ゑ在るを聞き、藩人久保清太なる者の東役ゑ因り、著す所の幽囚錄一卷を附し、意緒を座下ゑ達せんと欲す、果して能く達するや否や、頃ごろ、白井小助、東遊し、先生ゑ從はんと欲す。因て此の書並ゑ文稿一卷を附し、以て諸を座下ゑ達す、亦果して能く達するや否や、獄中事を謀る、多くい意の如くあらず、皆幸ゑして達するを得ば、痛く叱正を賜へ、望む所ゑ非らざるあり、時維れ秋冷、伏して惟みるゑ、天下の爲めゑ萬々自重せよ。

年齒（ねんし）　偶々（たまたま）　就養（しようやう）　囹圄（れいご）　幽囚（いうしう）
家山（かざん）　咫尺（しせき）　怨憫（えんびん）　辜負（こふ）　離群（りぐん）
棲居（せいきよ）　繫縲（けいるい）　多方營辨（たはうえいべん）

受く（うけ）　斷（だん）を

○勇ひるまぬと
○豪氣の大なると
○威畏ろしきと
○俠男だて
○獗猖と同じ
○獷氣のあらきと
（たえる）○耐こたへると
○勝ぢとまでもゆく
○堪うけこめる
○任うけになふと
○能見ごこにする
○禁さきへやらぬと
（たく）○工そのことはりにする
○巧上手なると
（たて）○縱すおよくとほりたると

●林定卿に復するの書　　篠崎　小竹

往歳兄の始めて來訪せらるゝや、僕未だ兄の志士たるを知らず、率爾問ふに、山陽の米價を以てす、兄瞠目辭し去らんと欲するも、僕が年長を以て、姑く且應答す、昔者桓溫、關に入る、王猛來り見ゆ、溫問て曰く、吾、命を奉じ、賊を除く、而るに三秦の豪傑、未だ至る者あらざるゝ何ぞやと、朱子曰く、溫、眼中人を知らず、三秦の豪傑ゝ、猛に非ずして誰ぞ、溫問を失す、此れ猛の就かざる所以なりと、僕今之を思へば、溫、猛を識る能ゝずと雖も、始めて禍を被むり、亂を捫るの人に遇ひ、乃ち問ふて三秦の豪傑に及ぶ、未だ大失と爲さゝるなり、僕の兄に於ける、妄りに意ふ、備中の賈人にして、旁ら讀書を好むのみと、其の志を坐談の間に察する能ゝず、即ち山陽の米價の貴賤を問ふ、其言を失する何ぞ啻に溫の猛に於

○經はたのたて
○竪たてにたつと
○表南北を云ふ
（はたよ）○著つかはすにたゝへる
○貯つゝみたくわへる
○儲用心にのけおくと
○飯食をたくわへる
（ひたと）○匹ならびをると
○配あふと
○妃つれあひのと
○儲四人を云ふ
○倫すぢのみだれぬと
○儕ともれ〳〵のたぐひ
○比ひとしくならぶ
○類ゐのしゆるゐ

けるが如きのみあらんや。兄の瞠目辭し去らんと欲するや宜あり、兄ゝ乃ち僕の年長を憐みて、姑く且應答す、爾後源々書を寄せ、文を示し、僕をして商量せしむ、猛の溫を絕つに比せず、僕是に於てか、兄の志す所、必ず能く成すあるを識るあり、何ぞや、夫れ辱に遇ふて、憤る者ゝ、氣節あり、情を以て怨する者ゝ、隱忍あり、其れ唯隱忍にして、然る後、其の氣節を遂ぐ。故に子房の愕然として、黃石公を擊たんと欲する者ゝ、氣節あり、其の跪きて、履を進むる者ゝ、隱忍あり、東坡ゝ、其の氣節を抑へて、其隱忍を揚ぐ、然るに隱忍ゝ、氣節を遂ぐる所以あり、故に氣節あつて、而して後に隱忍を論ず可し。兄此の兩者に於て、既に能く子房を學ぶ、僕の覥然として、授くる所、石公の若き者ある能ゝず、恥づ可きの甚だしきに非ずや。然りと雖ども石公の子房に授くる、東

(たひ)○平たかひくのなき
○坦平らにてきわりの
なきと
○夷平地のと
○扁ひらたきと
(たぶる)○戯しよきにたわぶる
と
○誠ことばにたわぶる
と

ち　部

(ちる)○散はなしてちれると
○渙とけはなれると
(ちりけ)○鏤毛ぼりをすると
○鍍はりつけると
(ふちか)○磨かわちじとちかふ
○矢ゆくすえきわめち
かふと
○盟じと神ゆかるま
かけてち
かふと
(しちか)○近間のきほかちぬと

坡わ以て書ゑ在らずと爲す、兄若し此ゑ悟るあらば、則ち或わ僕の前日、米價を問ふの未だ必ずしも、兄を辱しめ、而して恐々す可きゑ非ざるを知らん乎。伏して望む、努力して、以て其の志す所を成せ。

瞠目めをみはるをりすをはも　靦然はづるかたちなり　恐々いかること

菅茶山先生ゑ上るの書

頼　山陽

頼襄謹て、再拝して、菅先生の座下ゑ白す、日ゑ尊誨を承く、藩識襄をして官ゑ就かしめ、待するゑ好爵重俸を以てせんと欲す、襄わ朽廢の人あり、而して收錄を蒙むる、之れ己を知る者と謂わざる可からざるあり、襄して之を考ふるゑ、襄を知らざる者あり。襄唯仕ふるを欲せず、是を以て此ゑ在り、襄をして仕へんと欲せしめば、則ち父母の邦ゑ在るあり、邦君仁恕細故を捐舍せず、之ゑ加ふるゑ推輓人あり、則ち襄をして

○適こちらへよりてち
かきと
○親ちかゴきしたしむ
○殆そのきわゑあやうた
ると
○庶それに及ばんなれ
がふ
○幾手のとゞきそうな
る
(ちむ)○縮ちゞまると
○短みぢかくなると

つ　部

(いむ)○慎物をつゝまつにせぬ
と
○謹大事にすると
○敬うつかりせぬと
○敕いましめると
○虔つゝしむと
○祗心につゝしみもつ
と
○莊をごろかにつゝし
むと

仕ふるを欲せしめん乎、身言を修飾し、毀譽を顧慮し、凡そ以て祿を干む可き者わ、何ぞ爲さゞらん、夫れ父母の邦わ、義の當ゑ仕ふ可き所、之を欲せずと謂ふを得ず、而して能わざる所あり、襄わ天質多病、疎放、習を爲し、衣裳を整ふる能わず、久座する能わず、屈伸する能わず、起臥を時ゑする能わず、從て入り、從て出る能わず、諾沮、齟齬、不情の言を爲して以て相應答するゑ至てわ、尤も能わざる所あり、饒令少しく忍んで、或わ恒人ゑ異らざるも、久く之を忍べば、則其氣を結畜し、發洩する所おくんば、必ず心を喪ひ、狂を病み、身家兩ながら敗て、國ゑ益おからん、是れ亦何ぞ仕を取らんや、天下の士、誰か其國恩を被らざらん、襄の如きわ、則最も重しと謂ふ可し、襄の家先登斬首の功あるゑ非ず、積日累歳の勞あるゑ非ず、家翁の身ゑ及んで、古文ゑ遭遇し、布

○嚴同上
○怕　かたのとはりたがいぬこと
○毖　氣をつけること
○愿　物を大切にすること
○兢　いましめつゝしむこと
（つと）○力　ちから一ぱいのこと
○勉　精をだすこと
○努　氣をはること
○勤　せいだしてすること
○孜　つとめやまざること
○務　力を入れてつとめること
○强　しひてつとめること
○懋　せんぐりよしてつとめる
（つね）○常　いつも同じくゆくこと
○恒　平生あり

衣より起て、朝班ゑ上り、遂ゑ師範の任を忝ふするゑ至り、撫存待遇至らざる所あし、襄常ゑ其感激報を思ひ、蹇々として怠らざるを見る、襄たる者、安んぞ、力を竭し、身を致して以て其志を繼がざる可けんや。抑人各〻能あり、不能あり、自ら能する所を量り、之を終ゑ要すれぺ、身い朝ゑ列せずと雖も、或い以て尺寸の報を圖るゑ足らん、是れ襄の燕息年を度る所以あり、今乃ち顧みて、他邦ゑ通耕委蠻す、是れ胡爲るものぞや、襄をして禽獸たらしめぺ、則可あり、苟も亦人あらぺ、則何の心か之ゑ處せん、亦何の面目あつてか、以て天下の人ゑ見ゑん、襄の國を出る、已ゑ心ゑ誓ふ、百喙交々說くと雖も、斷々乎として遷らず、襄を知らざる者、亦曰く、彼れ小ゑ事ふるを欲せざるありと、襄特ゑ其義を以てするのみ、義已ゑ爲す可からずんぺ、賀薩をして來聘するあらしむるも

○庸　ふだんかいらぬこと
○雅　しきたり
○經　つれにかいらぬな
○每　それも〳〵の意あり
（つゞく）○連　つゞくこと
○聯　たゞずにつゞくこと
○列　そろへならぶこと
○行　あみを立てならぶこと
（つよ）○贖　財を以て罪をつくこと
○債　財をつくなふこと
（つゞ）○續　つゞきあへること
○次　つぎ〳〵にあつてゆくこと
○嗣　世をつぎゆくこと
○紹　業をつぐこと
○繼　あとをつぐこと

就かず、況んや其能いざる所あるをや、此ゑ鶴を養ふ者あり、其病で蹁躚する能いざるを憐み、籠を開て之を放つ、羽翮摧殘、澤ゑ飲み、藻ゑ啄む、或者諸を彩籠ゑ收めて飼ふゑ稻粟を以てせんと欲するも、鶴い願いざるあり、籠を出で、籠ゑ入る、彼れ焉ぞ願いんや、鶴をして籠ゑ甘ぜしめぺ、則ち何ぞ必ずしも、故主を辭せん、故主を辭して以て往く、雲を凌ぎ、霄を翀く、皆其の賜あり、今襄亦將ゑ其賜を全ふせんとす、襄をして姑らく其性を捨てしめんと議するゑ至てい、則獨り襄を知らざるのみあらず、乃先生の以て襄を畜ふ所以の意を知らざるあり、果して然らぺ、何を以てか自ら士林ゑ稱せられんや、夫れ人、好を以て來る、好を以て報ぜずんぺ、必ず大ゑ其意を傷いん、先生人を愛し、才を憐み、量江海の如し、必ずや盡言ゑ怒らざらん、是を以て、冒昧此ゑ至る、唯

○亞そのつぎなること
○接つぎあハすこと
○襲かさねつぐこと
（つく）○突面へつくこと
○衝つきあてること
○搗つきつぶすこと
○舂うすにてつくこと
（つく）○貼はりつくこと
○就よりつくこと
○託まかせつくこと
○隷つきしたがふこと
○附よりつきたること
○服身につけること
○傅つきそふこと
○著つきてはなれぬこと

先生之を恕亮せよ、謹白。

司成林公ゑ上るの書

安積　艮齋

信謹て啓す、前月初八日、曾翰、門人森田生より達す、驚喜抃躍、天より飛墜するが如く、伏て台侯の清穆あるを審ゑす、曷ぞ慶慰ゑ勝へん、公職重く、事殷ゑ、密勿暇あらず、而して眷愛を垂れ、翰教を數百里外ゑ賜ふ、信不肖、何ぞ以て之を得たる、抑亦三十四年の舊知を辱ふするゑ由るのみ、感喜喻ふる所を知るゑし。恭く承く、前月天使ゑ伴接し、隅田川彩艦の遊びありと、高聲三首を惠示す、竊沐拜觀、一時遊賞の盛を想見す、人をして神往ゑ勝へざらしむ、而して詞藻精妙、風流を莊重の中ゑ含み、清雅を肅穆の間ゑ寓す、所謂毫髮遺憾おく、波瀾獨老成ある者、僭批の命ありと雖も、信が鞏嘆を容るゝ所ゑ非ず、且つ尋常の什と同じからず、故

（つか）○仕事をつくしつかへること
○事力をつくすこと
（つく）○包中へつゝむこと
○裹まいしてつゝむこと
（つまびらか）○審たしかなること
○詳めんみつなること
（つか）○官やくのもちまへのこと
○司とりさばくこと
（つかさ）○主主となりてとりあつかふること
○府物を入る、處
○掌手に入れてあつかふこと
○典支配すること
（つま）○曲かゝをほりにもるあと
○具そろへたること
（つく）○譴そこをたゝきのこらす

ゑ敢て趙璧を留て、幣邑の文を好む者をして、拜觀せしむ、幸ゑ諒照を賜へ、餞送の尊製和韻甫めて成る、但辭陋く意複す、章法次第おし、公の刪正を經て、然して後、淨寫して奉呈せんと欲す、故ゑ敢て草稿を以て左右ゑ達す、賜ふ所の貝原益軒の君子訓三冊、言近く、旨遠く、頗る世教ゑ裨益あり、亟ゑ弊藩の子弟をして、之を誦し、力を實學ゑ用ゆるを知らしめん。其嘉惠を承る、獨り信のみおらざるゑし。弊藩の士、宜時雨松一筥製粗ゑして味ひ淡く、左右ゑ獻ずるゑ足らず、然れども、都ゑ在るの日、公談の次、之ゑ及ぶ、蓋し公の膏粱を喜ばずして、唯淡是れ好む、亦盛德の一事のみ、故ゑ附呈す、信奉別、昨の如きも、倏ち數月を踰ゆ、今昔を俯仰し、之が爲ゑ慨然たり。曹子桓の云ふ所、風流雲散し、一別雨の如き者、百世を曠ふして、而して相感ずるゑし。維れ時冷氣淅

○悉　一から十まで
○殫つくしてみおにする
○殲ほろぼしつくす
（つら）○貫とほすこと
○穿穴をうがつこと
○攫手をとほすこと
○串くしにさすこと
（つか）○疲やせつかれる
○勞つかれてうけられぬ
○憊氣はりのなくなりたること
○老血氣のよわりたること
（つな）○繫つなぎつけること
○維つなぎとめること
○羈いなをつけてひくこと
○縶馬の足をつなぐこと

然、千万保啻して、以て區々瞻仰の心を副へよ。信頓首再拜。

●獵を諫むるの上書　司馬　相如

臣聞く、物同類よして、而して殊能ある者あり、故よ、力い鳥獲を稱し、捷い慶忌を言ひ、勇い賁育を期す。臣の愚暗ある、竊よ以爲らく、人誠よ之れあり、獸も亦宜しく然るべし。今陛下好んで險阻を凌ぎ、猛獸を射る、卒然として軼才の獸よ遇ひ、不存の地よ駭き、屬車の清塵を犯さば、輿轅を還すよ及ばず、人功を施すよ暇あらず。鳥獲逢蒙の伎ありと雖も、力、施し用ゆることを得ず、枯木朽株盡く難を爲ん。是れ胡越觳下よ起つて、而して羌夷軫よ接するあり、豈よ殆からざらんや、萬全患あしと雖も、然れども、本と天子の宜しく近くべき所よ非ざるあり、且つ夫れ清道して、而して後よ行き、中路して而して馳するも、猶ほ時よ銜橛の變あり、而るを況んや、豐草を涉り、丘墟よ騁せ、前よ利獸の樂みありて、而して内よ變を存するの意あし、其の害たるや亦難からざらんや。夫れ萬乘の重きを輕んじて、以て安と爲さず、而して萬よ一危あるの塗よ出るを樂で、以て娛と爲す、臣竊よ陛下の爲めよ取らざるあり。蓋し聞く、明者い、未萌よ遠見して、而して智者い危を無形よ避くと、禍い故より多く隱微よ藏れて、而して人の忽よする所よ發する者あり、故よ鄙諺よ曰く、家よ千金を累ぬれば、坐するよ堂に垂せずと、此の言や、小ありと雖も、以て大よ喩ふべし、臣願いくい陛下の意を留めて幸よ察せられんことを。

（わた）○蹶ふみはづすこと
○蹉足のわきへはづれること
○跌ふみはづすこと
○躓つまづくこと
（ひら）○費定まりたる外よいること
○潰物がつぶれること
○弊役にたいぬやうに
○冗かどのつぶれること
（つみ）○罪とがをつけること
○辜つみのあをつける
（つげ）○告いひきかす
○誡はかりつぐること
（つく）○作わざをしおこすこと
○造ものをつくりだすこと
○爲りの事をしてゆくこと

●上樂翁公書　賴襄

布衣賴襄謹再拜白

少將樂翁公閣下、襄嘗讀宋蘇轍上三韓魏公書、

○塑つくれつくること
(いよ)○強うけたへること
○毅やりつけること
○勍きゝへつつがること
○遒ぢこまでもゆくこと
(つたなし)○怯おくび病おること
○拙わざのへたおること
(つか)○掴わしづかみよする
○攫爪にてつかむこと
(むす)○撮ゆびを合せもつこと
○摘つまみたすこと

て　部

(てら)○照ともにてらす
○映光のうつること
○燭向ふをてらすこと

愛レ之、以為自レ古進三言於二當世王侯一者、大抵有レ求而自售、識者所レ醜、獨轍偉二魏公人物一、比二之名山大川一、欲下接二其言貌一以養中己作文之氣上、言雖レ近レ狂、其濬泊無レ求可レ知也、雖レ然、魏公是時猶當レ路秉レ權、人將レ疑二轍之有レ求焉、閣下、今代之魏公也、而勇退高階、久處二閑地一、使二轍學一所レ為、可二以無レ嫌矣、特貴賤懸絶不四啻如三轍於二魏公一、則徒仰而心嚮レ之而已、今茲、尊嫡君侯膺二幕命一、入朝謝二大拜之恩一、轍伏二在草莽一、側聞二盛事一、而不レ圖邸吏滯二閣下之命一、來就轍家一、取二所レ著私史一、欲レ賜二覽觀一、禮意慇懃、愧悚交至、夫轍不四敢求三レ於二閣下一、而閣下求レ於レ轍、轍之榮大矣、復何所レ嫌而辭避乎、雖レ未レ接二謦欬一、聞二其詞命一、亦可二以自壯一、於レ是忘二其蕪穢一、出

○光肉の光のうつること

と　部

(とどる)○留外へうつりぬること
○止るれぎりにとどまる
○遏とめてやらぬこと
○尼ひきとどむ
○逗とどまりゆかぬこと
○駐馬のたちどまること
○停そこにすへりとどまる
○禁制しとめること
(とふ)○問たづねとふこと
○訪をひたかること
○詢そのあたりをさぐること
○訊ずねをぎんみすること
(とまる)○宿とまりへゆかぬこと

以納二下執事一、又敢有レ所二瀆告一、轍書稱史遷文有二奇氣一、他日自作二古史一、則論二遷之疎略輕信淺陋無識一、夫遷官二太史一、總二領天下文籍一、猶不レ免二疎略之譏一、況如レ轍以二寒陋一一書生一、獨力罔二羅古今一、其不二自揣一而招二大方嗤笑一、必也、然少小嗜二讀國乘一、每病二常藩史之浩穰一、又恨二其有レ闕、至二近代之事、與二夫隆治之所レ由、非レ無二先輩撰著一、又未レ有下晰二其端緒一、綜二各家終始一者上、於レ是私倣二遷史世家一而加二詳備一、斷レ自二源平氏一至レ於二今代一、聞以下中興諸將、及割據群雄關二係治亂一者上、家別紀レ之、或錯而合レ之、要覽二其成敗盛衰之狀、與二臣屬謀戰忠邪之跡一、取二其大禮最明確者一、若夫博引旁搜、辨二析錙銖一、世自有二其人一、以為非轍所レ及也、至二其義例一、蓋

○泊舟のきしにとまること
(とる)○取とりて我方へいれる
○執にぎりはなさぬこと
○收あつめをさめること
○秉とりてよもつこと
○牟むたいにとること
○捫両手にてとること
○採つみとること
○操とりたもつ
○掇とりひろふこと
○把よりもつこと
○捉手の内ににぎりもつこと
○捕よげたものをとらへること
(かふ)○調ほどよくすること
○齊そろひとゝなふこと

亦有下貽二淺陋之嘲一者上、事繫二一性之下一、而不レ有下統紀以總上レ之、列二將家一而雜以二雄長一、舉二今代一而稱謂論說、如下欠二尊崇一者上、是自有レ說焉、夫右族迭興、甲起乙仆、以成二海宇之沿革一、而不四必關三レ於二王室一者、我中世以還之國勢也、故依レ實創レ體、以形二世變一、而其中貫以二帝系年號一、以表二條理一、至二大義所レ繫、必用二特書一、雖レ兩三權豪於二元帥一、隨二成敗一次第、而因二署題一以見二統屬一、而載二之事實一、名分截然、讀者自能見レ之、至レ若二今代稱謂一、則謹據二奕葉名爵天下公行之稱一、名實輕重、按レ跡可レ知、不下敢私撰二名號一、以驟二今代一而眯中後世耳目上、閱レ首至レ尾、睹其得失之相形一、明二其分裂統合之所レ漸、則今日無前之功德、有下不レ待レ言者上、又不四敢喋喋頌贊使三人疑二其

○整りつゝになること
○諧よく和合すること
(とく)○解ときくだくこと
○說ときあらはすこと
○融雪などのとけること
○釋わけをとくこと
(ことば)○所ものをさす言
○處はしよをさす言
(とる)○通道ありてかよふこと
○透すきとおること
○洞ぬきとほすこと
○亨陽氣のとほること
○徹うこまでとほること
○達とほりゆくこと
(とぼる)○遠向ふへとほること

詆與レ盜、自謂敬之至也、凡是褒區區撰述之本意、不レ可レ不下爲二閣下一一中言之上、野人朴直、以二所レ謂無レ求之心一著レ書、取二其簡約一、自便二省覽一、始非レ謀レ公二之世一也、所三以引據剪裁、皆成二一家私乘之體一、至二寫錄體貌一、又一倣二古史一、不三肯學二輓近之文縟一、是以拮据二十餘年、藏二之篋笥一、未二嘗示レ人、今乃得二閣下之寓目一、以取三信於天下後世一、眞意外之幸也、雖レ無レ求レ於二今日一、而不レ無レ求レ於二千百載一、非レ經二大賢之鑒識一、不レ足三以保二其傳一也、然苟得二流傳一、不レ別二今與レ後、其損三益於二世道人心一、尤不レ可レ不レ加レ謹、褒也病羸、不レ能レ効二力父母之邦一、況敢望レ有レ益レ於レ世、然生遭二此極盛之運一、以二其庸陋之筆墨一、裨二補萬一一焉、則不レ負レ爲二太平之民一也、蘇轍謂二魏公一、苟以

○遐はるかよとはきと
（とし）○利よくきれること
○捷手はやきこと
○駿馬のすみやかなること
○敏性しつのさときこと
（とも）○砥にかけてとぐこと
○刪刀などをとぐこと
○磋すりとぐこと
○磨みがきとぐこと
（とき）○時四時の時あり
○秋農事のさいちうあり
（とず）○閉とぢふさぐ
○杜内へ入こまさぬこと
○鎖門戸をふさぐこと
○禁ものをいはれぬやうする

爲レ可レ敎而敎レ之則幸矣、閣下其亦有二以敎レ襄焉、冒二瀆尊嚴一、惶懼無レ已。

文政十年、丁亥、五月、廿一日、布衣頼襄謹再拜白。

●同上譯文

小田深藏譯述

頼襄謹みぬやまひて、少將殿のおまへよまをさく。襄嘗て、宋の蘇轍が韓魏公よたてまつれりし書を讀みて、愛でつゝおもへりける、古より言を時の王侯よ聞えまつれりし者、大かたい求むることわりて、みづから售らんとてありけり。これ識者のいやしとする所よおん。たゞ轍おん魏公の人がらをすぐれたりとて、名山大川よたぐひ、その言をきゝ、その姿かたちを見侍りて、おのが作文の氣を養ゐんといしはべりし。こゐ物ぐるゐほしうこそきこゆめれど、あはゝしくして求

○問とぢとゞめる
○緘糸にて口をとづること
（とら）○囚にげられぬやうとちへること
○捕をひつかまへること
○虜いけどり
○俘軍中にてえるものなり
（しる）○乏つきてゆくこと
○匱なくなりたること
（むとが）○脅しをんじをさがめること
○尤目にたつところをとがむ
（とし）○年年月なり
○歳同上
（とも）○朋道を同じくするなかま人
○友志を同じくつきあふ人
○侶同行になる者

めおかりしい知らるべし。さいへこの時魏公ゐ猶重きつかさよありて、まつりごちつる身おりしかど、世の人ゐ轍が求むるわらんことを疑ゐんばかりみぢかりける。殿ゐしも今の代の魏公よこそ、さはれ世を遁れおはしぬることと久しけれど、襄よ轍がためしよおらはせんも、さりとて疑ゐおからまし。わきて貴き賤しきその品遊よへだゝりて、轍が魏公よ於けるのみかい、徒よ仰きまつりて慕ひまわらするのみよおむ、こと世襲嫡の君の殿よい、將軍家の仰せ蒙らせられ、御門まゐりせさせて、將軍宣下のおぼんめくみのゐやことまをさせ給きとおん。襄むぐろうよゐて、このいみじきことをそほのききまつれりしか、つかさびとの殿の仰せごとうけ給ゐりて、襄がむぐろふおとおはれむとい思ひまうけざることよおん。そゐおのれがものしつる私史を、殿のみそおはさんとてゐり

○遐はるかよとはきこと
(とし)○利よくきれること
○捷手はやきこと
○駿馬のすみやかなること
○敏性しつのさときこと
(とぐ)○砥とにかけてとぐこと
○刪刀などをとぐこと
○磋すりとぐこと
○磨みがきとぐこと
(とき)○時四時の時あり
○秋農事のさいちうあり
(とづる)○閉とぢふさぐ
○杜内へ入こまさぬこと
○鎖門戸をふさぐこと
○噤ものをいはれぬやうする

爲レ可レ敎而敎レ之則幸矣、閣下其亦有二以敎レ襄焉、冒二瀆尊嚴一、惶懼無レ已。

文政十年、丁亥、五月、廿一日、布衣頼襄謹再拜白。

同上譯文

小田深藏譯述

頼襄謹みぬやまひて、少將殿のおまへよまをさく。襄嘗て、宋の蘇轍が韓魏公よたてまつれりし書を讀みて、愛でつゝおもへりけるゝ、古より言を時の王侯よ開えまつれりし者、大かたゝ求むることありて、みづから售らんとてありけり。これ識者のいやしとする所よおん。たゞ轍おん魏公の人がらをすぐれたりとて、名山大川よたぐひ、その言をきゝ、その姿かたちを見侍りて、おのが作文の氣を養ゝんとゝしはべりし。こゝ物ぐるゝほしうこそきこゆめれど、あはゝしくして求

○問とぢとゞめる
○緘糸にて口をとづること
(とも)○囚にげられぬやうとちへること
○捕をひつかまへること
○虜いけどり
○俘軍中にてえるものなり
(とも)○乏つきてゆくこと
○匱なくなりたること
(とが)○咎しそんじをとがめること
○尤目にたつところをとがむ
(とし)○年年月なり
○歳同上
(とも)○朋道を同じくまなぶ人
○友志を同じくつきあふ人
○侶同行になる者

めおかりしゝ知らるべし。さゝいへこの時魏公ゝ猶重きつかさよありて、まつりごちつる身おりしかゞ、世の人ゝ轍が求むるあらんことを疑ゝんゞかりゝゞありける。殿ゝしも今の代の魏公よこそ、さはれ世を遁れおはしぬることゝ久しけれゞ、襄よ轍がためしよおらはせんも、さりとて疑ゝおからまし。わきて貴き賤しきその品遙よへだゝりて、轍が魏公よ於けるのみかゝ、徒よ仰きまつりて慕ひまゐらするのみよおむ、ことし尊嫡世繼の君の殿よゝ、將軍家の仰せ蒙らせられ、御門まゐりせさせて、將軍宣下のおぼんめくみのゐやことまをさせ給きとおん。襄ひぐろうよゐて、このいみじきことをそほのきまつれりしか、つかさびとの殿の仰せごとうけ給ゝりて、襄がむぐろふおとおはれむとゝ思ひまうけざることよおん。そゝおのれがものしつる私史を、殿のみそおはさんとてあり

○伴（とも）のふあり
○俱同（ともし）しやうにすること
○偕相共（ともに）すること
○共事（ともに）を衆（とも）とともにすること
○與相（ともに）〜みてすること
（とび）○飛（とび）はあれちりゆくこと
○霏（とび）そらよりちること

あ　部

（あら）○效（あら）かたにしてまあぶ
○習（あら）ひ手に入れること
○學（あら）けいこすること
○慣（あら）しあれて自由のつくこと
○狃（あら）いつきでもそーとおぼへること
○擬（あら）にせること
（あが）○永終（あが）をあとへひきのばす

けり。その仰せごとのねもごろよゐやある、よよ愧かしくいとかしこくおむ。そも裏い敢て殿よ求め申さゞるよ、殿より求めさせ給へるおれゞ、何を疑ひてかいおみ避け奉らんや。未だ見參（けんざん）よこそえいらね、おほせごとうけたまはれゞ、身の榮よおむ。されゞ其の拙きをもうち忘れ、とういで〜おもとび（取出執事）とまでまゐらせつ。又敢ておほんいさおひをもはゞからで、きこへまいらすること侍（はべ）り、轍の書よ史遷（しせん）の文い奇氣（きき）ありとこそ稱（たゝ）へたれ、後よみづから古史（こし）といふふみを作りいで〜、遷が疎略輕信（そりやくけいしん）よして、いとあさましく、いといやしく、無識（むしき）あるをあげつらひたり。かの遷（せん）いしも太史（たいし）といふ官（つかさ）よて、天下の文籍（ふみ）といふふみをすべあづかれるものから、それだよ疎略の譏（そし）りをおむ免れざりし。まして裏が如き、まことしきしづの一書生（しよせい）の身よて、獨（ひとり）の力（ちから）して古今（こん）のことを集（あつ）めたるをや。おほ

○長形（ながた）あるものゝ長（なが）き
（あげ）○歎（あげ）ためいきつくこと
○嗟（あげ）こえ出し言ひたらぬをいふ
○哭（あげ）かなしみあげく
○慨（あげ）心よなげくこと
○咨（あげ）あげくこと
○慟（あげ）氣（き）をうしおふほどなげく
（あく）○鳴（あく）外へ聲の出ること
○泣（あく）かおしみなくこと
○號（あく）さけびなくこと
○呱（あく）子などのおく聲
○喔（あく）鷄のおく聲
○啼（あく）おぐさめおくきみ
○喨（あく）鶴のおく聲の遠くひびきてきこゑること
（あろ）○馴（あろ）かひならすこと

けおきわざあれゞ、識者の笑ひをまねかんこと疑ひおけれ。さわれいとわかきより、み國乘（くにのり）をたしみて讀みつるが、大日本史（だいにほんし）のいとかさみたるよこうじ、又その闕（か）けぬる所のあるがくちをしく敢おん。近代の事とこの太平の由れる所とい、先輩（せんぱい）の撰者（せんしや）おきよあらざれど、その事の端緒（いとぐち）をときわけて、家々のはじめ、をはりを明かよたゞしつるものおん、まだあらぬ。こゝよ遷史（せんし）の世家（せいか）よ倣（ならひ）、更（さら）よつゞらかよくわしうして、源平（げんぺい）よりしるしはじめて、今の御代（みよ）よをへぬ。その間（ちう）よい、中興（ちうこう）の大將（たいしよう）、割據（かつきよ）の英雄（えいゆう）たちの、治乱（ちらん）よかゝづらへるものをあげ、家毎（いへごと）よとういで〜しるしたるあり、或いまじへあわせたるものあり、こいその成敗盛衰（せいはいせいすい）の狀（さま）と、臣屬（しんぞく）の謀戰忠邪（ぼうせんちうじや）の跡（あと）を覽（み）んことを旨（おも）として、その大體（たいてい）のいとわけく、はかくしさをおん取り侍（はべ）りぬる。かのひろやかよ書（ふみ）を引き、あまねく

○艱むりにこらへる
○迅船の風よおやむと
○難かたきをうける
○名よぶあたりにする
○命なをつけると

よ　部

（似）○似形にいると
○彷同しやうにみゑる
○贋いつはりにせると
○肖やうすのよてみゑると
（荷）○荷兩方に物をおきて中を肩にのせもつと
○擔かたのたへろだけもつとかた肩にすると
（濁）○濁水のすまぬと
○淖どろ〳〵すると
○渾ものゝまされると
○濃どろ水
○混ゝつたりしたると
○渭どろの多きと
（俄）○俄思ひがけなき急の
○卒ふゐのと
○悖存外なると
○頓よはかなると
○遽急卒なると
○暴かくこの外なると
（亡）○亡わきへにげると
○北勝負にまけてはづすと
○逃のがれさると
○逸そこなぬけると
（悪）○悪心にいやに思ふと

り、おべてこれおん裏がいさゝかおもひいりぬと撰述のはい本意おれば、殿のためよこを一言きこえまゐらでは、元こそ侍られぬ。田舍人のさがとして、かざるおくおほかれば、所謂求めおき心もて、書を著しつるよ侍れば、つゝまやかおるを旨として、おのれが見るよ便りよからんよりものし侍り、はじめより世よ出さんとてよいあらざるよおん。書を引きて用ふべきくだりのみ拾ひとりて据りところとしおしたるおど、おべて一家私葉の體をおしつるも、其かきざまうつしぶりは、もわら古史よ倣ひて、近ごろのこまやかよかざれるふみはしもまおいずおん。されどいそしみつとめぬることはたとせゐまりといおりぬ、こをふみぺこよおん藏めておん、いまだ一たびも人よい示さゃりし、今殿のみをおいしをかうふりて、天下後世よ信用を取らんは、まことよおもひもらけぬ幸

よとそ、裏今日よ求めおしとはいへども、百とせ千とせよ求めおきはあらずかし、大賢のおんめきゝを經るよあらずは、いかでその傳らんことをうけもつよ足らん。さはれかりそめよも傳りゆかば、今と後とのけずめおく、世道人心を損益せん、もとも謹みを加へざるべからずおん。裏病みてかよわき身よ侍れば、父母の國よ力を効すこと能はず、まいて敢て世よ益あらんと望み侍らんや。さはれこの榮ゆる御世よしも遭へれゝば、拙き筆もて萬よ一つだも、御世の助けとしもおらましかば、太平の民たるよ負かざらまし。蘇轍は苟も教ふべしとおらば教へられおば幸よこそと魏公よ申しきとおん。殿よもまた裏よ教へ給ふことおはさおん。おほんいさおひを胃しまつるゝこそ、あおかしこ。

文政十年丁亥といふ年の五月はつかあまり一つの日

○憎みくむこと
○嫉りのけたく思ふこと
○醜見にくきこと
(にがし)○苦味の口まにがくしこと心氣まことたえる
(にほひ)○氣ものの通ずる香なり
○香かうばしくかをる
○郁ふきまをひのする
○馨同上

ぬ　部

(ぬる)○塗土をぬること
○填宮室のかべをぬること
(ぬく)○拔ひきぬくこと
○擢ぬき出ずこと
○抽ひきだすこと

中等教育

作文軌範　終

紙裏謹みゐやまひて白す。

○握しごきぬくこと
(ぬす)○盜しのびぬすむこと
○竊ひそかにとること
○偷ものをとゝること
○擇外より來るものをとる
(ぬげ)○脫まぬがれぬける
○逸のがれぬける

ね　部

(ねん)○懇心よこめておもふこと
○欵入こみせはずること
(ねがふ)○願心にまうしたしと思ふ
○學ろれをうけたしとおもふ
○願ねがひねがふ
○幸しあはせをねがふ
(ねぎらふ)○犒ねむかへもてなすこと
○勞くらふなぐさむること
(ねる)○煉火にかけねる
○鍊かねをふきねること
(ねたむ)○妬わが配によせまいをする
○猜うたがひねたむこと
○嫉にくみねたむ
○娟十分自分よりけすへること

(ねむる)○眠心氣つかれて目のふさがること
○睡ねむけのでること

の　部

(のる)○乘のりものにのること
○騎馬にのること
○襲打のせること
○載物をのせること
(のむ)○飲水をのむこと
○呑かまずにのむ
○嚥のみこむこと
○咽同上
○嚼のみつくす
○喫くらうこと
(のぼる)○昇たん〳〵のぼること
○騰地をはなれて上へのぼる
○躋ろの上へのぼりゆく
○陟山などへのぼること
(のこる)○存あるまじきおもへるものがのこりあること
○遺とりおとしあること
○貽あとへのこしゆくこと
○殘そこなひて僅にのこる
○餘食物のくひあまり
(のぞく)○除こちらをのけること
○蠲はちひのけること
○禳いのりはらふこと
○祛とりのけること
(のがる)○逭はづしゆくこと
○遁人の至らぬ處へゆくこと
○逃そのばをはづもこと
○遜のがれゆづること
○逋にげのがること
○竄ひげこむこと
(のゝる)○申屈したるがのびること
○伸同上
○展ひらきのぶる
○舒のびやかなること
○宣しきひろむる
○述あとをのべつくること
○延來るのを永くうけること
○暢草木ののびること
○演ひろめのぶる
○陳いひあらべること
(のぞむ)○望上へみあげること
○臨下をみおろすこと
○莅その事にあづかること

○塑しはじめること
○青はじめてあらはれること
○防ふせぎまもりとどめること
○假かりのもの
○花開はなひらくこと
○孔あなをうがつこと
○木のこと
○酷むごくあたること
○劇はげしく
○絶たえてなくなること
○絶目ぜつもくしること
○過すぎること
○遊あそぶこと
○親しむこと
○沼ぬまのこと

○掛かけること
○除のぞくこと
○拔物ぬきものをすること
○挿さしこむこと
○泡あわのはじけること
○蔓根つるの一面をはること
○走はしること
○奔いそがしくはしること
○翻ひるがへしてにげること
○圍かこむこと
○務つとめること
○駁自由にしゆること

び　部

○引ひきつること
○醜みにくくはずかしいこと
○排おしのけること
○除のぞくこと
○拔物ぬきものをすること
○挿さしこむこと
○泡あわのはじけること
○蔓根つるの一面をはること
○走はしること
○奔いそがしくはしること
○翻ひるがへしてにげること
○圍かこむこと
○務つとめること
○駁自由にしゆること

○鋼こがねつはがね
○櫂物ものをはかること
○衡はかりのこと
○料ものをはかること
○商こめをうりかへること
○付くらにはること
○計かぞへはかること
○測水中のものをはかること
○雅はかりごとをすること
○錠はかりをかけること
○裁きりつめること
○始はじめること
○初はじめてはこのこと
○創はじめてはこのこと
○首はじめのこと

○剛はげしく
○強はげしくつよいこと
○烈はげしくもえること
○厲はげしくはげしいこと
○放はなちすてること
○縱ほしいままにすること
○早はやくはやいこと
○速はやくはやいこと
○沈はやくしずむこと
○疾はやくはやいこと
○速はやくはやいこと

○除のぞくこと
○剝皮をはること
○陸はまとなりのくにのこと
○吐はきだす
○嘔えずきはきだす
○噴ふきだす
○略のぶりはぶくこと
○脹はれふくれること
○膨ふくれること
○貼はりつけること
○脹はれふくれること
○拂はらひのけること
○被はらひのけること
○擦はらひ消すこと

○掌てのひら
○敲たたきはげしくたたること
○剝皮をはること
○陸はまとなりのくにのこと
○吐はきだす
○嘔えずきはきだす
○略のぶりはぶくこと
○脹はれふくれること
○膨ふくれること
○貼はりつけること
○脹はれふくれること
○拂はらひのけること
○被はらひのけること
○擦はらひ消すこと

○者ものこと
○沙水のながれてはてること
○怠なまけること
○惰なまけること
○除のぞくこと
○果はてること
○敗やぶれること
○烈はげしくもえること
○厲はげしくはげしいこと
○放はなちすてること
○縱ほしいままにすること
○早はやくはやいこと
○速はやくはやいこと
○沈しずむこと
○疾はやくはやいこと
○速はやくはやいこと

○曳ひきづること
○牽つなをつけてひくこと
○彎弓をひくこと
○輓車をひくこと
○援たぐりよせること
(ひろし)○廣ひらけたること
○寛ゆつたりしたること
○博はゞのひろきこと
○宏大あること
○弘廣大なること
○濶闊のひろきこと
(ひとし)○等おなじなみのこと
○匹ひとしくならぶこと
○均つきあらしてなり
○侔よくそろふこと

○齊よくそろふこと
○埒なみをそろへること
(ひとり)○單衣のひとへ
○獨さものなきこと
(ひそか)○私ないしよのこと
○密外へもれぬこと
○陰内しよごとよずる
○竊人のしらぬやうにする
○間人目なしのぶきみ
○潛しのびかくるゝこと
(ひきし)○低下へひくきこと
○矮たけひくき人
(ひらく)○開あけひらくこと
○排をしあけること
○披ひらきさけること

○拓をしやること
○啓月をひらくこと
○闢戸びらを左右へひらくこと
(ひるがへる)○飜うらへかへること
○飄風にふきかへされること
(ひきゐる)○師士卒をひきゐる
○率手につくやうにすること
(ひろふ)○拾おちたるをひろふこと
○摺ひろひとること

ふ部

(ふせぐ)○防つゝみふせぐこと
○拒こばみふせぐこと
○捍ふせぎとめること
○禦同上
(ふす)○伏うつむきうやまふこと

○俯うつむくこと
○臥ふこにれること
○仆たをれふす
(ふさぐ)○塞中に一ぱいになること
○杜物ありてとをれぬこと
○壅さゝへふさぐこと
○啖目をふさぐこと
(ふるふ)○振ふりうごかすこと
○揮さしプをする事
○震ふるひうごく
○顫手足のふるえること
(ふくむ)○含口に物をふくむこと
○啣くはへること
(ふむ)○踐あとをふむこと
○蹈足にてふむこと

○履あとをふみゆくこと
○蹂ふみつけること
○蹠ふみとめること
○跆兩足を一處にふむこと
(ふるし)○古ふるきむかし
○故ふるきことにありたるを云
○舊ひさしきいぜん
○陣いくれんともしれぬこと
○二かずのならぶこと
○貳下地ある處へまた一つ入る
(ふかし)○深そこまで間のあること
○玄さきのはかられぬこと
○淵水のふかくたまること
○奥入こみてふかきこと

へ部

(へる)○減少くなること
○耗不足して行くこと
(へだつ)○隔間のあること
○阻中にへだてのあること
(へつらふ)○諂人の氣ゑ入るやうをる
○諛向の氣にあはせること
○阿とりはづさぬやうする
○佞利口を云ひまはす事

ほ部

(ほとり)○邊ぐるり
○濱水のほとり
○畔田のあぜ
○滸水のほとり
(ほがらか)○朗氣のあきらかなること
○豁打ひらけたること

○埴　まがおしたくさこと
○倍　ばいましにすること
○表面　かおり　人のこころのこと
○雑人　ぞうにんしたこと
○錯人　まじること
○参　まじわりまじること
○誠心　まこと　いつわりのないこと
○誠約　まことたしかなこと
○質量　のこと
○定　さだめること
○信　まことにのらはこと
○允　まことはこと
○眞　まことこと
○狗　こまいぬ　くさとらはこと
○丸　まるまるもの

○滅　ほろびること
○燈火　のこと
○吠　ほえる　大のなき聲
○咆哮　のつよき聲
○呼　大に怒る聲
○叱　のなく聲
○美　見　ほめること
○賞　人に見せること
○褒　ほめること
○稱　人にほめること
○稱　ほめること
○頌　ほめうたえること
○益　まことにのこと
○溢　くらこと

み　部

○埋　うめること
○見　目にうつること
○視　見つけること

○埋　うめること
○隱　目にかくること
○視　みること
○親　目にしたしむこと
○看　みこころにかけること
○瞥　目にちらつくこと
○滿　中にいっぱいになること
○盈　みちること
○充　みちること
○塡　ふさぎたること
○実　まことのこと
○漫　みだりなること
○明　あきらかなこと
○猥　みだりなること
○都　みやこのこと

○閨　ねやのこと
○室　むろこと
○瀝　そそぐこと
○待　まつこと
○迎　むかえること
○後　のちこと
○歸　かえること
○守　まもること
○衛　まもること
○戍　まもること
○護　まもること
○布　ぬのこと
○写　うつること
○勝　かること
○優　まさること

○曲　まがること
○鉤　まがること
○疵　きずのこと
○傷　きずのこと
○祭　まつること
○祠　まつること
○祀　まつること
○祈　のまつること
○白　明　あきらかなこと
○申　まうすこと
○真　面　の意味　何　なること
○啓　ひらくこと

む　部

○見　目にうつること
○視　見つけること

○視　みること
○覩　目にみること
○視　みること
○親　目にしたしむこと
○看　みこころにかけること
○瞥　目にちらつくこと
○滿　中にいっぱいになること
○盈　みちること
○充　みちること
○塡　ふさぎたること
○実　まことのこと
○漫　みだりなること
○明　あきらかなこと
○猥　みだりなること
○都　みやこのこと

○元はじめのこと
○素下地のある趣きいろ
○下下の方
○基たいのこと
○故下地からつゞくこと
○本根もとのこと
○戻つゞくこと
○性ものもち
○式きまりのあるもの
○元もとしたがはせる事
○需まつこゝろもち
○須
○要ないがしろにする事
○要まつかなこと

や　部

○答こたへいらへること
○食くひものはじめ
○殺ころすこと

ゆ　部

○巡めぐりまはること
○輔たすけること
○行ゆくこと
○循物にしたがふこと
○周めぐりたすけること
○旋めぐること
○嫁よめとること
○娶めとること

よ　部

○徴召よること
○胖ゆたかなこと

わ　部

○飽目にたつこと
○乱みだれること
○雑ごちまぜたこと
○紊みだれたこと
○紛まぎれること
○自自分のこと
○所かこつこと
○身みうちのこと
○親親同じ

ん　部

○迎むかへること
○邀まつこと
○撫内にたくさんこと
○膳ものこと
○饌ごちそうこと

○和やわらぐこと
○柔やはらかなこと
○溺おぼれること
○育そだてること
○乳ちゝをのませること
○牧野にはなしかうこと
○災わざわひ
○難なやみこと
○膚はだのこと
○保たもつこと
○暴あらあらしき事
○殺ころすこと
○破やぶること
○壊くづれること
○傷きず　怪あやしむこと

○敗やぶれること
○毀こはること
○犯おかすこと
○病やまひ
○疾ながやまひ
○痼病の重のこと
○瘧おこりのやまひ
○焼火たいること
○燬火のもえること
○庵やどりこと
○庵やどりの事

ゆ　部

○行ゆくこと
○往ゆきこと
○適たまたまこと

○之これにゆく事
○宜よろしき事
○豎たつること
○緩ゆるやかなる事
○緩ゆるみたる事
○発おこすこと
○放はなつこと
○許ゆるす事
○有たもつこと

よ　部

○倚よりかゝること
○仍のりしたがふ事
○依よりかゝる事
○仗たのみたる事
○寄ものの如よること